
橋立純の日常

作戦参謀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

橋立純の日常

【Nコード】

N0515L

【作者名】

作戦参謀

【あらすじ】

俺、橋立純はどこにでもいそうな今日から高校生。運動はそこそこでも馬鹿でいろいろとダメ人間、そんな俺の日常だけなので過度な期待はしないでください。

part 1・橋立家

…目覚ましがなる。

今年89歳になるうちの爺さんでの橋立はしだて一三ひつみが俺が子供の頃に暮れた時計だ。もっともただのベルだったり音楽がなる時計じゃなくてラツパが鳴る。

なんでも爺さん曰く昔海軍で使われていた起床…らしいけど俺は寝起きが悪い。なので水兵さんのようにぱっとは起きられないので悪しからず。

「うっ…もう少し…」

扉が慌しく開き、俺の腹部に激痛が走った。

「おえっ！」

「起きろー純！入学式早々遅刻は恥ずかしいぞー！」

このいかにもうるさそうな人は姉の橋立はしだて朋美ともみ、今年で高校2年生で今年から一応俺の先輩という事になる。このように朝っぱらから暴力振るう人です。はあゝ、痛い。

「アホか姉ちゃん！そりゃ下手したら死ぬぞ！？」

「アツハハハ！大丈夫大丈夫！手は抜いてあるし、死ぬことはないと思うし、それにお前男だから腹に踵落としても多少平気だろ？」

「馬鹿馬鹿馬鹿ア！これは男女関係なく人類なら誰でも痛いし病院

送りはおるか墓入りになる可能性あるじゃねーか！それに入学式って午後だろ？なんで俺が今起きる必要があるの？」

「だからだよ！どうせ昼まで寝てるでしょあんた！？…心配してるんだよ、それなりに」

「じゃあ踵落としてはないわあ〜」

俺は腹を押さえながら力のない声でそう言った。

「とにかく起きてさっさと挨拶してきなさい」

「うっ…昨日までとは違う…」

「あたりまえでしょ！明日から毎日この時間に起きないと遅刻よ！」

「へ〜い」

「まったく純つたら〜、本当にダメ男^お」

なんか姉ちゃんがひどい事いつてるし。

つとまあこんな感じでわかったよな？俺がそれなりにダメ人間だつて事。えっ？肝心な事を知らない？名前？名前かあ…いや、もう俺の名前がタイトルだしね。別に名乗る必要がないと思っただすまん。

では簡単に自己紹介すると俺の名前は橋立純^{はしだてじゅん}、中学時代の成績は悪く、高校に入学できて浮かれてる大馬鹿野郎です。大馬鹿つたつてJRの駅3つ、そのあとバス5分で行ける距離に私立桑園学園高等学校、通称桑園高校がある。学費？一番近いと思っただはいい

けどマジ張るね、私立だしね。でもうち店だし、俺の成績からそれなりにお金はストックしてあるっばいから大丈夫。

私立だか設備は充実してるっばいし、学力はまあまあだし、かといつて悪い奴はそんなにいないって話だし、特に女子の制服が可愛くてたまらん感じた。男子？うん、強いて言うならば紺色ブレザーとありふれたものだ。

…あ、全然俺の紹介になつてねえし…

年は今年で16歳、ちなみに公立滑りましたから桑園に入りました。ええ、もう親、特に爺さんに怒られたね、努力が足りんって、うん。

まあそれはともかく運動？まあほどほど？勉強、先述のとおり馬鹿です。性格？面倒くさがりや、口癖？「あくかつたりい」じゃね？別に某Dの主人公意識してるわけじゃねーけど。ってか、可愛い幼馴染とかいないし、いるとしても暴力姉

「はよ来い純！」

「わかつたよあく、いちいちうるせえなあ姉ちゃん」

「だつて寝ちやうかもしれないじゃん！」

「寝ねえよ、あくかつたりい」

俺は頭を掻きながらベットを離れた。

さて、先述のとおりうちは店をやってるっばく、その名は喫茶店「Hashidate」。いいですねえ、主人公の実家が喫茶店って、すごくアレなおいがします。まあ俺男だしそういう展開ないけど。

結構大きな喫茶店で地元はもちろん道内4箇所、本州も数えると結構な数になり、規模は大きくそのせいか父さんは近くの自称「大本营」という場所に釘付けになっている。なので親父はほぼお金を家に送ってくるだけで年に数回しか会わない、母の橋立美智子はしだてみちこは本店で働く主婦でうちの兄貴の橋立勇はしだてゆう（21歳）はかなりのイケメンフエイスで体格もほどとばによく、我が店の看板的存在で女性に人気、そして従業員のたかはしあゆむ高橋歩夢さんは男性に人気だ。

爺さんもいろんな意味で人気キャラらしい。そのほか数名の従業員がいるがもちろん自宅があるからここにはいないぞ？

俺？いや、手伝った事ねーし。

「おはよー」

「お、純、早いな」

この人が橋立元徳はしだてもとのり、俺の親父だ。
50代前半だが40代に見える、でもまあ親父である事には変わらない。
ない。

「どうせ朋美にたたき起してもらったんだろ？」

そう兄の勇は俺を冷やかす。

「うるせー、兄貴は黙ってる」

「ふっ…お兄ちゃんの事は兄貴で私の事は姉ちゃん…か、まだまだ青いね純は」

「馬鹿姉も黙ってる」

「馬鹿って何よ！あんたよりはダントツ頭いいわよ！」

「でも俺と同じ高校じゃんどのみち馬鹿じゃん！」

「大学進学率そここの学校だよ！？校風結構気に入ってるし！あんたなんか一か月で中退しちゃえ！」

「そりゃねーだろ！中退したらお先真つ暗だったの！」

「コラー！朝っぱらから何をやっておる！」

つと出てきた着物の老人こそ一二三ついでみ爺さんだ。

何故に振り仮名を振るって？一二三って読めるか普通？五十六ならまだしも一二三なんて今時いいねーぞそんな人。

「ごめんお爺ちゃん！だって純が」

「そうだな、純だしな」

「ちょ！爺ちゃんまでなんで俺だけ悪者に！？」

「だって勇は今や十分な労働力となるし、朋美も将来有望じゃ、だが純は超おだらけ男！やっぱリワシが海軍精神を叩きこんでやるうか！？」

「いえ結構です！ちゃんと将来働く予定だしとりあえず大学も進学するから勘弁して！」

「うむ、よろしい」

ああ、俺って家でもこうなのだ…なんて不憫な人！俺！
爺ちゃんの叩きこみはマジだからな…伊達に海軍中尉やってなかったよ。

「あらあら、早くしないと遅刻ですよ朋美ちゃん？」

この笑顔で優しそうな人こそ我が家で数少ない俺に優しい人の1人である母さんの橋立美智子だ。

「あつ！ホントだ！…んも、純のせいなんだからね！」

「お、俺！？」

「ふふ、嘘、ちゃんと入学式来るんだよ！じゃーいってきます！」

はあ、ようやくあの暴力女が去った。

見た目は可愛いのに絶対暴力で損してると思う…あの姉ちゃん。

そして実力も高い、空手初段。

俺なんかよりも100倍は強いと思われる。

成績は優秀っぽい、そこも俺とは正反対。

「あれ？純学校はどうした？とうとうニートになったか？」

「兄貴はだまつとれ、今日入学式なんだよ、そんでもって入学式午後なんだよ」

「そうかそうか、いや、まさかお前が高校生になったとは…信じられん」

「なんすかその意外そうな顔は!？」

「だって純だぞ父さん？」

「うん、純だしな。でも純だって受験頑張ったんだし、公立滑ったからって馬鹿にしちゃいけないぞ？」

「そうそう、純ちゃんだって頑張ったんだから」

「ワシは納得いかん」

父さんと母さんだけだな。

はあ、絶対後継がないぞこんな店。兄貴に任せといて俺は早々自立してやる。

そして暴力姉ちゃんとなんかむかつく兄貴と厳しい爺さんから解放された自由な暮らしが!…来ないか、不況だし。

いやでも希望はある!俺のようなカスみたいな人間でも頑張りやおk!

がんばれ橋立純!新生活は始まったばかりだぞ!

part 1・橋立家（後書き）

おまけ：登場人物録

・橋立純

『あ〜かったりい…なに？朝 純一？あいつよりダメ人間だぞ俺は？』

生年月日：1993年8月6日

身長：176cm

趣味：まあいろいろ。

特技：どんなやばい状況でもとりあえず乗り切る事。

特徴：どこにでもいそうな普通の高校生、髪の手入れは特にしていない。

運動神経はまあまあだが勉強は苦手で公立高校を滑った為、滑り止めの桑園

に入学した。本人に自覚はないようだが兄同様イケメンだが性格的に兄より

女の子にモテないとか。

好きなタイプ：可愛いくて暴力振るわないならok！

得意科目：体育、爺さんの影響で社会。

苦手科目：その二つ以外すべて。

・橋立朋美

『純！どうでもいいけど起ろ！』

生年月日：1992年12月10日

身長：164cm

その他のサイズ：B88 W52 H82

特技：空手（初段）、料理。

趣味：純に悪戯する事、純をド派手に起こす事。

特徴：純の实の姉であり、その美貌から男性陣に人気は高いもののその本性とは

実の弟に毎日暴力を振るう女王様？でも根はやさしく、弟の事をそれなりに

心配しており、純が公立滑った時も純をなぐさめてくれた数名のうちの1人

である。ちなみに脱いだらすごいらしい。

好きなタイプ：教えない！

得意科目：理数系以外得意。

苦手科目：理数系、でも壊滅的じゃない。

・橋立勇

『純なんてケツの青いひよっこ』

生年月日：1988年6月23日

身長：178cm

趣味：誰にも言えないけどオタク。

特技：主に女性の客引き。

特徴：純の实の兄、かなりのイケメンフェイスでルックスもよく、女の子に人気の

橋立家の看板的存在、彼がいるからこそ喫茶店に女性客が入るようなもの。

大学に通いながらも店を手伝い、休日は特に店にとって大きな役割を担う。

また純とは違い、頭もいいがちょっとオタクなのが残念な人。

好きなタイプ：自分と話が合う綺麗な人。

得意科目：全部。

苦手科目：ない。

part 2・桑園高校

改札を通り、電車に乗り、駅へ向かう。

結構街中の学校で駅に止まることに客は増えてゆく。

そんな俺の隣には……

笑顔の母さんとスーツが決まってる父さん、そして…

「爺ちゃん、いくら入学式だからってそりゃいろいろとやばいでしょよ？」

「なんでじゃ！？第1種軍装を着用してはならぬという決まりでもあるのか！？」

「いや、別に問題はないとは思っけど…その、周囲の視線が」

「いつかはこれを来て孫の晴れ姿を見たかったんじゃ」

でもそれ、卒業式の時も来てたよね？

ええ、特に社会科の先生に嫌な目線で見られていたような…主義主張的な意味で。

「まあまあ、お義父様張り切ってるだからいいじゃない？純ちゃん？」

「そうだぞ、お父さんだつて一番いいスーツ着てきたぐらいだぞ？
なんたつて我が家3人目の子供が入学するんだからな」

「そ、そうか？そりゃありがたいな、アハハハ…」

「まあ、所詮は滑り止め高校だな」

「うっ！」

爺さんそこで水を刺すような事言っな！

秀困気がた崩れだろ！

「まもなくー、桑園、学園都市線お乗り換えです」

あ、ついた。

そこからバスに乗り換え五分…

「じゃ、がんばるのよ」

「父さん達先会場行ってるから」

「うっほほい楽しみじゃい！特等席とつたるからな！」

…なんだかんだいって爺さんが一番楽しんでるんじゃねーか…

まったくこれだからかつて海軍でも変人とある意味親しまれていてある意味ひかれていたって話の爺さんは…

あゝかったりい…とりあえず俺はクラスとかが書いてある紙を掲示板で見た。

1年2組か…中学時代の仲間は0。いや、3人受けてたんだけど3人とも落ちたつていうひどさ、1人は公立うかつたけど2人は滑つて2次で1人は私立、超おバカの1人は夜間定時にいったらしい。

それっきり中学時代の友人とは全然会ってないし、事実俺は1人で

の出発だ。

「ぐはっ！勝政なにをする！」

「いいじゃんいいじゃん暇だからあそぼーぜ!？」

出た〜！1人はいる馬鹿野郎ども！

多分途中で中退するタイプだよあいつらー！

…えっ？ちょ、おま！こっちくんな！

ドンッ！

「ぐえっ!!！」

「あ！すみません!…この勝政！お前のせいでいきなり他人にぶつかっちまったじゃねーか！」

「うるせえ知るか！」

…か、勝政か。

覚えてたぜその名前…いつか殺す！

俺はとりあえず起き上がり…

「ったく〜、いきなりひでえ目に遭った。さていこ」

なんだか体が軽くなったな？

体当たりされた反動で体がほぐれたか？まあいいや、とれあえず俺は1年2組に行こうとした…が。

「あの！」

「ん？」

1人の少女に呼び止められた。眺めのポニーテールでちょっと小柄な少女だった。

「は、はい」

初対面だし、なんか俺も丁寧だった。

「鞆、忘れてるよ？」

「ん？あー！」

なんと俺の鞆を少女は持っていた。

…そうか、どつりで体が軽いと。

「あ、あつはは…ごめん。体当たりされた事にちょいムカついてたからすっかり忘れてたよ」

「…ふふふ！鞆忘れちゃう人が本当にいるとは！」

「ちょ！なんかおかしい!？」

「いや！？ただ面白い人だなんて思っただけ、大丈夫、モノ忘れは私も多いから」

「あ、マジ？あれはどうしようもないよな、やっぱ人は忘れるもん

だしな！」

なんだ、同志か。

…しかも結構可愛いだと？…こ、こいつは！？

…いや、今までの俺の経験上過度な期待は危険だ。そうやって何度酷い目にあつた事やら…

「あの、名前は？」

普段は元気な子なんだろうけどぎこちないのはやっぱり初対面相手だから？まあそんな感じだろう、俺もなんか普段とは違っっぱいし。

「俺？橋立純」

「橋立純…かあ。よし！めんどいから純！」

「まあ好きに呼んでくれ」

「うん、私の好きな喫茶店の名前と被るから下の名前で呼ぶね」

あ、なるほど、うちの喫茶店の市内支店がご近所にあるとかって感じか？

…本店の息子だと言ったらしつこいだろうな、まあいざればれるだろうけど今は黙っておこう。とりあえず詳細は聞く。

「喫茶店？あつ！もしかして喫茶「Hashidate」？」

「うん！知ってるの？」

やっぱり明かすか。
後々かつたりいし。

「いや、俺の実家だし…」

「ええ！？マジ！？はっ！…そういえば本店が近くにあるって…なるほど」

以外に普通の反応だった。

やっぱり俺って過度な期待をしすぎなんだろうか？

「今度お店行っていい？」

「別にいいけど？ってかうちの利益になるから大歓迎って感じか？」

「うん。一度本店行ってみたかったんだ！」

「行つとくけど支店よりボロいぞ？それはガチな話で」

「いいの、好きなお店は本店も制覇したいから」

なるほど、そういう趣味なわけか。

…そういえばこの子名前なんていうんだろっ？

「そつだ、今思ったけど名前は？」

「伊吹千尋いぶきちひろ、純のように親がすごかったりはしないよ？」

「別にうちの親もごく普通の人だぞ？」

「わかってるよ、変なイメージは抱かない」

「そうかい、そういえば伊吹は何組？」

「えっ？2組」

「ちよ、同じかい。」

「まあいいか、考えてみれば知り合いができたわけだし、少なくとも味方が1人増えたってわけだ。」

「純は？」

「同じだけど？」

「おお！なんかラッキー！いやあ中学校時代のお友達ほとんど別なクラスだし、偶然同じクラスの子とも朝は巡り会えなかったからなんか不安だったんだよ、1人で教室入るの」

「そうか？俺は中ボーの時1人堂々と入ったけど？」

「ええ！？なんかやじゃない？」

「人それぞれだろ？」

「…それもそうだね」

「つーわけで俺と伊吹は教室に入った。」

「なかなか教室は綺麗だった。そして同じクラスの奴らがいた。」

「あっ！千尋お！」

「みよんじゃん!」

「みよ、みよん!？」

すまん、東なんとかのキャラを想像してしまったが多分伊吹の友達
のあだ名らしい、

「純、この子みちたか妙高希望、妙高とか呼びづらいし希望ってありきたり
な名前だからみんなみよんって呼んでたの」

「ほお?」

「ええ!？何何!？千尋その人ってまさか…」

「違うよみよん、今日あったばっかだよ」

「あ、そっかあ、あたし妙高希望!まあ千尋のお友達っぽいし、正
直名字と名前あんまり好きじゃないからみよんでいいよ」

いいのかよそれで!

…じゅあ堂々呼ぶぜ?

「俺橋立純、よろしく」

「うん、よろしく橋立」

「げっ!お前は!」

「ん?…ああ!てめえは!」

その時、俺にお前はとかいってきたのは…

「さっき俺とぶつかった奴!!」

「か、勝政!! てめえかよ!」

「えっ? 日向と知り合いなの? 純って」

「そ、そっちこそ伊吹と妙高の知り合いかよ!」

「は、はあ!?!」

えっ? 何? どういう事なのこれ?

一体何がどうなってんだ!?

「いや、俺は2人とさっき会ったばかりかだけど…」

「っーかなんで俺の名前知ってたんだよ!」

「だってもう1人が勝政って叫んでただろ」

多分勝政だったと思う。俺の敵名記憶能力をなめねえほうがいいぜ?

「あ…そうだな。まあ一応名乗っとくぜ…俺は日向勝政!^{ひゅうがかつまね}ついでに
いうとそこの伊吹と妙高とは同級生でクラスも同じだった!」

「俺は橋立純! さっきはよくもぶつかってくれたなガキ!」

「ガキい? 同年だろがてめえも! だいたいぶつかったのは俺じゃ

ねーし！」

「いや！どう考えても原因はお前だろ！」

「うるせーぞ！ちょっと顔がいいからって調子乗るな！」

「ええマジ！？自覚なかった！」

俺イケメンだったのか！

…：そういえば兄貴イケメンじゃん！なるほど、弟も当然…：というわけか…：っじゃなくて…！！！

「自覚ないのかよ！むしろどんだけじゃねーか！」

「黙ってるトラブルメーカー！」

「俺はトラブルメーカーよりもムードメーカーだ！」

「なにをこのプチャンキー！」

「うつせ！一見いい男に見えるけど実は短気などどこにでもいそうな特徴ない奴！」

「ひどくね！？そりゃひどくね！？何あんた喧嘩うつてんの！？？」

「ちょ！オカマはやめい！」

おーっとヒートアップしてきました！

いいですねえそれっぽくて。

「あつははは…橋立と日向って気合つんじゃない?」

「そ、そう?」

「喧嘩するほど仲いいって言うじゃない」

「絶対違う!!!」

2人で抗議した。

「なんだよ純!ハモリやがって!」

「それはこっちのセリフだ勝政!」

「お前なんて一文字じゃなか!俺は二文字!どうだ俺のほうが偉い!」

「小学生かお前は!あまりにも幼稚だぞその程度の優越って…ってか優越にすらなってるねーし!」

「いいんだいいんだ!気分なんだよ!文句あつか!??」

「とりあえずもう1人のように謝罪しろ!」

「やーだね!誰が純に謝るか!」

「あ!てめえ言いやがったな勝政の癖に!」

「なにを!!!」

「やるかゴルア!？」

「喧嘩上等!かかってこいや!」

「よし!ジャンケン」

「ポン!」

「やったやったあ!純よええ!」

「あつ!てめえおそだししやがったなこの野郎!」

「::男って幼稚」

なんか聞こえたけど気にしない!

「でもこの場合絶対純が被害者だよな?」

「うん、日向も認めたら?」

「だが断る!」

「ちょ!だからおめー女子に嫌われるんだぞ!？」

「うっ!...:言いやがったな、禁句言いやがったな...:覚悟せい純
!!--てめえよりぜってえ早く女つくったるからな!」

「そっちかよ!折角喧嘩準備万端だったのに!」

「うるせー!」

こうして友達（まだよくわからない？）2人、敵1人が早くも出来
ました。

part 2・桑園高校（後書き）

・伊吹千尋

『めんどくさい!』

生年月日：1993年12月10日

身長：153cm

その他のサイズ：B76 W55 H77

特技：旧国名を全部言える。

趣味：音楽鑑賞（主にロック）、戦国武将関係。

特徴：黒色の長めのポニーテールが特徴で同世代よりも少し小柄。

純の実家である喫茶店「Hashidate」が好きなお店である。

純との出会いは入学式の時で純が好きな喫茶店の息子だからか初日

からわりと仲がよさそう

に見える。勉強は純より出来るし料理も普通レベルだが運動

はその見た目、

からは想像がつかないが実は運動が壊滅的に苦手である。

好きなタイプ：自分の事をよくわかってくれて優しい人。

得意科目：国語、社会、つまり文系。

苦手科目：体育。

・日向勝政

『誰かてめえに謝るか!』

生年月日：1993年12月8日

身長：173cm

趣味：友と話す事、ゲーム、純いじり。

特技：毛 名人に匹敵するほどの連打。

特徴：金髪で純に一カ月で退学しそうな男と言われたがぐらいだが

元々真面目

だったらしく、今 から俺はという漫画の影響で金髪に染めたいらしい。

何かと純の事を嫌うが純も彼の事が嫌いなようだ、でも本当に嫌っている

わけでもないので意外と2人は仲がいいのかもしれない。

好きなタイプ：可愛い子ならよし！

得意科目：学力は純レベル、ただ国語はわりと得意、体育も得意。
苦手科目：上記の2つ以外はギリギリ。

・妙高希望

『みよんでいいよ』

生年月日：1993年8月18日

身長：157cm

その他のサイズ：B83 W57 H80

特技：英単語暗記。

趣味：読書。

特徴：ツインテールだがツンデレというわけではない、千尋の友達である。

また勝政とも中学が同じで同じクラスであったそうだ。

あだ名はみよんとどこかで聞いたことがあるようなもの、でも本人は結構

気にいっているようで純にもみよんでいいといっている。

好きなタイプ：年上。

得意科目：理数系。

苦手科目：文系全般。

昨年という設定。

paer3・始まった我が学校生活

あ〜かったりい。

ようやく入学式が終わった。

一同揃って教室に戻ると先生が帰ってきた。

「え〜つと、とりあえず皆さんお疲れ様でした。改めて紹介しますと俺の名前は木山源五郎きやまげんごろう、よく名前古つとか言われるけどまあ俺の事は源ちゃんていいぞ」

「よろしく源ちゃん！」

「おっ！なかなかいい反応だなあ…お前は日向か。気が合いそうだな」

「うっ」

ざまあ！

過剰反応するから先生に注目されるんだ。

これで勝政も目立った悪い事はできないだろう。まあそれで俺との仲が改善されるわけでもないし、絶対あいつとは仲良くしたくないが。

「そんじゃどうしようかな……自己紹介は明日でいいよな？」

「「「はい！」」」

一同返事をする。

俺も欠伸をしながら返事した。

「そういう事だから明日の為にこれ書いとけよ」

出たよ、自己紹介なんちゃらって奴、俺は後ろの勝政にこれを書いた。

「ん？一枚足りねーぞ、しょうがねーな」

つと言いつつ勝政は後ろの人に渡した。
もしかして意外といいやつ？…でも認めん！

「あ、悪い勝政！今まわってきたぞ」

「なんだ、じゃさつさとよこせ純」

「ほれ」

「ああああ！！おま！わざと床に落としたな！」

「わるいわるいつい手が！」

「やっぱ俺おめー嫌い！」

「俺もじゃわ！！つーかいつになったら謝るんだよ」

「やーだね！」

「なんだ橋立、日向、初日から早々喧嘩か？」

まずい！目をつけられたらまずいぞ！
勝政の目を見る限り考えている事は同じらしい。よし。

「いやいや！俺達人試の時に知り合ってお互いジョークが言えるほどの仲良しになったんだよな勝政！」

「あ、ああそうだな！」

「そうか、まあ仲良くするんだぞ」

ふう〜、あぶねえあぶねえ。

「ちっ、考える事は一緒かよ、純だけ悪者になってりゃよかったのに……」

「うるせー、俺はおめーも助けてやろうと思ったんだよ」

「ほんとがおめー？」

「そこまで鬼じゃねーぞ俺は？」

「どうやら2人は本当に仲がいいみたいだな！皆も友達はどんどんつくって楽しい学校生活を送ってくれよ」

どうやら話の成り行きからこういう結果になったらしい。
助けてやろうと思ったのは本心だけどもまあ正直言って勝政と仲がいいってというのはちょっと違う気がする。

多分勝政もおんなじ事考えてるんだろーな。

出席番号的に離れている伊吹もこっちを見て笑っていた。どうい

考えなんだろうちょっと気になるけどまあ言えることは一つ、勝政は敵だ！

その後もホームルームは続き、先生のかつたるい話を適当に聞く。そして3時ちょっと前……

「よし、次の登校日は明日ですからちゃんと来るように」

「」「はい！」「」

「よし、起立！例！はい解散！」

あゝ終わった終わった。

ようやく終わったぜ……

「純！」

「おっ？伊吹か、どうした？」

「明日なんだけど、ついでにお店寄ってっていい？」

「はっ？お店？伊吹どういう事？」

「そ、そうだよ、千尋どういふ事？」

そうか、みよんと勝政は知らんか。
知ったら仰天こくだろうな。うん。

「なにつて、純って喫茶「Hashidate」の経営者の息子から
しよ」

「うそ！橋立ってあの有名な店の…」

「まあそついう事になる」

「げっ！マジか…俺の親父なんて土建屋だぜ？」

「別にだからっていい事はないぞ？姉は暴力女だし、兄はなんかムカつくし、爺さんは厳しいし、父さんと母さんも普段は優しいけど店のイメージ下がるからってあんまり店内には現れるなって言われるし」

「うわあ、ちよつと可哀そつ純」

「純、気にすんな。俺なんて公立滑ったからって親父に10発ぐらい殴られたんだぞ？」

勝政も俺の同志かい！

悪い学校じゃなくてもやつぱり怒られるんだね、公立滑ると。

うちは爺さんに殴られはしなかったけど滅茶苦茶怒られたなあ…

「あたしは千尋と一緒にここが第一志望だったからよかったけど」

「うん、まあまあ2人とも気を落とさないで！桑園だって悪い所じゃないんだから」

「「そつっすね…」」

伊吹に慰められる俺達…情けない。

とりあえず俺らは学校を出た。

「あ、ごめん皆、あたし親そこにいるから」

「うん、明日ねみよん」

「じゃ、千尋。橋立と日向も」

「おう」

「純は休むらしいけど俺は明日来るから」

「誰も休むとか言ってるねーよ！水を刺すような事言つな！」

「さーせん」

こいつは敵なんだか味方なんだかよくわからない奴だ。

「お〜い！勝政！」

「おっ！和輝じゃん！」

っと目の前に現れた男は眼鏡を掛けた茶髪の男だ。

背は俺と同じぐらい？よくわからない。

「あれ？鈴谷じゃん？」

どつちやら名前は鈴谷和輝すずたにわかつというらしい。

さっき俺とぶつかった男だ。

「あつ！あんたは！…ほんとすまなかつた！勝政が無理やり押すもんだから…マジで悪かつた！」

「ん…つと和輝だっけ？別にいいよ」

「そっかあよかったあ…」

なんでこんなに安心してゐるわけ？
もしかしてボコられるとでも思っていたんだろうか？

「鈴谷って何組？」

伊吹が和輝に訊く。

「俺？4組だけど？」

「あゝあ、なんで和輝が4組で純が2組なんだ？伊吹と妙高もそう
思わね？」

「いや、私はなんで鈴谷が2組であんたが4組じゃないんだろうと
思う」

「千尋に同意」

「ひどっ！」

伊吹とみよんもさりげなくひどいな。

まあ俺も内心勝政よりも和輝のほうが付き合いやすいと思っけど。

「純か、俺は鈴谷和輝だ、まあよろしく頼む」

「正式名称橋立純、まあ好きに呼べ」

「おう」

友っばいのが1人出来た。

いやぁ初日でこの戦果はかなりのものだと思う。

「おい純！はよせんか！帰るぞ！」

「げっ！……っわけで俺帰るわ、爺さん怖いし」

「了解！また明日ね純」

「おう」

伊吹が笑顔でまた明日と行ってくれた……とりあえず俺は親達がいる場所に行った。

しかし……これなんてフラグ？きたよついにきたか！？彼女いない歴〓年齢から脱するかいよいよ！？

……だが、過度な期待は禁物、中3の時のように多分言った時点で玉砕するぞ、うん。

……

……

……

つで夜、家、俺の部屋。

…伊吹千尋か、やばい、ありゃ俺の好みだ。
実はポニテ萌えなんて言えねーぞ……

…まあ、桑園入って最初の友とも言える。
ケータイ番号とメールアドレス交換しときゃよかったな……

別にそれで進展するとは限らないし、過度な期待＝玉砕フラグなのはわかってるけど。
ん？階段が騒がしいな。するとすごい勢いで扉が開けられた。

「純！」

「ん？姉ちゃんどうした？」

「さあ訊かせてもらおうか学校の感想を！」

「はあ！？なんで!？」

「純の事だからどうせ寝てたんだろうなと思って……つまり、ちゃんと言えたら寝てないって事になるから！」

ひっど！

そんな事いちいち聞く姉ってどうかと思うぞ!？

「っで、どうだった純？」

「どうって…別に普通だったけど？そんなゲーム見たいな展開ないっつての」

「そうかな？可愛い女の子と友達になれたとかないの？」

「ねーっ！！」

いや、あった…伊吹とみよんじゃん！

あの2人はアニメに出てくるんじゃないかってぐらいだった…

「どうしたの？やっぱり寝てたの！？」

「いやそれは…」

「ま、純だし初日だしいいや。でも明日から気を抜いたら一気にがくつとだからね」

「へ〜い………」

ああ…疲れてきた……

そして明日も地獄が待ってるんだろっか…寝よ、もつ。

part 4 生存者たち

「…起きろー！ー！」

「ぐえっ！ー！」

痛い！ー！

今日は…ああああそこは男が一番弱い所！ー！

「どづした純？」

「うるせー…どづせ姉ちゃんにはわからねーよ…この痛みは！ー！」

「あ、ごめん！そこはホントにごめん…」

流星の姉ちゃんもそこは謝罪するらしい。

確かに、ここは破壊されたらもう俺男として終わりだし。

とりあえず俺は下に行った。

「おはよ」

「あらおはよう純ちゃん」

今日は父さんはいない、まあ爺さんはいるけど。

「まだお前は起床ラッパで起きれんか！半人前め」

「どづせ俺は半人前ですよーだ、それより飯飯！」

俺はご飯にかぶりついた。
すると兄貴が…

「彼女できねーぞ」

「うっ！兄貴に言われたかねーな」

「大学にすごく仲のいい女の子がいるけど」

「嘘つけ！」

「ごめん、それは嘘だ」

誰も知らない秘密。

兄貴はオタク、二次元にしか興味が無い可能性もある。だから彼女などできるはずがない。

俺はそう思っている。

とりあえず飯を食い終え、顔を洗って着替える。

髪？手入れなんてしねーな…

これから学校か…あゝかつたりい。

その後鞆を持って姉ちゃんと一緒に玄関に行った。

「んじゃ行つてきます」

「行つてくる」

「行ってらっしゃい」

「純！授業中寝るなよ」

「大丈夫だつての！爺ちゃんはいちいち心配し過ぎだ」

とはいいつつも眠いのは事実、歩くスピードも姉ちゃんより遅い。

「ちょっと純もうちょっと早く歩きなさいよ」

「しょうがねーだろ、朝っぱらから無駄な体力使いたくないつての」

「ほんとだらしない弟」

暴力女には言われたくないっす。

とりあえず駅に到着。

乗客は日ごとに違う…がその中に…

「あっ！純〜！」

げっ！？この声は！？

目の前に現れた子ポニーテールの子は伊吹だった。

「へ〜、純、いつの間に」

「ちょ！ちげーつての姉ちゃん！〜！」

「姉ちゃん？もしかして純のお姉さん？」

「そうよ、橋立朋美、貴女は？」

「始めまして、伊吹千尋です」

「元気な子ねえ、純には合わない気が」

「とりあえず姉ちゃんは黙ってる、間違ってもそついう関係でもないし、ただのクラスメイトだ」

「あ、把握した」

「んな適当な一言でよかったのかよ！」

「まあなにはともあれ難は突破、正直に事実を言っただけなんだけど。」

「純、明日から私早く出るから、じゃっ！」

「ちょ！おいどこに行く！？」

「姉ちゃんは走って俺達から離れた。なんのつもりなんだろう？」

「純のお姉さんっておもしろい人だね」

「まあ…怒らせたら一番怖いけど」

「そつなの？」

「ああ見えて空手初段だぞ？」

「なにそれ、すごいじゃん！」

すごいけど普段打たれてる俺の身にもなっってくれ！

そういえばなんでここに伊吹がいるんだろう？もしかして近所とかいうオチ？

「あ、そういえば伊吹って家この辺なの？」

「うん、前は市内でもちよつと遠かったんだけど、引っ越ししたから。」
「Hashidate」から徒歩5分の所だよ？近く通るし」

マジで？

「なかなかいい所だよな」

「そうか？」

「純は地元で慣れてるだけだよ」

そっかあ…そういえば小学校の頃からこの辺住んでるしなあ。
慣れればどうでもいいって感じなんだろうなあ。

「あ、昨日の話なんだけど」
「Hashidate」行くね、今日

「おっ」

「どうしょーかな？みよんも連れてきていい？」

「全然問題ないっていうかむしろ大歓迎だぞ、お客様だし」

「ありがとう。あつ、電車きた」

停車した列車の扉がドアチャイムを響かせ、開きくと俺達は列車に乗った。流石にラッシュ時間だからか座る所はなかった。まあこれも少しの辛抱だ。

下を見ると伊吹が見える。

臭いおっさん達とは違い、なんだか伊吹の頭はとてもいい匂いがする。女の子特有というか…まあそんな感じ。

車窓よりもむしろ伊吹の姿が俺の目には入る。

その後バスに乗り換えても同様だった。

「純？どうした？」

「えっ？ああ…眠い」

突然伊吹にそんな事を聞かれたので眠いと答えた。
まあ眠いのは事実だし、別に問題はない。

「早く寝なきやダメでしょ、また日向の策略にはまっちゃうかもしれないよ」

「眠くて奴の策略に…それはあるけどあいつって策略家なのか？」

「まあそれなりに人を地獄に落とし込むのは上手だよ」

じ、地獄！？

勝政そんな恐ろしい奴だったのか…

さてさて、ようやく到着した桑園高校、新入生だけでも302人のこの学校には人があふれかえっていた。受験も1000人が受けたぐらいだから相当数が落ちたという事で、俺はその中に生き残った。公立のほうが倍率低かったんだがなんで滑ったかって？そりゃ俺にはハードルが高すぎた、うん。

「おい純！」

噂をすれば勝政、あいつは敵なのか味方なのか！？

「勝政かよ、お前ってホントに敵なんだか味方なんだかわからない奴だな」

「うつせ、「Hashidate」の息子とか知ったら喧嘩売れねーっての」

なるほど、御家柄で態度が変わるタイプか。

「千尋ー！あ、橋立と日向も一緒じゃん」

「みよんおはよー！」

「おはよ」

「よっ」

「おはよう」

勝政はおはよーですらないし、いいねえ中学時代の仲間がいる奴は和輝？しらねーな。

さて教室に行くとなんだか静かだった。

「随分静かだな？」

勝政がそう呟く。

「そりゃそうだろ、1日じゃ友できねーっての」

「っていつてるけど、純さり気無く混じってるよね」

「それは成り行きだ」

誰が何と言おうと成り行きである事には変わらない。

あくかつたりい…眠いし。

ん？誰か入ってきた、先生だった。

「おはよー、ん？橋立、寝るなー、まだ早いぞー」

「ま、まだまだ大丈夫ですよ」

「そうかー、一応俺親御さんから寝ないように監視してくれって頼まれてるからな、覚悟しろよ」

た、頼まれてるだど？

よ、余計な事を！！

「えーっと、本日は…」

一応敬語で話す源ちゃん、まだ会ったばかりだから詳細は不明だが、多分癖ものだと俺は睨む。今日の1校時はロング・ホームルーム、まあ自己紹介みたいなもんだろ、うん。

「とりあえず先生から言える事は昨日も言ったかもしれませんが、入学おめでと。諸君らは1000人の受講者の中から選ばれた302人の中です。これはどういうことかというつまりは優秀という事です」

うわあ、ありがちな話。

でも俺も優秀か、そりゃちょっと嬉しいな、公立滑った男だし。

わかりやすい例えだとこんな感じか？

明治38年1月1日未明、旅順

大隊長、多分受験生の中で1番頭いい人、階級少佐

「我が大隊は、本日、突撃を仕掛ける事となった！諸君は最後の力を振り絞り、この総攻撃に当たってほしい」

こうして戦いは始まった。

激しい攻撃だ、皆次々と倒れて行く。

「ようし！突撃だ突撃！！」

「うおおおおお！！！！！！」

走る、全員走る！

猛攻を受けつつ全軍は突撃した。露軍の機関銃が使えない距離まで接近した俺達は白兵戦に待ち込んだ。

「ウラァァー!!」

「なんの!その!この!」

露軍（桑園高校教員）を次々となぎ倒していく俺ら、そしてついに

……

「旗立てろー!!」

「やった!!ついに旅順を陥落せしめたぞ!!」

「」「」「万歳!!万歳!!万歳!!」「」「」

数時間後

「大隊長、ついに…ついに占領を…」

「うむ、だが生存者は302人…自分は698人も兵隊を殺してしまった……大隊は壊滅状態だ」

「ですが、戦には勝ちました」

「うむ、だが戦に勝っても戦争には勝つとらん、戦いはこれからだ……橋立上等兵!」

「はっ!生きて帰らぬ事は覚悟の上であります!」

「勝つまでは一秒たりとも気を緩めてはならぬ!」

「はっ！」

現実

まあこんな感じなんだろうな。

今のは完全俺の妄想だから史実とはあんまり関係ないけど。

…まあ、まだ始まったばかりだが絶対アツツにならないように頑張るとするか。

…でもかったりい。

part 5 朋美の実力

キーンコーンカーンコーン……

「学校オワタア！」

俺は両手を伸ばしてそう叫んだ。

「よっしゃあ！じゃあ俺帰るわ！今日は新作の発売日だなうっほほ
いー！」

ととなんかキモイ声をあげて勝政が教室から一番乗りで出て行った。
…新作ってなんだろう？

「あ、日向の奴帰っちゃった。

「どうせ暇なんだろうし、せつかく誘ってあげようと思ったのに…」
「大丈夫だ、あいつうちに来ても営業妨害になるだけだから心配す
るな」

「そ、そーなのか…ま、いいや」

どうやら勝政は伊吹とみよんにとってもどうでもいい人らしい。
不憫なお方。

「ねえねえ純」

「なんだ？」

「今思ったけどさ、みよんの事はみよんって呼ぶし、私も純の事純って呼んでるのになんで私だけ名字？」

「えっ？」

いや、だってね、それね。うん。
言いづらいじゃんいろいろと。

「ん〜と…」

「よし純、今日から千尋って呼んで」

「はあ？なんで？」

「なんでって…決まってるでしょ！うん、とにかくそう呼びなさい！」

「め、命令！？」

「そっ！命令！」

お前そういうキャラだったけ？

…いや、考えてみれば日も浅いし、蓋を開ければ意外な事もあるとはこの事か。

さて、俺には以下のような選択肢がある。

選択肢：

1：素直に千尋と呼ぶ

2：なんで今更…

1番は置いといて2番…、うっん命令形だったしなあ…後が怖いから1番にしておこう。

「わかったわかった、千尋な」

「流石純！わかる男じゃん」

少なくとも勝政よりは扱いがいいみたいだ。
あいつは今回ほとんど登場していないし。

つつーわけで3人で駅まで来てしまったわけだが。

「そうだ、千尋引越したんだっけ？家どこ？」

「えっ？純の家のわりと近くだよ」

「ええ！？…ってことはHashidateの近くじゃん。いいなああそこのメニュー種類問わずおいしいし、千尋食べ放題じゃん」

うらやましがるみよん、でも俺は水を刺すような事をいう。

「食べ放題っていつでも不定期の期間限定だけだな。たとえば客が増える季節とか」

「ええ！？マジで食べ放題あるのかよ！」

別に水を刺すような事でもなかったか。

まあうちは安くてうまいってのが売りだからあんまり食べ放題とか意味がないんだけど、でも父さん曰く客は増えるらしい。

俺らは到着した列車に乗った。

「……って事はさ、もしかして千尋と橋立って一緒に来たりするの？」

「うーんどうだろ？今日はばったり会ったけどね」

「いつもって事はないだろ多分」

「なぐんだ、超スピード進展はないか」

「なーよ！」

それがあるんだったら今頃うはうはだったの。

列車の中は普通の人数で後は大体学生、桑園の生徒のほかにも他校生徒が混じっていた。たまに街中に行くと見かけるけどこのあたりにはあまりいない、なにがって？すごい奴らだよ、ヤンキー的な意味で。

特に隼鷹高校とかすごいって噂らしい。

番長の古賀元徳とか化け物並みに強いって噂らしい、顔は知らんが名前は俺でさえ知っているぐらい有名な……っーか恐れられている。姉ちゃん曰く桑園の生徒が殴られたとかってあるらしい。

まっ、こんな時間帯に……って……あれなに？

「うわあ、見て見てみよん、純。すごい長ランとボンタンだね」

千尋が指摘した3人組みはどう見ても隼鷹の生徒でした。

「あいつら白石の奴らだろ？なんでこんな時間帯にいるんだ？」

「サボりじゃないの？千尋は中学の時サボりがお得意だったし」

「ちょ！それを言わないでよみょん！」

「心配するな、サボりなら俺だって幾多と……」

風邪で休んだ事はないがサボりで休んだ事は何回もある。

爺ちゃんにもばれない迫真の演技で調子悪いふりをし、その後は部屋でPCでもつけて遊ぶ、これなんて半ばニート？でも流石に中3になってからはやらなかった。

千尋も仲間だったのか。

「あんたら私立って欠席日数結構響くのによく受かったね」

「いいのいいの、結果オーライならばそれでよし、ね？純」

「お、おう。まあ俺は結果オーライじゃないけどな」

「あ、そうだった！千尋、純に結果オーライとか言ったらだめ」

「えっ？なんで？…ああそうか、そうだった、ごめん」

「いや、別にいいけど」

でもなんか悲しい！
悪かったな公立落ちて！

真面目にもう少し控え目な所受けとけばよかった…でも爺ちゃんが
行け行けいうから無謀な受験を…そしてこの有様！つまり俺が落ち
たのは誰かさんのせいであり、レベルにあった所だったらうかって
いたはず！

…まあ、今更負け惜しみをしてもどうにもならないけど…

お、ようやく駄だ。

俺らは降りたが…

「ねえねえみよん、純、あの3人もここで降りたよ」

「しーっ！しーっ！千尋やめい、あいつらの噂してるところこっちが襲
われるぞ？」

「そうだよ、橋立の言つとおり、ああいつのは関わらないのが一番
なの」

「そ、そっかあ…」

以外と世間知らずな所もあるらしい。

単に子供なんだかどうなんだか、まあそれはともかく俺の家までの
帰路、なぜか隼鷹の3人組は俺の帰路と同じ道を歩いていた。

「なんだ？…あつ、姉ちゃん」

「あれ、朋美先輩じゃん」

「ちよ！2人とも隠れて！」

「「？」」

俺と千尋はみよんに言われるまま、とりあえず電柱を利用して身をひそめた。

耳を澄ますと声が聞こえてくる、その3人は姉ちゃんにからんでい
るようだ。

「ようよう嬢ちゃんが橋立朋美かあ？」

「えっ？そうだけど？…ってか何？あんた達？」

「よくもこの前は村井と中橋を可愛がつてくれたな？」

ちよ！姉ちゃんあいつらに手出したのかよ！

「ちよ、ちよつと橋立！まずいよこれ！？」

「純！朋美先輩が危ないよ！」

「そつだなあ…でも姉ちゃんだし、大丈夫だろ」

「ちよ、ちよつとどういう事なの橋立？」

「まあ見てろ」

千尋とみよんは不安そうな表情で姉ちゃんの事を見ていた。
でも2人は知らないんだろう、うちの姉ちゃんの強さが伊達じゃな

い事を。

「だからなによ？」

「村井と中橋の仇…ちゃんととつたるからな？」

「嬢ちゃん可愛いねえ、きゃーかわいそ！この顔がボロボロになっちゃうんだぜ？」

「もったいねえなあ？なあなあ俺らの奴隷になるって事でいいんじゃない？」

「あんた達の奴隷になるぐらいなら戦ったほうがマシね」

「…なに！？」

あゝあ、姉ちゃんもそこで挑発するなよ。

つでも、結果はもうわかってる。あの3人、ご愁傷様。

「…このアマ…ふざけんなあ…！！」

パシッ！！！！

「うっ！」

「どうした正明！！お前パンチが自慢なんだろ？」

「だ、だってなんか…すごい早いスピードで受け止められて…」

「戦闘中にぺちやくちやし喋るのは命取り！」

すると姉ちゃんのひざ蹴りがリーゼントの腹にクリーンヒットした。あれは強烈！俺も一度食らったが気絶余裕だった。

そしてリーゼントも当然…

「お…おおお……」

「ま、正明！！」

「てつめえこのお！！！！…うおっ！？」

目立たない茶髪野郎の背後に回った姉ちゃんはそのまま体を掴み、後ろに投げた。茶髪は悲鳴を上げながら顎を地面にぶつけ、気絶した。ひゃー、見てるだけで痛い。

「……うそ、橋立先輩って…」

「と、朋美先輩あんなに強いの！？」

「ああ、見ての通りただの暴力女だぞ？」

2人は啞然と戦いを見ていた。

まあ、そうでしょ、初めてみる人には信じられない光景だろ。

「ちょ…こ、これ、えっ？何？…何があったの？…なんで2人ともこの女に倒されちゃったの！？」

「前見なさい前！」

「はっ！…はい…」

「いい？もう二度と桑園の生徒には手を出さないで。じゃないとどんな目見るかわかったね？」

紹介遅れたけど姉ちゃん実は生徒会副会長。

だからかどうかは知らないけど正義感が強いっぽい。

「は、はい！！」

「じゃ、2人連れ帰りなさい」

「すすす、すみませんでしたああ！！！」

…3人は去った。

結果は姉ちゃんが2人を倒し、1人は戦意喪失、完勝だった。

とりあえず俺はさつききたばかりな風に姉ちゃんの前に現れた。

「あれ、姉ちゃんじゃん」

「あつ！純！…それに…千尋ちゃんともう1人…ごめん、誰？」

「妙高希望、みよんでいいですよ」

「ま、まさかさつきの見てた？純？」

…今更隠すのもあほ臭くなってきた。

「最初から3人で見てた」

「すっごいですね朋美先輩！純から空手初段だって噂を聞いたんですけど本当ですか！？」

「えっ？ま、まあ。元々自分でやりたいって言ったから始めた事だし、昇格も結構早かったし、まあ今はやってないよ？でもああいう言葉で話してもわからない人を相手にする為にこっそり使うかな？」

軽く犯罪な気もするけど…まあ姉ちゃんには必殺技がある。

相手に先制攻撃させておいて身に危機があるとしてから攻撃をする。なんでも正当防衛にしてしまう事だ。

「かつこいいですねえ」

「朋美先輩！憧れました！」

「そ、そうかなあ？」

「そうでもないぞ？でもそんな強いんならもう少し弟にも手加減してくれよ」

「それは断る」

「ひどっ！」

そりゃないぜ！！！！

しかも2人笑ってるし！

「ところで純？その2人友達？…もしかしてふたま

」

「そこまで！店に来たいつていつてたから招待しただけだ」

「なぐんだ、そういう関係じゃないのか。つまんなーい。ま、いいか、さ、ついてきて」

「「はい」」

まあ、これでなんとかなったのか。

「それと純」

「なんだ？」

「もうお父さんとお母さん、ついでにお爺ちゃんからも何回も言われてると思うけど貴方店頭に現れるの禁止ね」

「ひどっ！……！そりゃねーだろ……！」

「だってしょうがないでしょ！半ば決まりみたいなもんになっているんだから破ったらご飯抜かれるかもしれないよ？」

「うっ……ふ、2人とも、ごゆっくり、俺はお部屋でお勉強してる」

「そう？不憫だねー純」

「いくらなんでも今回は橋立が可哀そうに見えてきた」

わーい同情してくれるような人がいるよーうれしーなー。

…まあ、勉強なんてしないんだけど、それでも言っておかなきゃ特に爺ちゃんに何言われる事か…

もうやだ、この生活。

part 6 いい所に行く

…はあ、結局先週の金曜日以来、あの後2人とは会っていない。

理由は店頭出入り禁止を親どもから食らっている俺はずっと部屋にこもっていたからである。どうやら姉ちゃんは楽しそうに話をしたらしい。

…俺ってそこまで問題児なの？

確かに馬鹿だけどそこまで変な奴じゃねーだろ。

そう心の中で文句を言っていると、ドアが空いた。

「純ー！お友達待ってるよ！」

「はあ？友達？」

誰だ友達って？

確かに男友達も何人か出来たし、勝政も時と場合によってはそれに入る可能性もあるが他に友達って…

「千尋ちゃんだよ？早くいってあげなさい」

「ち、千尋！？」

なんであいつ！？

そういえば家が近いとは行っていたがだからって俺と一緒にでなくとも…

そう思いつつ靴を履いて玄関を出ると確かにそこには千尋の姿があった。

「おはよう、寝癖すごいね」

笑顔でそんな事を言われた。

「頭とか手入れしねえしな」

「そうなの？でも寝癖ぐらいいは直したほうがいいんじゃない？」

「そっか？」

「絶対そうだと思う」

そうなのかあ、寝癖って直したほうがいいのか。

すると後ろを姉ちゃんが一言「早くしないと遅刻するよ2人とも！」
と言いついに残し去っていった、そしてさらに嫌な気配が。

「純が女の子と二人きりで話をしているだ！？」

「げっ、兄貴！」

「…しかも昨日うちに来てくれた純の同級生じゃないか」

「おはようございます」

「おはよう、それよりも純！どっいつマジックを！？」

「黙ってる兄貴！行くぞ千尋」

「えっ?でも」

「兄貴の事は放っておけばいいんだ、行くぞ、遅刻するぞ?」

「うん」

まったく兄貴め…

絶対心の底から驚いているんじゃないやなくて楽しんでるだろ。バレバレの演技だった。

正直言つて兄貴はうるさい。

それよりも…

電車に乗り、落ち着いてから俺は質問した。

「そっいえばさ、なんでお前俺と?」

「え〜?うん、昨日可哀そうだったから?」

「可哀そう?」

「だって店頭出入り禁止つてねえ…いくらなんでもひどすぎる気が」

「仕方ねーって、親が勝手に決めた事だし、俺には逆らいようがない」

「つーか今逆らったらリアル家追い出される。

公立滑っただけでもこなりご立腹なようなのに…」

「ああ！！なんで姉ちゃんと兄貴はよくて俺はダメなんだ！？」

「ほんとだね、純そんなに悪い奴には見えないけど」

「だろ？なのにひどくね？上の2人がいたって真面目なのに俺の場合イメージが下がるっただけで」

「ほんと、親って理不尽だよ」

「確かに理不尽だな、いろいろと」

千尋の親もそうなのか？

：まああいて聞かない事にしよう、そんな話聞いたら今まで親に言われた理不尽な事がフラッシュバックするっつの。

やがて駅に到着し、バスに乗り換えて5分、我が桑園高校に到着した。

「あゝ、やっとついた」

「そう遠くはないだろ？」

「ええ！？だって満員電車だよ？あれはヤダ！特におっさん臭いし！」

「まあそれはあるな、俺はババアの化粧の匂いが嫌いだけど」

「あるある！あれホント臭いよね、私も女だから時と場合によっては化粧すると思うけどほどほどにしるっつね」

まあ千尋の場合は化粧しなくても十分通用する顔だけ。

…って事は千尋に対してなら厚化粧の文句とか言いまくれるわけか。

さて、教室についた。

「おはよーみよん」

「あ、おはよー千尋、橋立」

「なに！？純が伊吹と一緒に登校！？そういえば昨日も…お前らまさか入学式からこの日までの短い間に結ばれて家に泊まって不純異性こう」

「は？いそんな関係じゃないから心配しなくてもいいぞ勝政」

「そんなわけないでしょ日向、たまたま家近いからばったり会っただけ」

「マジで！？期待した俺がバカだった！」

なにを期待しているんだこいつは？

そもそもお前はデフォルトで馬鹿だろ？別に改めて言わなくても解るわ。

「日向きもー」

「ぐはっ！妙高まで……うっうっ……いいんだどうせ俺なんてキモイんだ！」

「きもい」

「キモい」

「ばーか」

「純てめえ！確かに俺は妙高と伊吹にきもいって言われるのは文句いわねーけどお前に馬鹿と言われる筋合いはねーぞ！」

「ああ！？なんだこら？都道府県クイズでもやるか！？」

「橋立と日向、それ小学生レベル」

「「がぐん！！」「」

みよんに勝政と同類扱いされたもうだめだ俺死ぬしかない！

……

……

…

結局この日も大した内容はなく、学校に終わりの予鈴が響いた。

「ねね！今日街中行かない？」

「えっ？どうした千尋、いきなり？」

「いやだって…いいじゃん別に、今週どうせ皆暇なんだし遊ぼう？」

「あたしはいいけど？勝政は？」

「否定する理由なし！テレビ塔から純を突き落とす」

「よし、犯罪者決定」

「ちょ！冗談！冗談だから連れてって頼む！」

勝政が泣きながら俺に頼む。

…でもこれは立案者である千尋に言わないと意味がない気が。

「心配しなくてもあんたもついでにつれてってあげる」

「俺はついで！？じゃじゃ！和輝はどうだ？」

「文句はないよ？ついでにどうぞ、ただ交通費は自費ね」

「おk！ちよつと待ってる！」

和輝はともかく勝政も来るのかよ…はあ。

…つて早！

「早いね帰ってくるの」

「そこにいた」

「んーつと、なんだかよくわからないけど勝政に誘われたから、俺も来ていい」

「問題なし」

千尋がそういつと勝政は泣きながらこう言った。

「女の子2人付きで街中…はぁ！夢のようだ！」

「馬鹿かお前は？つてか馬鹿だろ」

「つたく、勝政の考える事は…誰にでも読み取れるお幼稚な事ばかりかい。」

………

………

…

つというわけで一度解散して駅前で合流、この街で一番でっかい駅の近くにはJRタワーたるものが聳え立ち、周囲は大変賑わっていた。

「日向と鈴谷派手…」

「ほんと、逆にきもい」

確かに勝政と和輝の服装は派手だ。

みよんからはひかれるほどに。つか俺も引く。

「えっ？そうか？勝政からはこれがいいって聞かされたけど」

「そうだ！今はこれぐらい派手なほうがいい！大体純、なんだね白

いＴシャツにボロいジーパンって、いくらなんでもそりゃないだろ
?」

「うるせー！これとあと数着似たようなのしか持ってねーんだよ！」
悪かったな畜生！

「え〜？私は純の服装のほうが好き」

「あたしも、いや、純のはある意味では地味すぎるけど２人と比べ
たら１００倍はマシ」

「「ひどー!」「」

ひどって…言える服装か？
だって…きんきらきんだぞ？いくらなんでも趣味悪すぎだろ。

とりあえず俺らはあちこちみながら街を歩き、公園に行った。
この公園はまあ長い事長い事、とりあえず高い所へ行こうぜという
勝政の子供な案によりテレビ塔にいった。最近建て替えの噂もあっ
たがなんか中止になったらしい。

「やったー！近くでみるとでけええー!」

「確かに、勝政、これはでかい!」

近くでテレビ塔を見る勝政と和輝。

「…馬鹿だろ、あいつら」

「純って仲間になってそんなイメージあるけど行かないんだね」

「俺あんなに元気じゃないから」

「橋立ってなんか雰囲気と逆だよな」

「そうか？ってか勝手なイメージつくられるからいろいろと困る」

「はい、ごめんなさい」

とりあえず中に入り、一番高い所の展望台に向かった。

始終例の2人は騒ぎっぱで馬鹿丸出し、俺も千尋もみよんも呆れて見ていた。

そして…

「うわあ！やっぱり高い」

「ほんとだ、周りもビルも高くなっちゃったけど公園を眺めるにはいいね」

千尋とみよんの感想、別に普通だろう。

俺も後者、つまりみよんの感想と大体同じだ、だが。

「勝政、これは…」

「ああ！人がゴミのようだ！」

「もつお前らとりあえずずっとそこにいろ」

飽きてきた…

「あ、トイレ」

「俺も。なんか腹痛い」

2人そろってトイレって…あまりの馬鹿さ加減に神様もキレたんじやねーか？

「ご、ごめん2人も、あたしちよつとお腹いたい」

「えっ？大丈夫千尋？」

「うん、数分で戻ってくる！」

えっ？ええええええええええ！？

みよんは天罰が下るような事をしたか！？いや、まさかあまりに力が強すぎて勝政と和輝のみならず、みよんにまで影響が及んだのか！？…いや、流石にないな、大体根拠がないし。

「はあ、なんか2人になっちゃったね」

「そうだな、はあ」

「どうしたの？」

「すまん、ちよつと飽きてきた」

「あ、飽きたって…まあわかるよその気持ちは。だって高い所にいるだけで特におもしろい事があるってわけじゃないしね」

意外とわかってるな千尋。
もしかして思考が似たようなもの？

「でも私は結構楽しんでるよ」

「マジ？」

「だっていつものメンバーに純が加わった。ちょっと新鮮でしょ？
それだけでも？」

「そうか？別に俺は高校生活は中学の延長みたいなもんだって思っ
てるけど」

「そっちじゃないよ！空気読め！…まったく、でも純に会えてよか
ったって思ってるよ」

これなんてフラグ…いや、だから期待するなって何回自分に言い聞
かせた俺？

きつとこれは地雷に違いない。

「そうか？」

「だっておかげで本店の人と仲良くなれたし、純がいたからだよ」

「ま、きつかけにはなったかもしれないな。俺は店頭立ち入り禁止
だからよくわからないけど」

「いつか立ち入れるようになるといいね」

「立ち入れる日なんて来るのかねえ……なんかもう最近はどうでもよくなってきた」

「む、少しは希望持ちなさい！」

「へい」

あゝかったりい。

同じ中学時代サボり魔だった千尋に説教されたよもうダメだ。

なに？今の説教じゃないって？俺には説教なの。

…まあ、可愛いから許そう。

そう思った矢先に勝政と和輝が帰ってきた。

「ふう、昼飯食い過ぎたぜー」

「ほどほどにしとけて帰りにみよんが言ってだろたお前ら？」

「だってえ腹減ってたんだもん、なあ和輝？」

「ああ」

馬鹿だろこいつら。

俺より馬鹿だろ。

やがてみよんも帰ってきた。

「ごめん、すっかり遅くなって。ささ、もう飽きたでしょ？次行こっ」

「そうだね」

「よし行くか」

「「れっつらGOO」」

…馬鹿だ、勝政と和輝…

part 7 からおけ

つつーわけで、夜になってもぶらぶら歩いている俺ら。
別に文句は言われないけど。

「どうする？時間的に最後だよ？」

「うーん、そうだ！皆でカラオケ行かない？全員でなんぼか出し合
って」

つとみよんは提案する。

まあそれはそれでいい、いいだろう…俺の悪魔のボイスを聞かせて
やるとうかが。

「俺は賛成」

「うーん、いいよみよん。行くっ」

「死ぬまで歌う！」

「俺もだ！」

「じゃあ死ね」

「「ひどいよ純！」「」

まあ流石に死んでもらっては困るが目の前から消えてほしいのは事
実かもしれない。だってうるさいし。そういう事で俺らはたまたま
近くにあった安カラオケに行くことになった。わりと小型のビルで

6階に受付があるらしい。いやあ、いかにもだね。

初めてのお客さんなら不安になる、もちろん俺も今、密かに不安だ。エレベーターで6階まで上がるといきなり受付が見えた。

とりあえず俺名義で受け付け、7階の13号室という所が俺らの部屋だ。

「はあついた……って日向早!!」

「ちょ!勝政早い!」

早くも勝政が曲を選んで歌った。
その実力とは……

……

……

…

「……たぜえ!」

「ひどいね」

「うん、ひどい」

「とりあえずお前の歌唱力は最低っつと」

「勝政……こりゃ地獄だあ」

「なにそれ！？みんなしてその反応はひどくね！？楽しけりゃいいだろ！」

あ、そうだ、俺こっそり採点を入れといた。
その結果……

「ぶっ！！32点！！……カラオケの機械にこの点数を出されるって
お前相当重症だぞ！？」

「う、うるせえ！じゃあ純うたってみろ！」

「上等じゃゴルア！ハレ　れユカイ歌ってやる！！………あー、
謎々お　」

………

…

千尋とみよんはなんか白い、和輝も泣いている。
そして勝政は笑っている。

「ぶっ！！……おまえ、俺と大してかわらねえじゃねーか！」

「う、うるせえ！！見ろ！48点だぞ！？おまえよが大分マシだ！」

「よこせへたくそ！」

「お、おい！和輝てめーマイク奪いやがったな！」

「次は俺だ！覚悟しろてめえら！！！」

……

……

…

…はあ、やっと終わった。

こいつもまたひどい。耳に響くし滅茶苦茶外れてるし…

「やったぜ50点だわ〜い人生最高得点！」

「どんだけだよ！！どんだけ下手なんだよ和輝！」

「勝政！俺より低い癖して和輝の事馬鹿にできねーだろ！」

「純は俺より低いから黙ってる！まあ勝政も純に手出しするな！」

「…3人とも変わらない気がするけど？ねえ千尋？」

「う、うん」

俺はちよつとかちんときた。

つというわけでマイクを握りしめ…

「じゃあみよんがうたってみる！？」

「ふっ！ナメちゃいかんぜよ！」

みよんは俺からマイクを奪い取った。
そしてなんか選んだ。

「ちょ！みよん何歳だよ！」

「ふっ…いくぜ函 本線！」

函 本線って…みよん何歳？
知ってる俺もどうかと思うけど。

千尋と勝政と和輝は知らないらしい。
その腕前は……

「64点……」

「ダッハハハ！！下手じゃん！！」

「人の事いえねーじゃん！」

「まあ純と勝政よりは断然うまいけどでもひでえ！！」

「なっ！下手トリオが調子こくな馬鹿！！」

「…はうっ！！」「…」

もうこいつらと同類扱いかよ俺！

それだつたら死んだほうがましでーい！もついやでーい！そつなの
でいゝす！！

ん？待てよ？まだ期待の星が。

「そついえば千尋、まだ何も歌ってなくない？」

「えっ？っつんどつしよ、自信ないよ〜」

「心配すんな！俺らソ ルブラザーズはド下手集団！気にする事ない！」

「ちょ！日向！あたしも仲間入りかよ！三馬鹿は黙ってる！！」

「」「」「つっ！！」「」「」

やっぱり勝政と和輝と同類扱いなわけ！？
ひどいやひどいや！

俺の目の前では千尋がマイクを握っている。
その腕前……とは……

「…えっ？」

「…はい？」

「な、なんだと？」

「…っ、っそだろ？」

っ…っまい！

我がソ ルブラザーズにこんな人材がいたのか！？

いや、なんつーか、顔だけで出しゃばってるジャーニーズもよりも断然うまいぞ？な、何者だ千尋…期待を裏切るつまさじゃないか！

もはや皆言葉がでない。

ロックなこの曲、少なくとも俺が歌ったら人体破壊ソングになるだろう。

だが千尋は違う、人を自然と寄せ付ける感じだ。

「…ん？げっ!？」

外を見たらハゲてるおっさんや学生、どこかの若者達がドア越しで千尋の歌声を聞いていた。

歌が終わると部外者達は拍手をしていた。

「あれ？」

「ち、千尋。半端じゃないよ…」

「そ、そう？みよんに言われただけじゃよくわからないけど…純は？」

「す、すんばらしい歌唱力であります」

「…えっ？」

本人は自覚がないようだ。

すると扉が開けられ、眼鏡の若い男が入ってきた。若いっただって多分30代かあるいはそれ以上だろう、ただの歳わりに若いっただけ

だと思っ。

「すばらしい！今の歌っしだけ聞てていましたがすばらしい歌唱力です！お名前を！」

「えっ？伊吹千尋ですけど…」

「伊吹さんですね！どう？歌手になつてみない？」

「え？いえ…私そついうのに興味は…」

「なんのなんの！貴女ぐらいの年になれば芸能活動をするのは志す者ならばあたりまえ！君には才能がある！絶対売れる！どうだね！？」

「いえ、だから興味は…」

「絶対後悔しない！これだけは言い切れる！きつとCDが売れ始めたらそこからぐーんと！そして最終的には日本を代表するアーティストになれるかもしれなですよ！」

「西村芸能事務所さんだけに独占させませんよ？どうです？うちのプロダクションに來ませんか？」

「いえいえ！我が渡辺………」

「えっ？えっ？」

あれ？これつてもしかしてまずい展開？

勝政と和輝は笑顔で千尋を、応援してつつもりだろうか、っでみよ

んはちょっと困った様子。

「おねがいします!!」

「どうかわが社へ!」

「えっ?えっ?」

「おいてめえら」

「ん?なんですかド下手糞」

「ど、ド下手!?!」

こいつら俺の歌聞いてたのかよ!!!
はっ!...先ほどから嫌な視線は感じていた。こいつらもしかして
一般人から売れそうな人を引っ張ってくるという手段か?

とにかく俺はド下手糞にカチンと来た。

「ド下手でしょう、聞いていましたよ?残念ですが君の歌唱力では
...顔もルックスもそこそこいいのですがあ」

「そういう問題じゃねーだろ?困ってるだろ?無理に強いる事はな
いでしょう」

「うるせ!下手は黙ってる!」

これだから馬鹿な芸能界は.....

...とりあえず。

「お前ら…出てかねえとしばくぞゴルア!!!」

俺は袖をめくった。

姉ちゃんに鍛えられたせい、か筋肉はほどほどにある、まあかといって足が速いわけじゃなく、少しだけ喧嘩が強い程度だが。

なにより俺の叫び声はもはやただのヤンキーさんだった。

「ひ、ひいいい!!!」

「す、すみませんでしたああ!!!」

どこの馬の骨かもし知らぬ芸能プロダクションの奴らは去っていた。

「…ふう」

「純…」

…その後、またあいつのが現れたら困るからと千尋は歌うのを自重した。そして時間が来たから俺らは駅まで行き、そこで解散した。

帰りの電車は千尋と一緒にだった。

「今日のごめんね、迷惑かけて」

「いや、別に千尋のせいじゃないだろあれは」

「うん、でも…」

「気にするな、お前もいつも通りの元気で断ればああいうひ弱な奴らは身を引いてターゲットを変えるって」

実際俺もびっくりだった。

マジで芸能界に行っても通用するレベルだったと思っただけど、本人は嫌そうだからあえてあそこで突っ込んだ。まあド下手糞って言われたからちよいと頭にきたってのがきっかけなんだけど。

それにしばらくとか言っても姉ちゃんみたいに特別喧嘩強いわけでもないし、あいつらが集団でかかってきたら多分勝てない。でも突っ込んで後悔はしていない。少しはフラグを立てれたかもしれないし。

「そうかな？だって芸能関係の人たちってしつこいって言うじゃん」

「確かにしつこいけど日本のああいう奴らは根性がないんだよ」

「ほんと？」

「爺さん曰く、だけどな」

「純のお爺さんって…あのお店にいた面白いお爺さんの事？あの人のいう事だったらなんか納得できるかも、根性ありそうだし」

事実根性はある。

死を覚悟するような目にリアルで遭ったぐらいだからな。爺ちゃんは飛鷹という空母の乗組員で若き海軍中尉だったらしいけど米軍機の攻撃に遭って撃沈されたらしい。っで、傾斜する甲板から落ちて海で死にそうになっっている所をしばらくして、米海軍の黒人軍人に救助されたそうだ。その後終戦まで捕虜として生活して解放されて

もしばらくアメリカにいたそうので46年、ようやく日本に帰国したらしい。

そりゃあ下手したら死ぬ目に遭った人は根性も嫌でもつくだろう。そういう経験がない俺は…まあ根性なんておまけみたいなもの。あの時は感情だけであたっちまった。

…なんて事考えていると家の前までついてしまった。

「じゃ、また明日」

「おう、あ、もう遅いけど1人で大丈夫か？」

「別に大丈夫だよ？1人で夜道を歩くのも結構好きだし」

「ま、まあ気をつけろよ」

「うん」

千尋は走っていき、暗闇に消えていった。

俺は千尋が見えなくなるまでその場に立っていた。

…やばいな、まだ会って日も浅いのなのにこの妙な感じは…俺の精神卒業まで持つか？

part 8 体験入部その1 野球部編

それから一週間ぐらいが経過した。

俺も含めてもう1年生もこの学校には慣れ、悪くいえばおだらけぶりを見せ始めていた。俺も中学時代の怠けが復活してきた。

「あゝ、かつたりい」

「うっ、俺もおゝ」

「まったく、日向はともかく橋立もそういうキャラだったのか」

「しょうがねーだろ、これが俺のデフォルトだ」

だからみよん、俺と勝政と同類扱いしないでくれ。

もう授業も一緒にやっているが俺のほうが特定分野で頭いいことぐらい知ってるだろ？数学とかは似たようなものだけだ。

「心配するなー、私もだらける時はだらけるぞー」

「おお、同志伊吹！ジーク伊吹！」

「うわっ、なにその反応」

「流石日向ね…」

「オーバーなんだよおめえは」

「そこまで言うか!?!」

もうこれもいつもの事になってきた。
そんな時、突然みよんが話を振ってきた。

「そういえばあんた達、部活とか入るの？」

「「えっ？」」

もう俺と勝政でひとまとめだし、ひどいやみよん。
っで、なんだって？部活？

「いや、全然そういう予定ないけど、俺は」

「純に同じ、俺は部活で活動する時間をすべて青春へ！」

「そういうことこそ勝政には無駄だと思う」

「なんだあ純！てめえも似たようなもんだろっが！！」

「知ってる？部活って直接内申に関わるわけじゃないんだけど、その生徒の活動内容に部活の事とか書かれるから入らないのと入ってるのじゃ少し違うらしいよ」

「「ま、マジ！？」」

知らなかった！！

それって本当なのか？よくあるガセネタじゃねーだらうな？でもガセだとしてもそういう事を聞かされると、今窮地である俺達は焦ってしまう。

「な、なあ純、やっぱ部活って入ったほうがいいのか？」

「そ、そうだな！平 唯だって高校生になったのをきっかけにけおん部に入ったんだ、俺らも改めてという事にしようか、なあ勝政？」

「あ、ああ」

うわあ、なにこのわざとらしい演技。

つっつかみよんの視線がなんか俺らを面白がっているかのような…も、もしかして俺らで遊んでる！？みよんってそういうキャラ！？

「あ、おもしろそう。よーし、私も付き合っちゃおうかな？」

「えっ？もしかして千尋も今まで帰宅部だったとかいう？」

「うん」

「そうだよ、千尋ったらあたしが勧めた部もすべて入らず家でごろごろと…」

「それは言わない約束でしょみよん！」

「いめんいめん」

なるほど、同志だったのか。

…うん、意外とおもしろいかもしれない。

「ようし、じゃあ今日から放課後に回ってくか」

「そうだね」

「うん」

「しょうがないからあたしも付き合おうか、まああたしは漫研いんたあくたに入っただけだね」

そういえば3日前にもそんな事を言っていた。

実は本人は自覚していないようだ。絵を描くのが得意らしい、あと意外とオタクっぽい。中学時代のある出来事がきっかけでみよんと呼ばれるようになり、元ネタを知りつつも元ネタの子がお気に入りだからかそう呼ぶように最近では自分から言ってくる様子だ。

ツインテールだからってツンデレとは限らないとはこの事だな。

でもツンデレキャラを演じたら似合うかもしれない…いや、考えるべきはそこじゃないな。

っというわけで放課後。

「どこから回る?」

「うーん、どうしよう?」

しかしここでまた空気を読めない勝政が、俺と千尋が悩んでいるのを無視するかのようには勝手に決定しやがった。

「野球だろう! まずは野球! 男は黙って野球!」

「あの一! 私は女です!」

「大丈夫だつて！大正時代の女の子だつて野球するんだぜ！？」

「そんなオタクでもない限り知らないようなアニメの話なんてしても千尋には通じないと思うよ？」

千尋はオタクではない。

その事をよく知るのがみよんだ。

…っいかみよん流石だな、元ネタわかるのかよ。

「そうと決まればいくぞ純！」

「お、おう」

「野球部って男の子専用だつたような？」

「大丈夫だよ千尋、マネージャーなら女の子でもOKだから」

「そ、そう？…まあおもしろそうだし、ついていこうか」

っというわけで俺らは一同放課後のグラウンドに向かった。

そこには桑園とアルファベットで刻まれた白い服と青い帽子を被るいかにもという部員達の姿があつた。みたところ悪そうな奴はいない。

「体験入部？もちろん構わないよ？」

「ありがとうございます！こら純、ちゃんとお礼しろ！」

「いでっ！頭押すなバカ！」

俺はあんまりしたくもないけど、ペコペコと野球部の先輩達に礼をして挨拶した。その後服を手渡され、着替えた後再びグラウンドに立った。

「おお！似合うぞ！橋立はイケメンメジャーリーガーで勝政は甲子園によくいるあんまり魅力のない男の子！」

「ひどくね！？なんで純はメジャーリーガーで俺は甲子園にいてもいい男児なんだ！？」

「勝政馬鹿！それ野球部で言う言葉じゃねーだろ！」

「はっ！？」

先輩達は鋭い目つきで勝政を睨みつけていた。

とりあえず俺はその場の空気を和らげるべく行動に移った。

「え〜つと、まあ勝政はこついう奴でちよつときついジョークが売りなんですよ！まあ可愛がってください！」

「あはは、なんだジョークか。橋立君は真面目そうだね」

「ええ、自分は」

何大嘘ついているのやら、俺。

とりあえず先輩達が野球のやり方とか部員の心得っぽいものを説明する。正直眠い、俺はもちろん付き添いの千尋とみよんも欠伸をしながら見ていた。

「ねえ純、いつまで続くのこれ？」

「知るかよ」

「よく橋立も日向に付き合う気になったね」

「勝政の奴が強引なんだよ……ってか勝政寝てるし！」

あゝあ、しーらね。

先輩に怒られるぞ……まあそれはともかく、眠い説明が終わると先輩は勝政にバットを持たせた。っで俺はボールを手渡された。

キャッチャーは先輩がやるらしい。

「純！手え抜くなよ？」

「言われなくともてめえとは一度真剣勝負を試みたかった所だ、よし、行くぞ！！！」

「おう！！！」

「てりゃあああ！！！！！！！！！！！」

俺はメジャーリーガーになったつもりでボールを投げた。

その速度、初めてなげるわりには速い120km、思わず先輩達も声をあげていた。

「おお！」

「速い！」

しかし！！

「なっ！？」

勝政はそれをあっさり撃ち返した。
なんてこった、ホームランだと？

「すごいぞあの2人！」

「ああ、とても初めてとは思えねえ」

先輩達はすごく関心している。

まあ俺の場合は姉ちゃんにしごかれたっていうのもあって、強いかどうかは知らんけどそれなりに体には自信がある。だが勝政が思ったよりもセンスがある事に俺は驚いた。

「どうした純？その程度か？いつも調子こいているわりには大した事ないじゃないか」

「な、勝政に馬鹿にされるとは俺も堕ちたな…覚悟しろゴルァ！！
本気で投げたる！！」

「あゝあ、橋立マジになっちゃった」

「がんばれー純！日向になんか負けるなー！」

「ってあんたは完全純の味方かい」

「だってこういうのって不利なほうを応援するんじゃないの？」

「まあ確かにそれやると不利な方は嬉しいけど……」

だが俺には千尋の応援が励ましになった。

よし……ぶん投げてやるぜ……覚悟しろ勝政……！！

「おんどりゃあああああああ……！！……！！……！！……！！……！！」

「な！？あの構えは！？」

「漫画の主人公か！？あの派手なポーズは！？」

先輩達も見てる？

俺が勝政より優れているという事を証明してやる。

俺はものすごい勢いで投げた……がっ……！！……！！

「……お……お前ら……なんて事を！」

へ？なんで俺が先輩に怒られ……俺のボールが飛んでいった方向を見ると1人のスキンヘッドのおじさんが……あれってまさか？

「橋立、双眼鏡あるよ？」

「サンキューみよん！どれ……げっ！？」

つるつるの頭にボールがめり込んでいる。

男はサングラスを掛け、煙草をくわえていた……そして柄が悪そうでもおとなしそうで、でも怒ると怖いあのお方は……

「おい純！なんて事してくれるんだよ！！あれ多分やっちゃんだぞ
！？」

「げえっ！？」

「ちよちよちよちよ！純これってやばいんじゃない？」

「まずいまずい！！」

「やっちゃんなんか相手にしたら命ねーぞ！？」

「は、橋立君…なんて事を…もう少し手を抜いて」

「ええい千尋！みよん！！ついでに勝政！！ずらかるぞ！！」

「おう！！」

「言われなくても！！」

「逃げるのです！！」

俺達は全速力で逃げだした。

あははは、後ろで先輩達が半分泣きながらやっちゃんに怒鳴られてるけどもつどうでもいいや（笑）

part 9 体験入部その2 空手部編

…はぁ、疲れた。あの後逃げて最速で着替えて玄関前まで来た…
まだまだ時間はある。

…でもあのやつちゃんに野球ボールあてちまったのはマジで焦った。

逃げといてよかったぁ…

「ったく、純めえ、よりによってやつちゃんに当てやがって」

「お前が挑発するからだろうが。ったく」

「それより次どうするの？千尋でも参加できるやつがいいんじゃない？」

「うん、私ぶっちゃけいとすっごい暇」

そうか、千尋がいたなそういえば。

なんだかんだで楽しんでいる(？)のは俺と勝政だけっぽいし、千尋でも参加できるったらなんだろう？体育系か？それとも文化系か？

「あれ！？純じゃん！」

その時、俺にはトラウマの声が聞こえてきた。

「あ、暴力女 おえっ！！！」

「誰が暴力女だぁ？…はっ！？皆さんどうも、いつも純が迷惑かけ

てると思っけど」

「いえいえ、純がいるからこそ面白いと私は思ってますよ、朋美先輩」

ああ、なんて優しいんだ千尋。

それに比べたらこの暴力女は……うちの姉ちゃんの攻撃半端じゃない痛いぞ？流石瞬時に不良2人を倒して1人の戦意を喪失させる女、恐ろしや……。

「あれ？橋立先輩その胴着……」

みよんの指摘通り、姉ちゃんは胴着をきていた。

「ああこれ？空手部のだよ？」

「姉ちゃん前に空手やめたとかいってなかった？」

「それは道場のほう、部活じゃまだ続けるよ？」

「へえ、純の姉ちゃんって空手やってんだ。だから純にはあの馬鹿力が……」

「黙ってる勝政」

なんだ勝政？

まだやつちゃんにボール当てた事恨んでるのか？

「え〜っと……勝政君だっけ？大丈夫、純も私よりは弱いから、ね！？」

「おえっ！！ぐるぢいいい」

「ぜ、全然大丈夫そうには見えないのは俺の気のせいかな？」

「は、橋立、大丈夫？」

「朋美先輩それぐらいにしておいたほうが…」

「大丈夫大丈夫！純結構丈夫だから、これぐらい日常のお仕置きで慣れて」

「るわけねーだろ！！いてえよ馬鹿姉！」

「なんか言った？」

「ごめんなさいすみませんでした本当にごめんなさい！！」

「ああああ！！うちの姉ちゃん怖い！」

「黙ってりゃ可愛いのに怖い！怖すぎる！」

「特に俺に対してはなんで暴力振るうのひどいやひどいや！」

「ゲホッ！ゲホッ！冗談じゃなく死ぬかと思っただじゃねーか！」

「あっはははは！まあまあまあ、いつもの事でしょ？それより部活回ってるの？」

「えっ？なんで朋美先輩がそれを知っているんですか？」

「純だけだったらなんか悪い事したのかもしれないけれど、千尋ちゃんともみよんちゃんも一緒でしょ？つて事は悪い事ではない+純の友達の子がいる」部活体験入部！」

あつてる…あつてるぞ姉ちゃん！

「すごいですね橋立先輩、そこまでわかるんですか」

「御察しの通りだ姉ちゃん」

はあく、もう嫌だ。

そしてこの笑顔…まさかとはいえが俺達を空手部に誘う気じゃねーだろうな？

「だったら空手部来ない？心身ともに健康になるよ？」

「姉ちゃんにボコられるのは嫌だ！」

「純てめえ！それでも男か！？俺との決着はどうした？」

「はっ！？…そうだ…よし上等だゴルフ！姉ちゃん部長に頼んで道場貸してくれ、勝政叩きつぶす！」

「そういうわけにもいかないでしょ、ちゃんと教えるまでは対戦させない」

「やっぱ？武道ってやっぱりそこから入るのね。
うん、奥が深いぜ。」

「あの、私実はすごい運動苦手で…格闘技とかできるかわから

ないんですけど…」

「あ、大丈夫だよ千尋ちゃん？初心者も大歓迎だし、最初は誰だつてそんなものだから」

事実、作者は小学生の頃クラスで歳弱と言われてたぐらいなのに格闘技を始めて中学生になる頃には卑怯な手も使うけど喧嘩じゃ負けなくなったとか。まあ勿論中学時代の話でそれ以降喧嘩なんてした事ないけど。

…っつか空手部って女子も入れるんだ。

でもどうせ別、女の子と対戦する事になって事故として胸を触れるイベントはないんだろどうせ？

「あー橋立先輩、あたしはただの見学ですから」

「もちろんいいよ、大歓迎」

今更可愛く見せようたって無駄だぞ姉ちゃん？

俺らは格技室まで案内され、それぞれ更衣室で胴着に着替えた。

「あれおっかしーな？この胴着 亀とか描いてないぞ？」

「描いてるわけねーだろ、亀 流かよ」

「うわぁ、随分本格的」

「うっ！？」

「どっしたじゅ…おおー！？」

こ…これは!?

千尋って胴着も似合う!?

これはいける、小柄なだけに少々子供っぽく見える所もあるが俺的には姉ちゃんより似合っていると思う。これはこれでいけそうだ。勝政も千尋に見入っていた。

「2人とも視線がいやらしいぞ?」

「うっ!」

みよんに勝政と同類扱いされたもつだめだ!!

「それでは……正座!」

部長が呼びかけると俺らは正座した。

挨拶も終え、いよいよ基礎から始まり……っっていつても俺も空手やった事あるからわかるんだよな。まあ段取る前に勉強のほづがやばくなつたし、飽きたからやめたけど。

「お、橋立君切れがいいね」

「ど、どうも」

「部長!うちの弟は経験者だから」

「あっ!そうだったのか」

「まあ一応……」

級は持つてるけど姉ちゃんと比べたら圧倒的に弱いし、威張れるほどじゃないんだよな。さて、一方の勝政は……あれ？こいつの動きも只者じゃない気が…。

「あれ？日向君もなかなかいいね」

「俺中学の時までやってましたから」

「そうなのか。段は？」

「段は取ってませんけど2級まで行きました」

勝った！俺1級！

「ちなみに橋立君は？」

「1級です」

「じゃあ2人とも経験者でもうすぐ段つて所だったんだ」

なるほど…勝政が俺に匹敵する実力の持ち主である理由がようやくわかった。こいつ、俺と同じ格闘経験者だったのか。困ったもんだぜ、どうして俺の周りって強い奴ばかり？…ん？待てよ？千尋は？

「っ…疲れましたあ…」

「がんばって伊吹さん！蹴りあと10回だけだから」

「う、うん！…おりゃ…あわわわ！…」

ド素人でした。

しかも素人以前の問題っばいし、そして見学しているみよんは黙り込んで今回はちよつと可哀そう、空気状態。こうして俺らはある程度の訓練をやり、記憶を蘇らせ、体も動きを思い出し始めていた。

「2人ともすごいじゃないか」

「でしょ部長！特に純は私が直接しごきましたから！」

「そうかあ！橋立さんが…って事は相当鍛えこまれているわけだ。

よし2人とも、2人はこんな基礎訓練じゃつまらないでしょう、組手やってみるかい？」

組手〓対決〓勝政との決着…

よし乗った！！

「いいですよ、おら勝政こい！」

「上等だ純！今度こそてめえを泣かしてやる！」

俺と勝政は向かい合った。

「用意！始め！」

よし！！っというわけで俺は勝政にパンチで攻撃するも勝政はかわした。

今度は勝政が蹴るが俺はかわす…どうやら実力は互角という感じだ。

「よし勝政くられ!!」

「このくそっ!!!!てめえっ!!!!」

「なんの!!そのっ!!!!」

「…部長、早くも2人の戦いが空手から離れてきたんですけど?」

「まあ確かにそうだけど…ちょっとだけ、ちょっとだけ!」

「部長そついう趣味!?…まあ喧嘩は見てておもしろいけどね」

よし!部長も認めた!

もう躊躇する必要はない、今は勝政を倒すことに専念するのみ!!!

勝政も俺も攻撃をかわし、仮に食らったとしても大したダメージを受けずにそのまま戦い続けた。だが戦いが長引くにつれてお互い息切れしていき、ついでにダメージも大きくなってきた。

もはや試合とか関係ない状況だった。

ただの喧嘩に見えなくもないが一応2人とも心得がある。しかも部長が見入っている為、止める奴などいない。顧問の先生さえ現れなければOKという感じだ。

「ぜえ…ぜえ…」

「純…てめえ…」

「実力は互角らしいな勝政。次で決めてやる」

「漫画のキャラ見たいな事言ってんじゃないぞー!」

「よし!あれなんだ!」

「えっ?」

ふはははは!勝政馬鹿だ!騙されてやんの!
よし!隙あり!

「食らえ馬鹿野郎!」

「ぎえええええ……………」

「勝負あり!」

……………勝った、勝政に勝った。
やっぱり俺は勝政より上だった!

「純!大丈夫?」

千尋が心配そうに俺の所に駆けつけてきた。
そつえば気がついたら俺も勝政も傷だらけだった…つか審判空
手から外れた時点で試合止めるよ…やめるとかいう合図なかったか
らそのまま戦っちゃったじゃないか。

「まあ大丈夫だけど?…それより勝政、大丈夫か?」

「あたた、お前少しは手加減しろ…ってかきたねーぞ!」

「勝負にきたねえも糞もない!」

「うつ！…！…否定できねえ……」

「そういうわけだ。まあ勝ち逃げするつもりはねえからいつでも来い」

「ふっ、俺の負けだ。次でめえと戦う時までには腕上げる、勝ち逃げすんなよこら？」

「しねえつての」

勝政は立ち上がった。

俺ももう一回体鍛えようかな？あんな事言っちゃまったし、絶対もう一回勝負しないと勝政の奴怒るだろうな。

「…ってかあんた達、それどこのジャ　プのキャラ？」

「うるせー、男の戦いとはそういうもんだ」

「そつだぞ妙高」

「よ…よくわからない」

いくらオタクでもみよんには男の戦いがわからないようだ。まあ俺だってよくわかってないで言った言葉だけだ。

「男の戦いねえ、でもそういうかつこいい事はお姉ちゃんに勝てるようになつてから言いなさい」

「無理無理無理！絶対アンタには勝てない！」

part 10 ・ボクな少女

GW明け。

えっ？部活はどうした？

うん、あれだ。あの試合後ね、俺も勝政もボロボロでちょっとの間行動不能だったんだ。そして2人でようやく気がついたんだ。別に内申点関係なくね？っと。

そういうわけで俺らは部活入部を断念、退屈なGWに突入し電話で話し合う程度でしか3人とは話をしなかった。そして5月7日、今日は5日間続いたGW明けだ。かったりいけどGWはGWで暇だったし、振り返ると自分がいかにつまらない人生を送ってるか実感してしまっ。

もう慣れた学校の門を抜け、玄関で靴を履き替えるとなんだかクラスは少々騒がしかった。

「おっーす…っっておま！彬良どうした？」

彬良、本名は渡辺彬良^{わたなへあきひ}、まあクラスメイトだ。

「いやあ！昨日夜遊びしてたら見事にどこその不良に絡まれてえ、全員撃退しんだが俺はこの有様だぜ」

こいつそんな喧嘩強かったっけ？

いや、初めて会ったから知らないけど。

「あ、橋立おはよー」

「おはよー純」

「おう、あれ？勝政いなくなね？」

「ああ、日向なら…金曜日の夜に旅に出るとかいつていなくなっちゃったけど」

「おま…それ大丈夫なのか？」

「まあね、いつもの事だし」

みよん曰く、勝政がいなくなるのはいつもの事らしい。
今度は千尋が詳細を語ってくれた。

「日向ね、夏休みとか冬休みになるとどこかに消えちゃうんだよ、
つでその後1日2日は間に合わなくて休んじゃう事が多くて」

「大丈夫なのか？ここ私立だし、欠席って結構響くんじゃないか？」

「そうなんだけど…まあ日向だからなんとかかすと思うよ。どうせ
すぐ帰ってくると思うからあんまり気にしちゃダメだよ純」

気にしちゃいけない事なのか…
まああいつが消えた所で特に困る事はないから、確かに千尋のいう
とおり黙っているのが一番なのかもしれない。

つとまあこうしてゴールデンウィーク明け初日は始まり、いつも通
り授業を受けていたが……まずい、不規則な生活をおくっていたせ
いかやたら眠い…

もはや先生の話を聞くのもかつたるい。

今は数学…もう考えられないほど眠い、整式の除法？何それおいしいの？つーか俺も数学とかついていけなくなりかけてるんだけどどうしょ？べ、別に数学ができないぐらいなら恥じゃない！作者だって数学は壊滅的にダメで赤点ギリギリだったぐらいだ！うん、そう自分に言い聞かせて俺は安らかに眠る事にした！よし、お休み！

……

……

…

「…い、おゝい、橋立」

ん？なんか聞こえる…気のせいかな？

「橋立え！！！」

あだっ！！！！

なんか頭に激痛が！！！！

起きてみると床には割れたチョークが…こりゃ痛いわ…

「はい？」

「はいじゃねーだろコラ？廊下立ってるや」

「は…はい」

紹介しよう！うちの数学担当の香取は今どき珍しい絶滅危惧種の竹刀余裕の暴力教師だ。そうだ…数学担当が香取だって事をすっかり忘れてた…

香取に逆らうとロクな事がない、俺は素直に廊下に出る事にした。

「はあ〜」

「純〜、がんばれ〜」

「は〜い」

なんとなく千尋が励ましてくれた。

でも何故？全然嬉しくないのはやっぱり香取の命令で出る事になったから？

…ふふふ、だが！廊下に立ってると言われて素直に1時校分立っている奴がいるか？座っているのも退屈だから…

よし！

俺は扉を開けた。

「んあ？なんだあ橋立？」

「先生！ちよつとトイレしてきてもいいですか！？」

「トイレかあ…まあトイレは仕方ねーな、よし、行け」

「ありがとうございます！」

扉を閉める俺：ふっふっふ…事実トイレには行く、でもそこでやるのはゲームです！

なんとという計画的な犯行、俺って天才かもしれない。

そういうわけで同階男子トイレへ直行しようとする俺。

ポケットにはP P。香取め、ざまあみる！たとえ教師が1000徹底しようが生徒の不正は1000なのだ！！

…はい、ごめんなさい。正直痛い子っすね俺。

あと3mでトイレの入り口、ん？トイレから何か声が？

ま、まさか先客！？

…まあ、どうでもいいか。

よし、突撃いい……

…っでトイレにいた人物はとうでもない奴だった。

いや、まずね、性別的におかしいの。だって、あの人女の子ですよ？しかも男子便所で堂々とP P持ち込んでゲームをしている。

「……………」

「……………」

えぐっつと…この状況どうしたことか？

「あは…あははは…」

「あはは…じゃねーだろ!!!」

すまん、ストレートに突っ込んでしまった。

「やつぱダメ？」

「ダメだろ普通！」

俺の目の前にいたのはこれまたなかなか街中じゃ見かけない、千尋とみよん同様の1000人に1人の珍しい品種の可愛い子。女子の制服を着ているのはあたり前だが短めのくせのある髪で多分私服と着ると余計にボーイッシュに見えるタイプだ。でも短めとはいってもやっぱり女の子である程度髪はあり、顔もちよつと年の割に幼い所もあるがとても可愛く、一目で女の子とはわかる。

だが問題はそこじゃなくてなんで女の子が男子トイレにいるのかって事。

「だってだって女子便だとたまたまうんこしに来た女の先生に見つかっちゃうじゃん!」

「折角可愛いのに汚い言葉使つな!それと教師って女だけじゃないから!」

「えっ?かわ」

気にするのはそっち!?まずい!!

「あーそうだあそういえば香取の奴が見回りに来るって話だったな」

「ええええ！？かかかか…香取い！？」

どうやら俺の目の前にいる奴も香取の恐怖はわかっているらしい。そりゃそうだろうな、香取は大体1年の数学の教科担任になって徹底的に縛り付ける奴だつて姉ちゃんが言つてたし、あのキャラだつたら苦手な奴として頭に記憶されやすいだろう。

「それはまずい！」

ま、香取が来るとか決まつたわけじゃないけどな。

「あ、でも1時間後にするとか言つてたな」

「1時間後かよ！じゃー安心してゲームできるじゃん」

…そつちかよ。

ん？…今気がついた、その少女がやっているゲーム、俺がやるつもりでいたモン。んじゃないか！…まあ俺も予鈴10分前までやるでしょう。

「あれ？トイレしないの？」

「するかポケット！つてか出てけ！」

「なんで？別に立ちションしてる所みてもボクは気にしないよ？」

だからその顔で汚い言葉使うなつての。

つかボクつてそれあんたの一人称？なるほどボクっ娘か。ますますボーイッシュな感じ。

くそっ！これで八重歯とかあれば完璧なのに！！…いや、でもそれだとの人と被ってしまふ。それに八重歯キャラなら身近にいるし、今更だけど実を言えば千尋には八重歯がある。

まあそれはどうでもいいとして。

「俺が気にするわ！第一俺トイレしに来たわけじゃないし！」

「ええ？じゃあ何しに来たの？」

「授業中に寝てて香取に追い出されて、とりあえずトイレに行くと伝えてゲームを…」

「ボクと同じ動機!？」

「はあ!？」

「ボクも具合悪いくら保健室に行くって誤魔化してゲームしてたのなるほどお、ダメ人間同志がここにいたかあ!!同志がいると何故か嬉しくなるよね。」

「っでっで!あんだ誰!？」

「ストレートだなおい…」

「いいじゃんストレートで!潔いじゃん!」

そっとう問題かよ、まあ答えておっつ。

「橋立純」

「橋立純…かあ…あだ名つけづらい名前だなあ」

「つけなくていいから！」

変なあだ名つけられて広まったらこっちが困る！

「んー、実家は！？」

「実家？喫茶店だけど？」

「よし！きーちゃん！」

「はあ！？き、きい！？」

「完璧！決定！」

「ちよ！おい！」

ちよ！勝手に決定するな！！

だが少女は俺の突っ込みなど無視する…ん？待てよ？こいつの名前何？

「あ、あの…」

「あつ、ごめんそういえば名前乗ってなかった。ボク鞍馬千夏くらまぢか！
まあ好きに呼ぶとよい！」

上から目線!?

もしかして俺こついうのには振り回されるタイプ?

いやいや、それでは余計に姉ちゃんや兄貴や爺ちゃんに橋立家一番のヘタレ男と言われてしまう! そう言わせてたまるか! もっとこつちも上から目線で行かねば!

「なら千夏と呼ばせてもらおうか! ダツハハハ!!!」

決まった…完璧だ!

「そお? じゃあきーちゃんきーちゃん! 早速だけど質問!」

「なんだね?」

ちよつと俺には合わんキャラだがこいつに振り回されん為にはそれも必要だ。

「いきなりだけどきーちゃんってチェリーボーイなの?」

「ぶつ!!!」

なんでも向こつこの言葉にすればいいって問題じゃねーぞ!

つーかそれ元の意味がアレだから男の俺に言っても意味がない! まあ正解だけど…ってそついう問題じゃない!

「何故それを聞く!?!」

「えー? いやねだつて最近は20代になる前に喪失する人多いじゃん、だからきーちゃんもそつなのかなーって……」

「常識的に考えて早すぎる！つーかそんな話振るな！！」

「まずい！早くも振り回され始めている！

「なるほど、チンガソスはまだと…」

「なんでまたそんなマイナーな言葉を！！」

「…もしかしてこいつってただの変態？」

「じゃあじゃあ！アレは何回するの！？月1！？週1！？それとも毎日！？」

「もう何を聞きたいかはわかったけど教えない！！」

「え〜！教えてくれてもいいでしょ！それでもダメだったらボクがきーちゃんにだけご開帳するからあ」

「なんでそうなるんじゃあああああああああ！！！！！！」

「はっ！？まずい！！なんか外から気配が！？」

「そして足音はトイレの中に響いてきた。」

「ふう〜、ようやく帰ってこれたぜ。いやあシンガポールは予想以上に大変だったし、マールライオンは完璧ハズレ…って」

「…あれ？」

「おりよ？」

こ、この男!?

勝政だと?...旅行に行つて休み明けても1日は帰つて来ないっていうあいつがなんで初日に学校に?つかシンガポールまで行つてきたのかお前は...

さて、まあ勝政が帰つてきたのはどうでもいいんだ。問題はこの状況をどうやって勝政に説明しようか。

「男子トイレに女の子だと?しかも純と一緒に...え...とその...すまん、ごゆつくり!!」

「ちょ!おい勝政!!...え...と、もう助兵衛な話はいいから、それより用事が出来たからさいなら!」

「あつ!ちよつときーちゃん!?...少しぐらい話してくれたって...」

なんか言ってるみたいけどよく聞こえない。

まあそれとはかく待て勝政ああああ!.....!!!!!!

part 10 ・ボクな少女（後書き）

・鞍馬千夏

『きーちゃんはまだまだだね』

生年月日：1994年1月11日

身長：152cm

その他のサイズ：B70 W55 H75

特技：早食い。

趣味：読書、

特徴：人目見れば女の子とはわかるけど一人称がボクで髪型は短めの癖のあるもの

とちよつとボーイツシユである。しかし中身はエロ親父並みのエロさで和輝

にすら警戒されているという。しかし実は友達思いのいい奴で身を張って

友達を守ろうとする事もあるらしい。

勉強は純よりできるが理数系は苦手、家庭科も壊滅的で将来が心配になるほ

どらしい。ちなみに背と胸の事をかなり気にしているらしい。

好きなタイプ：きーちゃん！

得意科目：体育、ただし人並み。文系。

苦手科目：理数系と家庭科。

さらにオマケ、名前の由来：

どうも、作者です。こんな小説でも日に数十〜数百人は読んでくれるみたいなのでなんとか頑張っている次第です。5月入ってから急に読者数が減ったのはやっぱりGWだから？皆さんいいですよ、ね、行くところがあって。作者は特に予定もなく貴重な休みをごろごろ

と過ごしております。

とりあえずもうこの登場人物紹介にも飽きてきた頃なのでそれと並行して今回からたま〜に元ネタ解説でもしようかなと思いましたが、まず第一回目は登場人物の名前の由来です。

もうアレに精通している人は気がついたかもしれませんが登場人物の名字の大半は帝国海軍の艦艇に由来しています。妙高とか明らかにおかしいのもあれば橋立とか意外と名字にしても大丈夫なものが結構あります。

っというわけで以下が名前の元ネタです。
信じられないというお方は是非グーグルでググってみてください。

橋立純 砲艦「橋立」

伊吹千尋 巡洋戦艦「伊吹」 或いは未成空母「伊吹」

妙高希望 重巡洋艦「妙高」

日向勝政 戦艦「日向」

鈴谷和輝 重巡洋艦「鈴谷」

鞍馬千夏 巡洋戦艦「鞍馬」 或いは未成空母で雲龍型航空母艦の「

鞍馬」

香取 戦艦「香取」

戦艦多くね？

はい、実を言うと作者は重度の大艦巨砲主義者です…っといっても架空戦記は文章力不足とかいろいろなさ事情で書けません（涙）。ちなみに好きな戦艦は貧弱ながらもシャルンホルスト級巡洋戦艦です。

part 11 殴りこみキター！

つで、その後休み時間。

教室には何故か4組の和輝がいた。

例によっていつものメンバーで話をしていたが話題が例の千夏という少女についてだった。

「つでな！男子便に女の子がいて純となんか卑猥な会話を！」

「違う！断じて違う！」

「まあいいじゃん、おさぼり仲間が出来たんだし」

「そうだよ、純だって一人で廊下の外にいるのはつらいでしょ？」

みよんも千尋も納得するなよ…

「つで、その子名前なんていうの！？」

和輝は興味津津かよ！

ここはまあ名前を教えてやるとしよう。

「確か鞍馬千夏って言ってたような気がする」

「鞍馬千夏？ああ！それ俺のクラスメイトじゃんか」

「へっ？」

和輝と同じクラスだったのかあの子…って事は和輝はそれなりにあの子について詳しいのか？

…ってゆーかなんでそこまで秘密を探ろうとするんだ俺？

「なんでも同じクラスで俺の友で鞍馬と同じ出身校で小学校の頃から一緒だった戸田って奴によればなんでも小5を境にマセガキと化して最近脳内はエロで充満していて、なんかあるととすぐあっちの方向を連想してしまうほどらしい」

とんでもねー奴だな。

「そのえっちい子に純は標的とされたわけね」

「ひよ、標的だと？困るぜそりゃ……」

「災難だな純、だが…俺なら喜んで彼氏になりますぜ！」

「勝政キモッ」

「多分純が普通の反応だと思うよ私は、従って勝政きもい！」

「ぐはっ！！そこまで言うかあ！？」

「」「言う」「」

3人そろって勝政をキモイ男扱いした。

実際キモイし、誰も文句は言わないだろう。

「おれもお前の親友だが正直今の発言は引く」

「ぐっ！和輝まで…」

同じく馬鹿の和輝も流石に勝政の発言に引いたらしい。

「まあ頑張つて純、私にもストーカーみたいなのいるし」

「えっ？千尋にストーカーいるのか？それ勝政じゃね？」

「いや違うよ？なんかね、なんでだろう？」

そうか、悩みがあるのは千尋も一緒か。

多分それは本人は気がついていないんだろうけど見た目だと俺は思う。野郎つてのは見た目で騙されるっていうしな。その点俺は違う、一見モテそうだけど実は暴力女の姉ちゃんがいるから見た目だけがすべてでないという事をわかってるつもりだ。

「千尋って昔からモテてさ、それで中学の時に一時期それがひどくて嫌になって…」

「…」

みよんが千尋の過去について話そうとするとなんだか千尋の表情がちょっと暗くなった。まずいと思ったみよんはちょっと慌てた様子だ。どうすればいいのか迷っているのだろう。

「あっ！ごめん！」

「それ、言わない約束でしょ？」

「えっ？何何？ああ例の伊吹ふと」

「うえっ！…！」

「言うなポケッ!!」

思いつきりみよんに打ん殴られた勝政は窓ガラスを突き破ってお星さまになった。それを呆れた様子で見ている和輝がいるがまああいつの事だ。多分10秒後にはもうすっかり元気になってるだろうし、破損した窓ガラスもいつの間にか直っているだろう。

「あはは、ごめん橋立! やっぱなんでもない!」

「そ、そうか」

ほんとか? 千尋妙に暗いぞ?

…っていつてもこの様子じゃ探ろうとしたら余計に悲しむだろうしなあ。ダメ人間の俺にはとてもじゃないが対処不能だ。

その後も千尋は始終いつもの明るい所を見せなかった。やっぱりかつて何かあったんだろうか? 結局帰りのHRになっても千尋は元気がなかった。流石に心配になった俺はちよつと聞いてみる事にした。

「どうした?」

「えっ!?! ななな、なんでもない!」

「あっち、千尋?」

千尋は逃げるように帰った。

うっん、やっぱり聞くのはまずかったか?

「橋立、余計な事を」

「えっ？余計な事？」

みよんに余計な事と突っ込まれてしまった。
やっぱ踏んではいけない地雷を踏んだのか？俺は？

「とにかくそつとしておいてあげなさい、じゃっ、あたし漫研の活動があるから」

「おう」

「じゃー俺は例によって和輝とゲーセンいつてくる。純はどーする？」

「別にいいや、ゲーセン興味ねーし」

「あっそ、じゃーな」

まあ勝政は予想通りの反応だ。
俺は玄関で靴を履き替え、外に出た…がそこで持っていたのはちょっとやばい奴らだった。

「おうおうそこの嬢ちゃん？暇あ？」

「な、何あんた？どこの学校？」

あれ、前に姉ちゃんがフルボッコにした隼鷹高校の不良3人組じゃないか。

しかも噂の千夏とその友達が絡まれてるし。

千夏は3人に対してちよつと冷たい様子で接する。

「ね、ねえ千夏ちゃん」

「大丈夫」

「ああ？何が大丈夫だい嬢ちゃん？随分女にしては威勢がいいじゃないか？でもそれが痛い目に遭う原因だぜえ？」

「そうそう、こうしたら手え出せねえだろ？」

「きゃっ！！！」

卑怯な奴らだな、不良3人組は千夏の友達を人質にとつた。

「あっ！紅音！」

「ちよ、ちよつと話してよ！」

「うるせえ黙つてろ！！！」

「きゃあっ！！！」

しかしまあ乱暴な奴らだ。

黙れといって千夏の友達に暴力を振るつた。

「ひえっひえっひえ…相良先輩、とりあえず人質1人確保ですぜ？」

「おう、あとはもう1人…これであの暴力女に復讐してやるぜ……」

あいつらはまた姉ちゃんに喧嘩を売るようだ。
しかも人質を使うという卑怯な手を使ってまで。そこまでして姉ちゃんに勝ちたいらしい。

「ちよ！あんた達紅音を放せ！」

「放せえ？いい言葉だねえ」

「むかあ〜！いい加減にしないとボク怒るぞ？」

なんか可愛い…っじゃなくてまずいぞ。まずあいつ強いのか？

「おいおい嬢ちゃん？動いたらこの紅音って子打ん殴るからな」

「えっ？それ卑怯じゃん！卑怯卑怯！」

「うるせえ！黙ってる！」

「っ！？」

「「「「あああ！」「」「」

周りの生徒が一斉に叫んだ。

相良という男が思いつきり（？）千夏のお腹を殴ったからだ。そりゃあ腹殴られたら尋常じゃないくらい痛いのは既に姉ちゃんに打ん殴られて経験済みなのでわかってる。千夏は滅茶苦茶苦しそうだった。でも友達を助けようと顔だけはヤンキーさん3人を睨みつけていた。

…ああもっ見てられん！

こうなったら空手部の部長にすごいと言われた俺が救援に出てやる。

「おいてめえら！」

「ああ？なんだおめえ？」

「どうでもいいだろ？さっさとそいつを放せ、しばくぞー！」

久々に大声でこんな事言ったぜ。

「きーきーちゃん？」

「お前は大した強くもないのに出しゃばるな、そこで見てろ」

「きーちゃん…うん！」

「どこみてんだよ！！おらあっ！！！」

俺は1発横顔にパンチを食らった。

ああいてえ…でも勝政とか姉ちゃんのパンチほどじゃない。でもとりあえず痛いって言うっておくのが基本ですよねー。

「いてえ…」

「えっ？」

「いてえじゃねえかあー！」

俺は鞆で坊主の横顔を叩き、一撃ノックアウトさせた。

我ながら今の攻撃は決まったと思う。瞬時にして俺は次の標的を目立たない茶髪に変え、走ってそいつの所に行き…

「ぐふっ！！ふがつ！！……ああ……」

よし、顔を握ってたらそいつは力が抜け、人質になっていた子を救出した。

「紅音！」

「千夏ちゃん！」

その子は紅音あかねというらしい。

まあそれとはかく俺は次の標的である相良を睨みつけた。

「おい小僧、なかなかやるじゃないか？」

「オラオラアツ！橋立様なめんなよ！」

「は…橋立？…おめえまさかあの暴力女の！？」

「弟だけど何か？」

「くっ…弟かあ。そりゃあ強いわけだ。まあそれはともかく、貴様を倒せば暴力女を倒したも同然、くたばれっ！！」

突如として殴りかかってきた相良の攻撃をすべてかわすか受け止め、思いつきり腹を殴った。腹を押さえて後ずさりする相良に対して俺はさらに蹴りを加え、顎にクリーンヒットした。相良は空中に舞い、やがて背中を強く地面に打ち付けて立ちあがった。

「く、くそっ！覚えてる橋立え！！お前らのびてるんじゃないねえ！！行くぞ！」

「はっ！」

3人は敗走した。

はあく、久々に喧嘩したら疲れた…

「き、きーちゃん？」

「腹大丈夫か？」

「う、うん。ちょっと痛いだけ…」

「そうか、気をつけるよ」

「う、うん。えーっと…ありがとう、きーちゃん…」

ほ、褒められた。

意外とエロ話題以外は普通なんだなこいつ。

「じゃあな」

「うん」

そういうわけで俺は家に帰る事にした。

背後から姉ちゃんと教師どもの声が聞こえたが俺の名前は呼ばれていなかったのでもそのまま無視して俺は歩いた。はあく、多分これからあの不良ども、姉ちゃんだけじゃなくて俺も標的にするだろうな

…どう対処しよう？

でもその前に…千尋の奴、明日までには機嫌直してくれるかなあ？

part 12 テスト勉強

その夜、俺はまあぐーだらしていた。
はあく、ちよつと痛いな、顔が。

地味に強いんじゃないかあの3人？

その時、部屋に誰かはいつてきた。

「うおっ！…びっくりしたあ…姉ちゃんかよ」

「うん。大丈夫？顔？」

「まあ別に大丈夫だけど？…ってかなんで姉ちゃんが心配してる！
？」

あのヤンキーさんを倒した事は誰にも言っていないはずだが？

「あなたに助けられた子から聞いたの、橋立純って人が追っ払って
くれたって」

…すると千夏かあの紅音つて子だな。

でも今の俺はそれどころじゃない、明日学校行きたくねーなあ…千
尋の奴どうしてるんだろ？

「大丈夫だって純、その子も私も純が喧嘩したとか言っていないから
」
「そうか」

それを聞いた俺は少しほっとした。
もしバレたら停学…最悪退学だしな。もしそんな処分食らったら爺
ちゃんに何を言われる事やら…

「あんたって意外といい奴ね」

「そうか？」

いきなりどうしたんだろ姉ちゃん？

今まで褒めるような事なかつたくせに。

「ま、純は根はやさしいしね」

「根かよ！」

「だってそれ以外はダメ馬鹿ニート予備軍じゃん」

「うっ…!!…否定できない…」

やっぱり姉ちゃんは姉ちゃんだ！俺が否定できないひどい事をさら
っという！ひどすぎる…！

「じゃっ、御休み」

「おっ」

姉ちゃんは部屋から出ていった。

再び部屋に静けさが戻る、ほんとあの姉は黙ってればいい女なのに
…しかもあれで生徒会副会長だっていうんだから驚きだぜ。

…寝るか、どうせ寝坊したら姉ちゃんにボコられるし。

……

……

…

はい翌日、学校。

「あゝ、かつたりい」

「おはよー純！」

「ん？おはよ」

…あれ？千尋？

なんか昨日とは違っていつも通りになった？

一体なんだったんだろう？ま、いいか。元気になったんだし。

「だああー！純ー！」

ボコッ！

「いってえー！！何をする勝政ー！！」

「だってだってえー！！今日中間の範囲発表だぜー！？」

「それだけかよ…確かに中間やだけどさ…」

大体いくら中間考査が迫ってるからといって騒ぎすぎだろ…

勿論俺は勉強こそダメだけどそこまで騒ぎはしないぞ、結果が今の時点から目に見えているから潔いほうがいいだろうし。

「あれえ？以外だね。橋立ってそういうネタだと日向と一緒に騒ぎそうなのがするけど」

どうでもいいけどみよんと千尋の2人は俺の呼び方は統一していても勝政の呼び方はその日の気分なのか？勝政と時と日向の時があるけど…ま、突っ込まないほうがいいか。

「そりゃそうだろ。もう結は目に見えてるし」

「でもね純、赤点とつたらロクな事ないよ？夏休み補習とか？」

「ぶっ！！…そりゃあまずい！！…ところで赤点って何点以下から？」

「え〜っと…確か高校だと30点以下が赤点だったと思うけど？」

千尋がすんなりと答える…もしかして千尋って勉強できるの？

「1か30点かあ…30点ねえ…30点……」

「30点？ハードル高くな？」

「ええ！？」

みよんと千尋に驚かれました。

「は、橋立、それマジで言ってるの?」

「うそー!どんな苦手強化でも30点以上はとれるでしょ?」

「いや、俺とれねーけど」

「うそっ!!」

そこまで以外!?

とれない奴はとれないんだ!!

「わかるぞ純、その気持ちは。俺だって30点のハードルは高い」

「30点以下が限界って…2人ともやばくない?」

「そうだよ!みよんの言うとおりだよ!」

確かにヤバイ。

赤点になったらどんな仕打ちを受けるかと考えるだけでも恐ろしいが…留年という可能性もあるしな。しかし高校に入ってからもあるまり授業を真面目に受けてなかった俺はさっぱりわからん。20点とればいいかなって感じだろう。

「やばいな」

「うん、純に同じく」

「うん…そうだ、哀れな橋立と日向の為に勉強会をしよう」

みよんから見たら俺ら二人まとめて哀れなの!?

「どこでやるのみよん?」

もう千尋は賛成してるし…こりゃあ従うしかなさそうだな。

「うん…やっぱ図書室が基本?」

「ですよねー」

勝手に千尋とみよんで場所が決められ、放課後図書室に行った。もちろん勝政も無理やり。

図書室はほこり臭いというイメージがあるだろう、この学校はわりと図書室が綺麗だ。とはいっても俺は図書室に縁のない男だから詳細はよくわからないが。

「よし、やるうか」

「うん」

2人は真面目に勉強を始めた。

うらやましますぎる…ある程度わかる奴らってうらやましますぎる。つで俺らは…

「なー勝政」

「なんだ?」

「二次方程式ってなんだっけ?」

「知るかよ」

やっぱりな。

「えー？つーか二次方程式ってそれもうとつくの昔にやらなかった？」

「知らん」

「同じく」

「みよん…重症だね」

「うん」

ええ、いいですよ。どうせ俺重症だし。

つーかこの学校に合格して入学できた事自体がもう奇跡ですから。

「あれー！？きーちゃんじゃん」

「ぶっ！」

この声！そしてこの呼び方！！
忘れもしない昨日のあの小悪魔！！

「ほう、なかなか可愛い子だな。っで純、きーちゃんって誰だ？」

「お前ら…知らないほうが幸せだと思っぞ？あれが噂の鞍馬千夏だ」

ホントに顔知らないみたいだな。

知らないほうが幸せだったかもしれないけど。

「あの子が鞍馬さん…結構可愛い子じゃん」

みよんは素直に感想をいい、千尋はただぼーっと千夏の事を見ているだけだった。

いやあしかしこれはピンチ、どう対処してくれようか？しかも昨日ヤンキーさんに人質にされていた子もいるし。

「あの！橋立君！昨日はありがとうございました！」

「まあ別にどうってことはないけど？」

「あ、きーちゃん紹介するね。この子ボクの友達で伏見紅音（ふしみあかね）」

「よろしくお願いします」

…俺、ある事に気がついた。

もしかしてこの高校生活って人生で一番いい時かもと。

その理由は…やたらと女友達ができる！

その分フラグがたくさんある！…ただし警戒しないと俺が玉砕するのはまあ目に見えている。それでもちよっと嬉しいかもしれない。

「あ、よろしく」

伏見紅音かあ、これまた絶対名前は帝国海軍艦艇だろう。

そっとう砲艦があったって爺ちゃんがいった。

まあそれはともかく俺も3人を紹介したほうがいいのかなやっぱり。

「この人が伊吹千尋、こっちが…あれ？名前なんだっけ？」

「妙高希望、まあいいよみよんで」

「それなんて東」

「本人いわく気にしないほうがいらしい」

「そ、そーなのか。まーボクは鞍馬千夏！とりあえずよろしく！」

「うん」

ふう、これで友人紹介完了つと…あれ？誰か1人忘れてるような？
まっいいか。

「あの一、俺は？」

「あれ勝政？お前いたっけ？」

「ひびっ…！！」

「勝政ね、よし覚えた！」

あ、さりげなく紹介できた。

まあ勝政は重要人物でもないからどうでもいいんだけど。

「っで、きーちゃん達何やってるの？」

「見りゃわかるだろ、テスト勉強だよ……はあ」

「もしかしてきーちゃん勉強苦手？」

「純ったら二次方程式もわからないらしいよ」

それをいうなよ千尋お……

ん？なんか千夏の様子が……

「きーちゃん？いい点数とりたい？」

「そりゃあまあ……」

俺の友人3人は目の前で起こっている事がよくわかっていないらしく、きよとんとしていた。確かに、つーか俺もよくわかっていない。

「紅音！鉢巻！」

「おーけー！はい！」

「なっ！？」

千夏が紅音から受け取ったものは……

「おお！？これは！？」

「間違いないわ、橋立、覚悟しな！」

「日の丸に七生報国？なんか全然違うような気がするけどその気合の入れっぷりだったら純の勉強苦手が治るかも」

「ええ！？千尋おお見捨てないでくれえ！」

「がんばれ！」

がんばれって言われても……っ！かこいつ勉強できるのか？
ちなみに七生報国の意味としてはたとえ死んだとしても七度生き返
って国の為に報いる事だ。だからテス勉で巻くようなものじゃない
と思う。

いや、待てよ？

ダメ人間 国家に報いれない
できる人 七度死んでも国家に報いる価値がある

なるほど！案外違ってないかもしれない！
千夏がどれぐらい勉強できるかは知らない……だが勝政よりは戦力に
なると見た。

「さて！まずは数学！……え〜っど……これ、なに？」

「えっ？」

「……ごめんきーちゃん、ボクさっぱりわからない」

「……おいしい……！」

ダメじゃん！！戦力外じゃないか！！

「千夏あ……紅音はちゃんと予想していたから全然驚かないよ」

「ひどい！いいんだどうせ！ボクなんか戦力外なんだ！」

「うん」

「きーちゃんのばか！チエリーの癖に！」

「うつつ！……！」

「「「ちえりー？」「」」

3人はよくわかっていないようだ。

「フーか勝政、以外に無知だな。まあいいや。それはそれで助かる。」

結局この後俺は千尋に泣きついて教わったが……

中間考査後

「どつだった純？」

「おお！数学……31点だった」

「うわっ！ぎりぎり……がんばりなさいよ。ちゃんと教えてあげるから」

「マジか？」

優しすぎる！千尋様の優しさに全俺が泣いた。

part 13 先輩と一緒に喧嘩に行かなければならなかったという地獄か

中間考査後の次の週、ようやく夏服開始だ。
なんでもちよつとした事情で遅れたらしい。

今日も俺は千尋と登校、これがもう春から続いているが進展の気配
まるでなし。だが俺は地雷を踏むのが恐ろしくて行動には出れない。
畜生俺の根性無し！

…今、休み時間、しかし眠い。
そんな時……

「おい！橋立つて奴はいるか！？」

うちの高校の番張っている伊藤伸介いとうしんすけという男が突然1年2組の教室
に入ってきた。もうね、俺わけがわからない。

「あれ伊藤先輩じゃない？」

「おお、ホントだ……ってか千尋知ってたのか？」

「うん、一応。鈴谷がうちの番張ってるからって言った」

「なるほど……」

俺は姉ちゃんに聞いた。

未成年なのに煙草を吸ったり飲酒をしたりといつとんでもないヤン
キーさんらしいが仲間思いらしい。っで自分の高校の奴には言葉は
汚いが滅茶苦茶優しいらしい。しかし俺とは無縁の伊藤先輩が何を

しにきたんだ？

「俺が橋立ですけど？」

「ちよつといいか？」

「は…はあ…」

なに？なんなの？

まさか俺しばかれるの！？

「純くがんばれー」

「まあ…生きて帰ってきなさいよ橋立」

「俺は助けないからな」

みんな見捨てないでええええ！！！！

そういうわけで廊下……

「ここだ」

理科準備室？

何かあるのか？伊藤先輩に案内されて室内に入ると、ボロボロの2人がいた。

「…あのー、なんすかこれ？」

「隼鷹の奴らに突然襲われたらしい。なんでも隼鷹の奴らはお前を探しているそうだ」

ちよ！なんて面倒くさい事に!？

「あー、伊藤先輩。まさか俺に戦えと？」

「うん」

気軽にうんって言われても……

「帰らせていただきます」

「ちよ！待って橋立ちゃん！」

「うげえっ!!」

だああきもい!

抱きつくな馬鹿野郎!!!!

「頼むよ!……このままだと貴様の千尋ちゃんや友達も隼鷹の奴らの餌食だ」

「お、俺の千尋!？俺と千尋はそういう関係ではありません!」

「えっ?そーなの?」

「そうなんです!」

それよりなんでお前が千尋の名前を知っているんだ!？
なんというか……あれですあれ!伊藤先輩の情報網ってどうなってる

んすか!?

でも確かに千尋達をボコボコにされるのは嫌だな。だからといって俺がやる必要がある?

「つで、伊藤先輩。相手はちなみに何人…?」

「川村と広瀬が相手にしたのは確か10人だったな?」

「ああ」

じゅじゅじゅじゅじゅ…10人!?

無理無理無理無理無理無理無理絶対無理ツ!!

1対10つてどう考えても負けるでしょ常識的に考えて!

「ちなみに俺に拒否権は?」

「ない」

どうしてこんな事に…

「…俺より姉の朋美のほうが強いんですが…?」

「だって副会長…俺より年下だけど怖いし〜」

伊藤先輩にとっても恐怖の存在なのか、うちの姉は。

「心配するな!お前1人じゃねえ!!俺も一緒に行つてやる!」

「ホントですか？」

「俺は同じ学校の仲間を裏切るような事はしないぞ！！この番長の伊藤様に掛かれば、貴様と組めば隼鷹の生徒10人が相手だろうと楽に勝てる！ガッハハハハ！！！！」

大丈夫なんだろうか？

このガタイのいい角刈り顔傷男？

…しかも決定になってしまったし。

俺はそのあと教室に戻った。

「大丈夫？純？」

まず千尋が心配そうに声を掛けてくれた。

今はその声が天使に聞こえます。

「別に殴られたとかそういうわけじゃなくて…例の相良っているだろ？」

「ああ、なんかこの前伏見を人質に攻めてきた奴らのリーダーか？」

「あの人、ちらつとだけ見たことあるけどいかにも怖そうな人だよね？」

もしかしてみよんと千尋もあの戦闘を見ていたのか？

確かにあの男、相良は先に倒した2人よりも強い。あの2人はあっさり倒せたけど珍しくあの相良だけは手ごたえを感じた。並大抵のヤンキーさんなら一撃で倒せる自信があったのにあんなだけやって立ちあがって走って逃げるだけの元気があった。

見た目も怖いがもっと恐ろしいのは真の実力だ。
あの時の相良は多分本気じゃないだろう。

さらに相良はかなりの酷い奴だ。女の子が相手でも躊躇せずに攻撃する奴だし。

「その相良率いる10人の隼鷹生徒を伊藤先輩と一緒にやっつけなければならぬ事になってしまった……」

「ちょ！橋立…それって……」

「純！やめたほうがいいよ！」

「やめたいけど先輩命令だし！拒否できないこの地獄……！」

「わかるわ〜それ。あたしだって漫研でも先輩命令は拒否しにくいし……」

「純可哀そう……」

みよんと千尋は心配してくれるようだ。

それだけでも今はなんか嬉しい。

「まあ精々頑張れ！俺らは応援している！！鞍馬と伏見に教えて応援してくれる人増やしてやるから」

「あのな勝政…気軽に言うけど相手10人っすよ？こっちたったの2人だぞ？どう足掻いても勝てない気がするんですが？」

「言つとくけど俺は戦わないからな。基本俺は平和主義者だ！」

「嘘つけ！勝政の馬鹿！男じゃねえ！」

「どうせ俺は男らしくないも〜ん！」

「発殴つてもよろしいと思えますか皆さん？」

「一方みよんと千尋は言葉こそ言わなかったが心配そうに俺の事を見ていた。喧嘩予定は今日の放課後、もうやだ、死にたい…」

……

……

…

終わった…いよいよ放課後になった。

「じゃ、多分また明日、或いは病院で〜」

「おう！花は用意しておく！」

「勝政てめえ…俺入院する前提？」

「だってそうだろ？2対10じゃどう考えても勝てないし」

ひでえ…

「だ、大丈夫だよ橋立。あたしは無傷で帰ってくる事を祈ってるから」

「私も…がんばって、純」

「気が乗らないけど先輩命令だし、頑張ってくる…はあ」

勝政だけは嬉しそう、みよんと千尋は心配そう。

勝政…いつか喧嘩に巻き込んでやる。

階段を下りようとするのと千夏と伏見がいた。

「あっ！きーちゃんじゃん！」

「橋立君今日暇？」

「ごめん二人とも、今から先輩命令でちよっくら用事が」

「ちえっ！付き合い悪いな〜きーちゃん…ボク達もついてっ
ていい？」

「危険だから却下、寄り道するなよ」

「あ、待ってよきーちゃん！」

「橋立君この前のお礼においしい蕎麦屋さん奢ってあげようと思
ったのに！」

うっ！ すいません、俺蕎麦大好きです。

マジで蕎麦大好きです。寿司より蕎麦ってぐらい蕎麦大好きです。

「マジか！？悪い！今日は本当にダメだけど明日連れてっってくれる

か!？」

「ほら、紅音、きーちゃんはお蕎麦好きだって予想、大当たりでしょ?」

「うん!じゃあ橋立君、明日ね」

「おう!」

うは!これは気合が入る!

よし明日無事に蕎麦を食べる為にも、千尋とみよんを心配させない為にも必ず勝って帰ってくるぞこの戦い!

校門まで行くと伊藤先輩の姿があった。

そして二人はイザ戦場へ!特に俺は士気高し!蕎麦の為に戦うから。

伊藤先輩と一緒にいった先はどこかの路地裏だった。

そこには…柄の悪そうな10人と、そのうちの見覚えある1人、相良がいた。

「よう橋立…そっちはなんだあ?」

「貴様が相良か…俺は桑園の番張ってる伊藤じゃ!殺されたく無かったらとっとと白石に帰れ!」

「やーだね、俺らはてめえら二人と…橋立の姉ちゃん叩きつぶすまではぜってえここにやってくる。今回は2人まとめて片付けてくれるぜ?おい!やれ!」

「」「」「おう」「」

9人が一辺に襲いかかってきた。
ああもうしょうがない！蕎麦の為だ！戦うぞ畜生！！

「くたばれええ！！」

「うるせえっ！！」

バキツイ！！

「蕎麦の！」

ボコオツ！

「為なら！」

ズゴオツ！

「てめえら全員打ったおしてやる！！！」

ゴオン！！

突き、蹴り、肘打ち、頭突き、あらゆる技を使って俺は一気に4人を倒した。

一方の伊藤もしがみ付かれたりしながらも2人を倒し、襲ってくる残りは3人になった。

「くそつたれえ！！」

「うるせえ！！」

「おっ！？…あああ！！！」

俺は投げ技を掛け、相手は壁に背中を叩きつけてまんぐりがえし状態のまま動かなくなった。さらに横からくる敵の顔に肘打ち、左手でパンチをしてノックアウトさせ、伊藤も1人を蹴りで倒した。瞬時に俺ら2人は9人を倒したのだった。

「ほお〜？一気に9人倒すとはなかなかのもんじゃねえか？…どっちから俺の相手になる？何なら二人でやってもいいぞ？」

「…橋立、俺にやらせろ…番長として桑園の恐ろしさ見せつけたる」

「は…はあ…」

あゝあ伊藤先輩出しゃばっちゃったよ。
俺もつづつなってもしーらない。

part 14・強くて悪い隼鷹の相良

相良と伊藤先輩が向かい合う。
俺はそれを横から見ていた。

あゝあ、帰りたい。

伊藤先輩一応番長だし、強いとは思ってからとりあえずさっさと相良片づけてくれよ……

「伊藤とやら？遺言はないか？」

「くたばるのは貴様だ相良あ！！」

「どうかなあ！おらあ！！」

いよいよ始まった。

先制攻撃を仕掛けたのは相良だった。

伊藤は相良の攻撃を2度ほどかわした。

「てえあ！！」

相良の横顔に右パンチがクリーンヒット！
これは強烈だと思えます。

「いてえ……いてえよ……」

「どうした！？貴様何人も部下がいるわりにはその程度の腰抜けか
！？」

あゝあ、かつたりい。

もうさつさとその調子で終わらせてくれよ伊藤先輩……

「いてえ……いてえじゃねえかよ！！！！」

「うつ！！おうっ！？………チツ！」

腹と顔に2発拳が入った。

もしかして相良にスイツチ入った？

「いてえんだよお前の攻撃……」

「………」

「いてえつつつてんだろ！！！」

「ぐっ！！！」

どうした伊藤先輩？

さっきから殴られっぱなしだと思っうが？

「でええくそっ！！！」

「うつ！！！！！」

伊藤先輩の蹴りが相良の顔に命中、だがかえって相良を怒らせただけだった。

俺が見る限り実力は同じくらいかやや相良のほうが強い。

「いてえよくそつたれがあー!!」

「くっ!!」

「明日デートなんだよあー!!責任とれよあー!!」

「ぐあっ!!」

一度は攻撃を防いだものの、次の攻撃は防げず伊藤先輩は2〜3mほどぶっ飛んで倒れこんだ。こりゃ予想以上に長引きそうぞぞ？

「馬鹿野郎!糞っ!!この!!」

相良は倒れこんでいる伊藤先輩を踏みつけ続けた。

伊藤先輩は苦しそうだが何かの拍子で突然相良の足を掴み、相良のバランスを崩させて相良を倒した後、両手で両足を掴んでそのままドラム間だらけの所に投げた。

いいぞ伊藤先輩、その調子でさっさと片付けてしまえ!
俺は無傷で帰りたいから。

「はあ…はあ…はあ…どうだ、桑園なめんじゃねーぞ馬鹿野郎…」

「へへ、やるねえ流石は桑園の番張ってるだけあるぜ……」

帰りたい…

相良はふら付きながら立ち上がった。

「てえええ!!」

事言つなよ?」

しよーがない、やりますか!

「はい!」

「ぐえつ!」

俺は思いつきり相良の頭をはたいた。

「何をする!この卑怯者!」

「勝てばいいんだよな?喧嘩つて?…これなーんだ!」

「あ!俺の鞆!…返せこの!」

「ほれ」

俺は鞆をドラム缶の中に投げた。

しかもそのドラム缶の中は生ごみだらけで汚いうえに臭いもひどい。まさに鬼畜!

「だあああ!…なんて事を!…このつ!」

「ほれ!」

俺は地面で伸びている男を盾にした。

「あああ!…村井すっかりしろ!」

「バーカ！俺はこつちだ！！」

俺は村井とかいう奴を投げ捨てて思いっきり自分の鞆で相良の顔を打ん殴り、その隙に相良に近寄ってあちこちをくすぐりまくった。

「うっ！！…ギャツハハハハハハハハ！！なに、なにをする！ダツハハハ！！！！」

涙ぐみながら大笑いする相良、まさに隙だらけ！

その隙に頭で顎を攻撃し、ガラ空きの腹を殴って後、回し蹴りで再びドラム缶のある所に投げつけた。そして…

「いっひひひ」

「そ、それって俺の鞆が入ってる生ごみドラム缶…」

「うん！鞆返してあげる！」

「ま…まさかあ…やつ、やめろー！！俺が悪かった！もう二度と桑園高校にはちよっかい掛けないって約束する！頼むからそれだけはやめてええええ！！！！」

「っじゃあ伊藤先輩の医療費払えやゴルア！！」

俺はゴミを相良にかけた。

骨折させるよりひどい事だと思っるのは俺だけ？

「うわ…くっさ…そういえば明日デートなんだって？」

「は…はい…」

俺は相良のポケットに手を突っ込んだ。

「あー！何をする！」

相良のケータイでこの相良の写真を撮り、彼女と思われるメールアドレスを探し、写真を添え付けして送ろうとした。一方の相良はと
いうと…

「ホントそれだけは勘弁して！」

でも俺は押した。
つで瞬時に…

「彼女の × の色は!?!」

「く…くろ…」

「大好き？」

「大好きです！」

「大嫌い？」

「大好き！」

「大好き（ry」

……これがしばらく続いて6回目。

「大嫌い！」

そう言つて千尋は缶ジュース（桃味）をくれた。

「サンキュー」

「あっち行こう、なんでここにいるかはそこで話すから」

「あ、ああ」

つというわけで俺と千尋は近くの公園まで歩いていった。

毎朝二人で登校しているので並んで歩くのは慣れているつもりだが、今日はなんか違うような…そんな感じた。

「純って優しいんだね」

「そうか？相良に対しては鬼のような攻撃したけど？」

「でもいくら不良の先輩とはいってもちゃんと助けたし、それに医療費払えとか結構心配しているみたいだし」

「あ、あれはついその時の感情で？」

「だからいいんですよ。咄嗟に人思いな事を思い浮かべられる。いいことだと私は思うよ」

「そうか？」

自分が相良との戦闘でやった事を振り返ると…やっぱり俺鬼にしか見えないような気が……

「…あつ！つでなんでここにいるかだった！……ごめん、私だけで後つけちゃった」

「なるほど…」

「…もしかして怒ってたりする？」

「しないよ。何も悪い事してないし」

「ふう〜、よかった」

公園のブランコに2人は座った。

子供達が遊んでいるのが見えるがこっちは事は勿論気にしていない様子だ。

「…ね、ねえ純。ちょっとお願いがあるんだけど〜」

「なに？」

「私すごい運動音痴なんだけど…その…せめて人並みになりたいんだけど…」

「つまり鍛えてくれと？」

千尋は強く頷いた。

「…わかった。じゃあ明日からやってみるか？」

う〜ん、普通この場じゃ言わないだろうけど何故言うかって？

それは決まってる、俺は千尋の願いは断れない。

好きですから！…でも地雷だったらどうしようかと恐ろしくて好きだ

ー！とか言えません、勝政みたいに馬鹿じゃないし。

「よろしくお願ひします最強の純コーチ！」

「最強じゃないけど俺でよかったらいつでもやるぞ」

「はいであります！」

元気だねえ。

…よし、明日の日程が大体決まった。

千尋鍛える 千尋も連れて蕎麦屋 二人で帰宅、勇気を振り絞って

……

いけるか！？はたしてどうなる俺！？

part 14・強くて悪い隼鷹の相良（後書き）

おまけ

「おい作者」

「はい？」

「なんかこれ喧嘩小説になってね？」

「うーん、強いて言うならば漫画の影響です。次はどんな奴らを出そうか……」

「えっ！？まだヤンキーさんでるの！？もうやだ俺！」

「強い以外に取り柄がないキャラに言われたくない」

「もしかして俺主人公失格？」

「そうかもしれないですね、まあ最終話まで頑張れ橋立純よ」

「…誰か助けてください……」

おわり。

part 15・キャン イーズなめるなよ！

翌日。

「橋立ー！！」

「うわっ！！……あれ？お二人さんは……」

昨日の隼鷹の奴らにやられて怪我をしている2人組があらわれた。

「聞け！隼鷹に行った俺の友人からの話で相良の奴今日学校休んだらしい！そんでもって番長も遠征延期を宣言したらしい！」

…相良の敗北ってそんなにまずい事なのか、相手にとっては。ただし悪い知らせもあった。

「でも気を付けたほうがいいぞ〜！なんか俺らの世界で急にお前の名前が有名になったし！」

うっ！！

…それもそうだ。

確かに相良って喧嘩は強い方だろう。うちの番格を倒すぐらいだし。

…でもあいつ片づけたらもう喧嘩しなくていいんじゃないの？

ああ、いるんだよね、俺みたいに不憫な奴って。

っで今日も特に何事もなく一日が終わり、勝政とみよんは先に帰った。

そして俺と千尋は約束通り、鍛える為に体育館へと向かった。体育

館は普段は部活やってる奴が占拠しているがまあ俺らが使っても構わない場所だ。

「純」

「ぶっー!!」

思わず飲んでいたらジュースを吹くほど千尋は可愛かった。

くそっ！千尋ってなに着ても似合うんじゃないか！？それぐらい「可愛いです」「（ブリー風に）。

「どした？」

「いや、なんでもありません！実はこれ強くなる秘訣の一つで…」

「純…苦しいね」

「はい、すみません」

流石に無理でした（笑）。

とりあえず謝る俺、まあ千尋は笑顔なので許してくれてるようだ。

「それで純、まずは？…走る！」

「は、走る!?!」

「そう！走る走る俺たちい!!」

「…それいつのネタ？」

「う、うるさい！とにかく男は黙って走るの！」

「はい！私女です！」

「男女平等！爆風スンプいくぜ！」

…っというわけで疾走開始じゃあ！！

とりあえずまあわかったでしょ？俺の歌の趣味が多少古いつて事、そのなのさ、ジャーニーズとか俺斬らいなんですよ。その…あれですね。ごめんなさいファンの方orz

「な、なんだあの男！？」

「速い！」

俺、部活には入ってなかったけど足は速くて陸上部員以上だったんだぜ？えっ？なんでそこまで本気出さかって？それはもうお前、決まってるだろ。

…女にモテたいからだよ。

いやあしかし暑いですね？なんでですか？

「…緑？ 空？ そうか！ 夏が」

「なんだあの速い男何にいつてるんだ。あと曲名言つなよ……」

「でも、なんのネタだろ？」

うるせえ！てめえらには関係ねえ！大体知ったとしてもおめえらにはわからねえ！キャン イーズのすばらしさが！そうそう、父さん

の影響でキャン イーズ好きなんだよ俺！

…そういえば千尋は？

「はあ…はあ…」

もう力尽きかけてる…！！！！

「お〜い、大丈夫か？」

「純だけ疾走するい」

「お前もすればいいだろ」

「無理無理！体力的に無理！」

はは、ですよ〜

…でもここは… 造パワーを出させなければ千尋がここで挫折するかもしれない！だから俺は無理やり強い事にしてみた。

「千尋！なんでそこで諦めるんだ！？がんばれよ！きっとできる！
頑張れ頑張れ！出来る出来る！」（ 造風 ）

「そ、その気にさせないで！」

…あれ〜？

もしかして千尋もキャン イーズのファン？

「その気になるんだ！」

「むっ！なんてひどい！悪魔！」

「違う！俺はやさしい悪魔だ！」

「…純、そんなにキャン　ーズ好き？」

「えっ？なんで？」

やっぱり、千尋は元ネタを知っていた。

なんかすごく嬉しいかも、キャン　ーズといえば男の憧れ！もう日につべて何回見る事やら…それぐらい俺は好きなんだ！

「だって、さつき走りながら叫んだ事とかさつきの事とか、よくキャン　ーズのネタ引っ張るよね」

「ごめんなさい、大好きです」

「そうなの？私も好きだよ」

マジか！？

同志キター！！！！！！

「もうね！普通の女の子に戻りたいとかぐつとキタね！」

「あれは確かに名言だな、キャン　ーズの曲ってあれだよな。車でドライブとかするのに丁度よさげだよな」

「なんとなくわかる！」

.....

……

…

っで、あっという間に夕方になってしまった。

結局訓練はどうしたって？ああ、もうね、キャン イーズの話で盛り上がってしまったってまったくやってませんよ。

「純…結局何もしなかったね」

「確かに…すまん、キャン イーズの話にして」

「別にいいよ、それに今回わかった。私には運動無理！もうこのまま気ままに生きる事にしたよ」

「そうか」

まあ確かに。それはそれで千尋らしいと俺は思った。とりあえずもう日も暮れてきたし、帰るとするか。

俺と千尋は着替えた後、外に出た。

…あ、大事な事忘れてた。

「千尋」

「何？」

「千夏と伏見に蕎麦屋誘われてんだけど行く？」

「えっ？私もついてっいいいの？」

「別に問題ないと思うぞ。足りない分は俺が払うから」

「ホント！？じゃあ行く行く！」

よし成功！

これで俺と千尋が帰りに二人きりになる可能性がでた！
あとは…千夏と伏見をどう処理するかだな。

っというわけで約束の場所まで行った。

その途中千尋の後姿を見ていたわけだが…いいですねえ可愛いね。

L・O・V・E 投げキッスしたいですねえ。

…はい、ごめんなさい。もうキャン イーズのネタはやめます。

「あっ！きーちゃん！」

「あれ？伊吹さんも一緒なの？」

「ん？そーだけど？」

「ええ！！話が違うじゃん！」

「うるせ！俺が奢るからいいの！」

そう無理やり言って千夏を説得し、俺らは蕎麦屋に入った。

なかなか雰囲気の良い蕎麦屋で、例えるならすごく和であり、それはもう冷たい蕎麦が美味しそうな店だ。

俺は冷たいなめこ蕎麦を頼んだ。

やっぱり睨んだ通り、うまい！麺最高なめこ最高山葵と葱の組み合わせ最高！これがわからない奴は日本人じゃないと俺は思っていたりする。

…でも俺ここよりうまい店を知っている。

あそこには敵わんよあそこには！…どこかは教えないけど。

「純…すごい食いつぶり。お蕎麦好き？」

「好きすぎて困るぐらい好き！」

「私もお蕎麦は好きだよ」

おっ！食べ物の好みまで一緒とは！？

これはもじゃ…これはもじゃ！

「よかったあきーちゃんが喜んでくれて！」

「私も橋立君が美味しそうに食べてくれて安心だよ」

「そうか？お蕎麦は当たり前にうまいでしょ！」

「そつだね！」

…あれ？なんか千夏と伏見の俺に対する好感度も何気にあがっているのは気のせい？

それはいい！俺が攻略したいのは千尋なんです！

蕎麦を食い終え、金を払うとちよつとした雑談をした後、俺らは分かれて千尋と一緒に帰路を歩いた。駅まで行き、電車に乗りまた駅で降りる。その間特に変わった会話もなく、なんかすつごく言いづらい雰囲気か漂っていた……ええい男橋立純！根性だせ根性！

「純、今日ありがとね。あんなおいしいお蕎麦まで奢ってもらっちゃって」

「いいのいいの、どうせ小遣いの使い道もないし」

「そうなんだ」

きつと千尋は使い道あるんだろうな。

あゝあ…さて、いつアタックしようかねえ？

…なぐんて考えているうちに家の前についてしまった。

「お店は賑やかだね」

「まあ…一応客は結構来る店だし」

ガラッコーン！！

なんか店の中からすごい音が…

「な、なんだろう？」

「店の中？……ちよつ！」

「純、あれってもしかして純の大っ嫌いなヤンキーさんじゃない？」

「なんでうちにいるの？もしかしてこれは俺に対するいじめですか？」

え〜っと、柄の悪そうなヤンキーさんが5人。

学ランっぽい青色の制服を着ております、いかにもですねえ。

ちよつとドアをあけてみると罵声が聞こえた。

「橋立純って野郎は何処だ？あつ！？」

「純かあ…あやつまたなんかやばい事でもしたのか？」

ぎゃーす（笑）

爺ちゃんに知られちゃった もうだめだ俺（＾o＾）！。

「おい爺！答えるよ？」

「すまんがあやつは外出中だな」

「…ちよつと貴方達！店内で暴力はやめてくれます？」

お〜つと姉ちゃん登場！

一方兄貴は登場せず…多分部屋で漫画読んでいるに違いない。しかしどうしよ？俺のせいっぱいし…ってかあいつら今初めて見たけどなんで俺の名前知ってるの？

「おいてめえら、勝手に人の店で暴れて店員困らすのもその辺にしとけよ？」

「あれ、純、あれって日向じゃない？」

「ホントだ、ってかなんであいつがうちにいるんだ？」

「さあ？」

しかも制服姿。

…まさか今日彼女出来て今さっき失恋してやけ飲みしにきたとか？
…うん、奴の事だから十分ありえる。

「ん？おっ！純じゃないか！」

「わー！！馬鹿！！！」

勝政あ！！

俺の名前を叫ぶなあ！！

「んあ？あんたが橋立純か？」

「あの一すみません、諸君らはどこの学校で？」

「俺らよお、市立西園寺高校なんだよなあ？」

市立西園寺高校…聞いたことはある。

中学校の頃の友人から聞いたが最近開校した新設校らしいが隼鷹の次ぐらいに不良の数が多く、学力も桑園より低くて故に馬鹿の吹き溜まりと化している高校らしい。そして悪い奴も多くてもうお礼参りとか余裕らしい。

市立高校なだけあって暴力には厳しいらしいものの、抑えられてい

ないのが現状らしい。

「俺はよお、西園寺高校の頭の沢村康史さわむらやすしつてもんだあ」

また面倒なのが増えたぞ。

もう相良だけでもやだったのに今度は相良よりやばそうだぞ？
だって剃り込みで口髭あって目のあたりに傷があるんですよ？どう
みてもヤバい奴に見えるんだけど。

「あー、そうっすかあ。じゃあ俺はこれで。あはは…」

「おいどこ行く？」

「やっぱダメっすか？」

「ダメに決まってるんだろ？あっ？」

「はは、ですよねー」

泣きたい。

「きやつー！」

…はい？

俺が右を見るとマスクとサングラスをしたスキンヘッドの男が千尋
を取り押さえていた。

「へっへっへ…この子が無事でいてほしいならちよっとなっつちい
や」

「じゅ…純!…助けて!」

「うるさい!黙ってる!」

ああ…どうしよ……

でもこのままだと千尋が…でも相手は5人だしなあ。そつだ。

「おい勝政、行くぞ」

「ちつ、まあいい。今日出来た彼女に今日フラれてうつぶん溜まってたからな…全員なぶり殺しにしてやるうか」

俺の予想通りかよ…

「姉ちゃん、こいつらの処理は俺に任せてくれ」

「いいの純?あんたあんまり喧嘩好きじゃないでしょ?」

「だって千尋が人質だし、それにどうせ俺こついう事でしか役に立てないし〜」

「…わかった、特別に認めるわ。いつてらっしゃい」

こつして沢村達西園寺高校の奴らと戦うことになっちゃったのだ。はあ…マジで泣きたい。

part15・キャン イーズなめるなよ！（後書き）

キャン イーズ？

うん、明らかに年齢的にズレてるけど作者も好きです。

part 16・思わぬ助っ人？

っというわけでやってまいりましたどこかの空き地。

相変わらず千尋は人質、相手は5人、こっちは2人、しかも相棒が勝政…頼っていいのかこいつ？

まあ伊藤先輩よりは強いだろ、多分。

「さくて、どつちからやるんだ？俺はな、タイムンが好きなんだよお？だからよ、1人ずつかかってこいよ？俺を楽しませてくれよお？」

随分正統派のヤンキーさんっすね。

「純、俺にやらせる。てめえのせいで全然いい所見せれてないからな、俺」

「別にお前脇役だし、いいだろ？」

「やだやだやだ！俺活躍したい！」

「っ！！隙アリ！！」

突如男が裏拳で勝政を攻撃してきた。

しかも勝政は俺ともめ事をしていたので全く気が付いていない。

「あっ！勝政！後ろ！」

「へっ？あべしっ！」

その叫び方で倒れるんかい！

勝政は目と目の間に裏拳が入り、そのままよろめいてしまった所にさらに腹にパンチが一発入った。

「うおっ…くく…」

胸倉を掴むほどらしい。

つまり沢村って強いほうらしい。

「てめえ！この！」

勝政の攻撃を2発防ぎ、逆に沢村が攻撃を仕掛けたが勝政はかわした。

勝政とまともにやりあえているってことはあの沢村というヤンキーさんかなり手強い人ですねえ。

しっかし二人ともよく動くなあ。

「おい」

「はい？」

後ろを見たらなんか3人が笑顔で俺のほうを見ていた。

「お前少しでも戦ってみる？あの子の命がないと思え」

「はっ？」

何の事やらと思って千尋のほうを見たら…なんとスキンヘッドにナイフを突き付けられていた！千尋はとても怯えた様子で俺のほうを見つめていた。恐怖のあまりか声すら出していない。

これは冗談じゃなくやばいと思います！

「ナイフとはねえ……」

「さっすが今井！院卒（大学院じゃなくて少年院の事）だけあるな
！」

これは卑怯でしょ！

「抵抗するなよ？じゃないと今井にあの女ぶっ殺されるぜ？今井は
な、沢村の次に強いんだぜ？」

「……ちっ！抵抗しなきゃいいんだな？じゃあやれよ！！」

「んじゃあ遠慮なく……ふんっ！！」

ドスッ！！

いきなり強烈な蹴りが入った。

さらに顔面に一撃が入り投げ技を掛けられてしまったるもうね、俺
倒れちゃった。そして散々踏んづけられております。

「じゅ、純！」

「うるせえんだよ刺すぞ！？」

千尋は一瞬にして黙った。

しかも目は涙ぐんでいた。

「あの野郎……ぐっ！！」

そして一方の勝政は沢村つて奴に苦戦していた。
どうやら最初の一撃が予想以上に大きなダメージだったらしい。

「…どうした？さっきと比べて勢いがなくなっただんじやないか？沢村さんよ？」

「…調子に乗るなあ！！！」

バキッ！

凄まじい音が周囲に響いた。

「ぐはあっ！！！」

勝政は倒れこんでしまった。

しかしすぐに立ち上がり、沢村に立ち向かっていった。根性だけはあるな、勝政の奴。

しっかしどうしようかなあ？勝政が100%勝てる保障はないし、俺抵抗したら千尋殺されちゃうし……困ったなあ……どうしてこうなっただらう？

それに、そろそろどうにかしないと体のほうが持たない。

3人に相当踏んづけられてるしなあ。

そんな時、救世主(?)が現れた。

突如として今井を後ろから絞めつけ、刃物を分捕って捨てた後、背中中に1発を入れた男がいた。その歳今井は力が抜け、千尋は脱出することができた。

「だ、誰？」

「……よう」

「…さ、相良!？」

「ああ!？なんだよおめえは!」

俺を踏んづけていたヤンキーさんの1人が相良に対してそういう。……っ！かなんで相良がここにいるんだ？相良は絆創膏を貼っていたり頭に包帯を巻いていたりなど、昨日の喧嘩で相当な傷を負ったらしいが力は多分そのままだろう。

あのスキンヘッドの今井が10秒ぐらい寝ていた。

「ちっ……誰かと思えば……沢村さん!こいつ噂の相良っすよ!？」

「ほお?すると昨日橋立に生ごみ掛けられた奴か？」

「…おい橋立。貴様それでも昨日俺を倒した男か？」

相良は俺にそう言った。

「いや、なんっ！かね。アレ、俺抵抗したら千尋殺されるし」

「……まあいい、橋立、てめえはあの今井って野郎をやれ。俺はこのカス3人と遊んでやる」

「な、カスだと!？」

しかしどういつつもりなんだろ？
なんで相良が俺らを助けにきたんだ？

「相良、てめえどういつつもりだ？」

「勘違いするな、俺はてめえを助けに来たわけじゃない。西園寺如
きが出しゃばりがって…てめえらは隼鷹に屈服してやがれ」

うわーでましたよ！ツンデレキャラ…

お前がツンデレでも何の需要もないと思っただが？

「なんだと！？おい！こっちは3人、相手は生ごみ野郎！やっちま
うぞー！」

「「おう！！」」

「遅い！！！」

バキィッ！！

相良の強烈な一撃が3人組の1人に入った。

殴られた奴は口から血を流していた。相当強力な攻撃だったらしい。

「純！」

「おう！」

さーて、こっちも反撃開始と行きますか。

「今井さんよ、随分痛い目合わせてくれたな。100倍にして返す

「からな」

「上等だ、来てみる？」

「うおおんどりゃあ！！！！」

ガッ！ガッ！パシッ！

「このおっ！！！」

「遅いわボケエツ！！！」

ズンッ！！

俺の拳が今井の腹にめり込んでいく感じが伝わる。
今はその後、滅茶苦茶苦しそうに腹を抱えた。

「おお……おお……橋立ええ………図に乗んな！！！！！」

「うるせえっ！！ハゲは黙って寝てろ！！！」

「うっ！！！」

顎に蹴りをくらった今井は小さく叫び、そのまま宙に舞った後激しく背中を打ち付けて完全に伸びてしまった。

…これが2番目か、どうやら1番目の沢村とは随分差があるらしい
…とりあえず俺は千尋に近寄った。

「千尋！大丈夫か？」

「うん、傷はないよ。ありがとう、私の為にあんなに…」

「別にいいって、幸い大した怪我じゃないっばいし。さて……」

俺は正面を睨んだ。

3人を相手にしている為か苦戦する相良、沢村と互角に戦つ勝政……どっちを先に助けるべきだろうか？実力的には沢村が一番、なら沢村をたたむ！！」

「うおりゃあつ！！！！」

俺は飛び膝蹴りを沢村にしかけた」

「うつつ！！」

流石です！一撃ノックアウト技でした！

沢村は…多分しばらく起きないだろう。

「純！余計な事を！」

「結構苦戦してた癖に、それより…」

「ああ」

「相良！3対3にするぞ！」

俺と勝政は相良と戦ううちの2人を殴った。

2人はそれぞれ反対の方向にぶっ飛ぶ。

「ちっ…昨日の傷がまだ痛むぜ」

「行くぞ！」

3人は意気込む。

そして各自自分の相手へと襲いかかった。まず俺は腹に思いっきり蹴りを加えて一撃ノックアウトさせた。一方勝政も回し蹴りで一撃KO、相良は2く3発殴られるが3発パンチと1発頭突きでようやく倒した。

「……ふっ、西園寺の雑魚どもめ」

そのわりには苦戦していた相良さん。
それをいうのは無理があると思います。

ま、確かに相良のおかげで形勢逆転となったわけだけだな。

「相良、サンキュー」

「貴様倒すのは俺の役目だ。西園寺の雑魚にとられてたまるか。じやあな」

っと相良はよろめきながら夜の闇に消えていった。

…そういえばあいつ最近ずっとこの辺にいてるけど学校行ってるのか？

「…さて、俺も帰るか」

っと勝政も闇に消えていった。

空き地に残ったのは俺と千尋のみ…おっ？ついに来たかチャンスが！？

「大丈夫？純？」

「まあ、それよりすまん。なんか俺のせいで面倒な事に巻き込んでっーか俺なんかやったのか？」

「別にいいよ、それに純何かやった？」

「いや、心当たりが全くないんだけど…」

「ヤンキーさんのせいだよ、純は気にしないの」

そうか、気にしないほうがいいのか。

…っじゃあ千尋の言葉に甘えて気にしない事にしようか。

「よし、帰るか」

「うん」

その後何故か俺は千尋を家まで送った。いや、ちゃんと理由があるんだけどな。さっきの西園寺高校の奴らみたいなのがうるついていたら困るし、だから家まで送ってあげる事にした…が！

「な、なんじゃこりゃああああ…！…！…！…！…！」

ここにはあつと驚く豪邸が！

「これ？うちだよ」

「うっうっ…うち？これ、家！？」

もう庶民の俺には感覚がわかりません！

ってか…全然そんな感じしなかったけど千尋って金持ちだったのか！

「お、お前の家金持ちだな…」

「うん、でもお嬢様キャラとか私嫌いだし、ご覧の通り自由気ままに生きてるよ」

「そ、そうか」

まあ確かに俺もお嬢様キャラは苦手だ。

…でもこの家をぱつと見たら普通に出れでも驚くぞ？このご時世によくこんな家に住んでられる人がいるもんだな。ん？

門札にはとんでもない言葉が…

ええつと…伊吹組…えええええ！？

「ちょ！伊吹組って何！？」

「うちだよ？」

ま…まさか千尋って極道の娘！？

あれだよな？伊吹組って…ネーミング的に絶対やっちゃんだよな！？

俺は恐る恐る聞いてみた。

「なあ千尋」

「なに?」

「お父さんってどんな人?」

「うちのお父さん? うーん、スキンヘッドでサングラス掛けてて白いスーツ着てて、煙草もよく吸うよ」

笑顔で千尋は説明するけどそれってヤクザじゃん!!!

俺はなんとなく思った。ここは早く逃げたほうがいいんじゃないか? ヤンキーさんなら相手にしてもまあ大丈夫として、ヤクザはまずいぞ?

「千尋おつ!!」

な、何今の声!?

怖!

「あつ、お父さん」

「今までどこに行ってたんだ!?! 流石に何回も遅いと心配するぞ...
...って誰じゃあその男は!?!」

きゃー!!! 千尋の説明通りの外見だああ!!!

怖すぎる! 滅茶苦茶怖すぎる! なんかポン刀持ってるし! もしかして拳銃チャカとか持ってたりする?

「ちよ! お父さん怒らないで! この人は私を助けてくれた人なの!」

「えっ? マジ?」

「ホントだよ」

「…なんだってえええ!?!…よく見れば傷だらけ!誠のようだな!」
「…えっ?なにこれ?」

「ハツハツハ!?!すまんかったな小僧!名前を名乗れ!」

な、なな、名前!?

まさかこの後俺突然バツトで後頭部殴られたりするの?嫌アアアア
アアア!?!?!…でも怖いから素直に従うしかない。

「は…橋立純です…」

「ほうほう橋立純かあ…まあうちの娘を体を張って助けてくれたわけだ!この伊吹組頭首、伊吹宰平、心から感謝する」

「お父さんね、伊吹財閥の総理事なんだよ。つで伊吹財閥の別名が伊吹組なの」

「そ、そうなのか…」

ややこしいわ!!

伊吹財閥ってほうが絶対響きいいっての!伊吹組なんて聞いたら普通の人が逃げるわ!

「ささ!あがってくれたまえ!」

あがる?

…まさか殺す気!?

…でも怖いし、従うしかないね。

「は、はい」

「純、お父さんああ見えても根はやさしいから心配しないで」

心配するわ!早くお家帰りたい!

part 17・伊吹組の問題児

招待されてしまった伊吹家。

中は結構綺麗だ。何より猫とか犬の数が多し。

「お父さん動物好きでさ、そこらじゅうから犬とか猫とかつれてくるんだよ」

「そうなのか」

…それなんてブ　マの父親？

すると千尋の父さんがやつてきた。ポン刀は常備品らしい。

「まずは、うちの千尋を助けて頂いたうえにうちまで護衛をしてくれた事を心から感謝します」

「いえ、ただ俺同じクラスでまたまたうちの店でお宅の娘さんが不良たちからまれていたのを見ただけなので…」

一部フィクションだけどまあ大体正解だな。

「それで、相手は？」

「西園寺高校っていう所のヤンキーさん5人でした、まあご覧の通り負傷しましたが5人一気に片付けましたよ」

まあ一部はフィクションだけど、どうでもいいや。

その後話を聞く限り、伊吹財閥は江戸末期に成立し、その後はあらゆる産業に手を出し成功して、特に軍需産業の収入はすごくて今で

も自衛隊の装備の一部に伊吹財閥のやつがあるとかないとか。

「…だが、我が伊吹家も存続の問題に立たされておるんだ」

「ど、どんなですか？」

「実は我が家には千尋の上に1人兄がいるんだが……そいつがまたすっごいワルでな」

「そうなのか千尋？」

「うん、普通に妹を思いつきり殴るひどい奴だよ」

財閥の頭首の子供だからっていい子ちゃんってわけじゃないんだな。でも千尋じゃ力不足だし、その兄さんじゃ無理だろうし、確かに存続の危機だな。ってか世襲制なんだ。

「っで、まさか伊吹さん」

「そう、そのまさか？」

俺に千尋の兄貴を更生させる為に喧嘩しろと!?

「…倒してくださいと？」

「失礼だが親父の俺は情けないことに見た目のわりには喧嘩は弱い…千尋もな、うちの誠を抑える事はできん…が君ならできそうだな。不良5人を一気にたためる力をもっているくらいだし」

「すみません、俺喧嘩上等じゃないので帰ってもいいですか？」

「…報酬は南の島旅行、お友達も連れてっていいぞ？」

「ナニイ！？」

「私も行っていい？」

「もちろん！いい思い出つくっていい！」

南の島旅行？

南の島…南の島…：水気！？

千尋の水着だと！？これは…引き受けるしかない！

つというわけで読者の皆さん南の島に行きたいからもうちよつとだけ我慢してください！

俺、橋立純はある作戦を立案した。喧嘩に勝つ 南の島に行く 夜

千尋にアタックする。

これで本心を言えるぜ！

考えてみればさっきの喧嘩は千尋にカツコ悪いところを見せただけ…汚名返上だ！

「純！頑張つてね！」

「おう！…ってか普通女の子ってそこで止めない？」

ふと俺が思った事だ。

大抵のヤンキーさん出てくる漫画で女の子は主人公の喧嘩をやめさせようとするけど…止めないのかい。

「えっ？だって南の島行きたいんだもん」

「その為に俺犠牲になるの!？」

「うーん、がんばって!」

「ちょ！俺の犠牲は二次かい！

…まあ確かに、南の島いきてええええええええええ!!」

「どこだろう？サイパンか？グアムか？まさかギルバート諸島!？」

「よし決定だ!…誠の奴は北区の市川高校の番格だ。覚悟してかれよ」

「は…はあ…」

「へ？市川？」

「なんでまた恐ろしい高校なんだよ!!」

「市川高校とは中学の時の友人談によるととにかく凶悪な奴らが多いらしく、女の子のレベルは高いが男はとにかくワルが多いらしい。」

「つというわけで翌日。」

「おーい勝政大丈夫かあ？」

「別に大した怪我じゃねーけど？」

「それより聞け勝政」

「な…なんだ？」

「…来週、市川高校に殴りこみに行くぞ？」

「はぁ！？」

やっぱ勝政は驚きました。

そりゃそうだ。友人の話によれば市川高校は隼鷹高校に並ぶほどの凶悪高校らしいからな。勝政の「はぁ！？」だけが教室内に響き、みよんと千尋はきよんとした様子をこっちを見てきた。

「シート！馬鹿、叫ぶな。皆に知られたら先生にチクられるだろ？」

「なんで態々市川なんてヤバい所に殴りこみにいくんだよ？」

「うるせっ！俺だって本当はやだわ！…でもちよつと怖い知り合いの人のお父さんに頼まれてだな。そういう事になってしまったんだよ。だから勝政、おまえも付き合え」

つとわいうがやっぱり勝政は嫌そうな顔をしていた。
はぁ……つとか悩みつつ、いよいよ襲撃予定日の一週間後になっ
てしまった。

勝政は乗り気じゃないし、ぶっちゃけていうと俺も喧嘩やれたくないし、でも千尋は期待してるし。

「純」

「ん？なんだ？」

「南の島」

「うっ… ちょ、待ってくれ！今日襲撃予定だから」

「は〜い！…あと、無事に帰ってきてね」

「出来ればな」

できりゃそうしたいですね〜。

でも市川高校に喧嘩売って勝てるんでしょ〜かね〜俺。

「…あっ！そっだ勝政！」

「なんだよ純？」

「そもそもだ、この小説にコメディータグがあつたな？」

「うわ、それを引っ張るのかよ…っでなんだ？」

「つまりだ…どんなおかしな手段を使つても勝ちゃ誰も文句いわね
ーんだYO！！」

「うわっ、俺こんな卑怯な男始めてみた」

そうさ！俺は元々卑怯な男だ！

最近正攻法で戦つてるが実は卑怯こそ俺の最大の戦術！

そもそも戦いにおいて卑怯とかは関係のない。日本軍の夜襲攻撃や
ドイツ軍のミサイル攻撃だつて卑怯といえは卑怯だし、アメリカ軍
の原子爆弾とかソ連軍の大量のT-34とかチート以外の何物でも
ない！

つまり戦いは卑怯なしには勝てないのだ！

…ごめんなさい、実はプチミリオタなんです俺。

「つーわけで勝政！武器を用意しろ！」

「武器？…なんか使えそうなのうちにあつたっけなあ？…あつ！
いいのあるぞ！」

「なんだ！？」

「ケーニヒスティーガー！！！」

「なにい！？ティーゲル！？しかもケーニヒスだと！？」

おおおおお！？

それって当時ドイツ軍が誇っていた第二次世界大戦最強クラスの重戦車じゃないか！！100mmの装甲を持つティーガー？でさえすごいつていうのに…ヘンシャル型ケーニヒスティーガーは砲塔180mm（傾斜10°）！車体150mm（傾斜50°）というところでもない装甲！しかも装甲だけじゃない！88mm戦車砲はもう強烈！あの鬼戦車T-34でさえこいつには耐えられない！

くそつ！勝政の家は何なんだ！？

ま、まさか？勝政って実はカツマサ・フォン・ヴィットマンとかいう日本人とドイツ人のハーフなんじゃないのか！？それも親父はあのミヒヤエル・ヴィットマンと遠い関係だとか！？

「まあ1/35だけどね」

「プラモかよ！」

「しょうがねーだろ？じゃあお前なんかあるのか？」

「うーん……」

俺の部屋にあるもの？

ハヒとみると長のフィギュアと、苦勞して作った航空母艦赤城の模型と、自作の可愛い女の子のフィギュア数体と、リー・エンフィールドのモデルガンと、多砲塔戦車のT-28中戦車のプラモ？うむむ…使えるのがリー・エンフィールドぐらいしかない。

「リー…エンフィールド？」

「はあ？なんだそれ？」

「俺は紳士だからな」

「し、紳士？」

わかったぞ！

こいつきつとカッコいいからってティガーのプラモ買っただけに
違うない！

つまりミリタリー知識なら勝政より上！！…でもこのご時世まま
じゃあんまり役に立たない気がしてきた…はあ…いいだよ。どう
せ俺は馬鹿っすよ。公立すべって滑り止めに入った馬鹿ですよ。

「っで、どうすんだ？市川高校相手に正攻法で勝とうたって無駄
だぞ？お前もつと卑怯な事思い浮かばないのか？」

「うーん…卑怯…卑怯…あっ！」

っというわけで放課後！

「なんだあてめえらはよお！？」

「俺か？さすらいの宅急便」

あの千尋のお父さんがくれた写真にそっくり…っとするところいつが
伊吹誠いぶきまことか！確かに悪そうな男だな…だが「1人」なら怖くねえ！！

「「ふっふっふっふっ…」」

俺と勝政はわざとハモらせて笑う。

「な、なんだよ？てめえら…一体どういっつもりだよお！！」

「伊吹誠君だったな？お父さんの勅命だ！直ちに不良少年をやめられたし！」

「ふっ、ふざけんなよお！！」

「…っじゃねえと…おらあ！！！！」

「っわっ！！何をする！！」

「勝政！ブツを用意しろ！」

「おっ！！」

俺も思いつきで考えた作戦…

それは……ネコ耳メイド服を着せてついでに首輪をつけさせてさらに!!!

「おい、相良くきていいぞ」

「ったくなんだよお前らはよ？俺は暇じゃ……ってなんだこのグロテスクな物体はああ!!!!!!」

「ばつきやろー俺は人間！市川高校の番張ってる伊吹誠じゃあ！！」
相良の評価もおかしくなってしまうが……まあ南の島旅行の為にも我慢してもらおうとしようか。

「相良！お前の任務は……」

「ちょ！てめえ何俺の首に……」

俺は誠の首に首輪をつけ、その首輪にとりつけられているロープを持って相良の手を無理やり開かせ、相良の手に置いた。

「ちょ！おい橋立！どついう事だこれは!?!」

「つまりだ、相良。悪いけどそいつの散歩を頼む。もう悪い事しませんじゃん！って言った時点で放してやれ」

「だああああ！！誰がそんな屈辱的な事いうかああああ！！！！」

「っじやあずつとメイドさ」

「ぶざけんなてめえ!!」

「おい！！暴れんじゃねえよ市川の伊吹さんよあ！！俺もとばっちり食らうだろうが！！！！」

ボコッ！！

誠は相良に打ん殴られた。

だけど誠は抵抗するから相良はさらに殴り続ける。そしてここはどこかというところ…実は駅前近くの脇道でたまたま人が通ります！

「っじゃ、相良。後は頼んだ」

「じゃーなー」

俺と勝政は相良に別れを告げてそのまま帰った。背後からは誠の叫び声が聞こえてくる。

「待てえ！！橋立とかいったな！？…その制服桑園だなあ！！！！覚えてろ今度復讐に行つてやるぞ畜生！！」

「うるせえ！黙ってる！！もうめんどくせーから市川まで送つてやるよ！！」

「や、やめろーこんな姿見られたら番長としてまずすぎるっての！！おい馬鹿！！その制服隼鷹だな！？今度覚えてるよバカヤロー！！！！！！」

あゝあ、しーらね。

あとは結果を待つとしようか

翌日

「あっ、純!」

「おう、どうだお前の兄貴?」

「うーん、なんか急に真面目になったっていうか」

予想外の結果、更生できた。

「でもどうやったの?」

「んーとだな」

いや、待てよ?

あれをいうのは流石にあいつにとっても屈辱だよな?

∴非公開にしておこう。

「すまん、やっぱなんでもない」

「?」

よかった。千尋はよくわかってないようだ。

「っでさ、南の島決定だって。今度の土曜日!」

「おお!」

「なになに?南の島?」

「なんだと!？」

みよんと勝政がたかってきた。

まあ元々こいつらも誘う予定だったからいいが。
しかし予定外の奴まで話を聞いていたらしい。

「なになに!?!南の島!?!ボクも連れてって!」

「私もお願いします橋立君!」

「なんだと!?!勝政でめえずるいじゃないか!」

「ちょ!和輝!俺はまだ行くときめてねええ!!!」

何故か千夏と伏見と和輝まで来てしまった。

…はあねこりゃあ今週は危ない土曜日になりそうだ。いろいろな意味で。

part 18 ・わーい南の島だあ！！

っというわけで俺らは今空港にいる。

出発は金曜の夜。そして今がその金曜の夜。

参加者は俺含む4人＋エロ女1人その友達1人勝政並の馬鹿1人＋暴力姉ちゃんとオタク兄貴だ。

つまり9人……結構な人数になってしまった。こうなると誰かは空気になるが……ここは和輝に空気になってもらうとするか。

行き先は……

「なあ……千尋」

「なに？」

「どこどこ？」

「うーんっ……パラオのどこかの島で私も名前とかよく……」

知らないのかよ。

まあ確かにいい所だ、いかにも常夏の島という感じで……って。

「こ、これは!？」

俺の目の前に見えたのはどう見ても錆びた要塞砲。

さらに砂浜を見渡すとボロイトーチ力等があちこちに見えた。

「すごいね、今ときこんな場所あんまりないよね。漫画のネタに出

来そう」

一体どんな漫画？

銃弾飛び交う中に可愛い女性兵士がいて弾をかすって服が破けて脱げてしまつて全裸になつてしまつとかいふのだつたら買つちやいますよ俺。

「うーん、これは15サンチ級の要塞砲だな、いわゆる沿岸要塞砲」

つと無駄に詳しい説明をする兄貴。

正直グダグダになりそうなので俺は止めに入った。

「兄貴、無駄な説明は別にいい」

「うう…折角出番だつてのに…」

「脇役風情が調子乗るな！」

「ひいひいごめんなさあぁい！…！」

うちの兄貴は半泣き状態でどこかに逃げてしまった。

「きーちゃん泳ごうよ！」

俺の目の前に現れたのは水着姿の千夏と伏見だった。

…早くね？

「お前ら張り切りすぎだろ……」

「そりゃあもちろん！この日の為に1日12時間は水着選びに費や

したぐらいだし！」

一日の半分を水着の為にだと!?

…暇だな。

しかしそのわりには…いや、これいっていいんだろっか？

「っで！ボクの水着姿の感想をお願いしますきーちゃん！」

「いきなりに言われても…」

まずは見て行こうか。

上：セパレーツ

下：ボーイレッグ

俺はふと思った。

子供かこいつ？

…つかリアルな感想を言ってあげよう。

どうせ嘘言っても追及してくるのは目に見えてるし。

「うん、似合ってると思うよ」

「ほんと!？」

千夏は目を輝かせた。

「ああ、見事にだよ、もうね、若く見えるよものすごく。なんていうのかなあ？5〜6歳は若く見える!」

「ほんと!？ありがとっつて……つまりきーちゃんはボクが子供に

見えると?」

あ、もしかして地雷だった?

「ちょ!待て!」

やばい!目がマジだ!

すると突然千夏が近づいてきて…俺にくっついたと思いきや!

「おりおあ!…!」

「うおわあっ!…!」

「お!?なんだ!?」

「あっ…橋立がすごいことに…」

「純、なんかおもしろそう!」

全然面白くねええええ!!!
いてててて!!!

えっ?俺今どうしたって?

そうだな…千夏に駱駝固めを掛けられております!
つまりキャメルクラッチ…痛いし苦しい!

「いたたたくるぢいいい!…!」

「うるさい!ボクの胸にケチつけるなああ!…!」

「しょうがねーだろ事実は事実じゃねーか!!」

「なんですって?誰が貧乳ですって!?!」

「ちょ!待て!言つてNEEEEEEEEE!!!」

千夏の固め技は半端じゃなく痛い。

つていうか千尋ガン見:俺の計画が:俺の夜間攻撃作戦がこのままでは失敗する可能性が高い!

まずは千夏の暴走ほなんとかしなければ。

…とはいいつつ勝政と馬鹿兄貴はうらやましそうに見ているし、姉ちゃんはやれやれつて見てるし、みよんと勝政は完全に楽しんでるし、伏見は千尋と海で遊んでるし:つてか千尋いつのまにあつちいつたの?

まあ簡単にいえば助けはない!

「ああ…まずい…意識が…:…なんだろう?大平原が見えてきたお…:…」

「つ!!」 大平原〓自分の胸と脳内変換した千夏。

「大平原じゃないわあ!!よく見なさい少しはあるでしょボクも!!」

「つぎゃあああ!!胸じゃねええええ!!」

ま、まずい!!

意識が!

ああ……もうだめだ……

……

……

…

「はっ!？」

気がついたら俺はパラソルの下だった。

「おう、大丈夫か？」

「純く、なかなかあの子いい技仕掛けてたね」

兄貴と姉ちゃんが視界に入った。

「うう……酷い目に遭った……」

「そりゃあたりまえでしょ。女の子の胸の文句いったら傷つくに決まってるじゃん」

「いや、俺胸の話一切してないんですけど……」

ですよな？

俺別にべったんこですねえとか言っていないっすよね？

「それで、どうだった？あの子に触れた感想…」

兄貴が息を荒くしてきいてきた。

「きめえー！あっち逝け（誤字じゃないよ、真に俺が思っている事です）」

「うわあああんー！！」

兄貴は泣きながらまたしてもあっちに行ってしまった。

…っ！かああいうキヤラだっけ？あれが世間一般にいう残念なイケメンか…

「きーちゃん！」

きやがった！小悪魔が！！

しかも伏見と千尋も一緒だった。

「純く、大丈夫？」

「ごめんね橋立君、千夏ったら暴走するとすぐ固め技に入るんだよ」

「えっへへへ、ごめん。気絶するとは思ってなかった」

「アホッ！素人だったらもっと早くに気絶するわ！！」

俺も素人だけどそれなりに体は鍛えているほうだ。

そもそもプロレスなんてやってことないし、せいぜいあるとすれば

……

……

…

一方、勝政とみよんは

「…あいつら、楽しそうだな」

「うん」

「…暇だな」

「うん……日向」

「…何？」

「ちょっと匍匐前進の態勢になって」

「なんで？」

「…決めた、今度の漫画はちょっとコメディーな戦争モノにする」

「しょうがねーなあ。まあ純とか今相手にしてくれなそうだし、
いっそ」

何気に仲良しであった。一方、視点を純に戻して数時間後

あたた……とこだここ？

目が覚めたら俺は1人、どこかの部屋にいた。

しかも外は日が暮れようとしていた。

はっ、そうか。ここ南の島だったな……っで姉ちゃんに腕を折られてないっぽい。いや、確かに包帯グルグル巻きだけど骨は折れてないっぽい。ただ妙に痛いですねえやっば。

コンコン…

ドアがノックされた。

「純？起きてる？」

多分千尋の声。

「俺？今起きたけど」

すると千尋が入ってきた。

千尋ももう水着姿ではなく普通の服だった。

そついえば千尋もひん……いや、やっばなんでもない。もう殺されかけるのは御免だし。

「大丈夫？」

「まあ…痛いけど。つかここどこ？」

「私の家の別荘だよ、確かうちのお父さんが10年前に海軍通信司令部跡の横に建てて…うん、よくわかんない」

「そうか」

まあとりあえず俺は安全地帯に来たって事だな。
はあ、しかし姉ちゃんひどすぎる……

「そういえば純、全然海に入らなかったよね」

「そういえば…伸びてたしな…」

まあ海とか興味ないし。

正直入らなくてもよかったんだが…千尋と遊ぶという俺の計画が！！
「それにしても純も不憫な人だね。2回も死にそうな目に遭うなんて」

「うん、正直皆酷いと思ったぞ」

「もしかして純ってさ、いっつも家であんな感じ？」

「まあ…確かにフルボッコだな、家では」

外じゃめっぽう強いのに家ではフルボッコ…それが俺です！
その後、会話のネタが尽きて二人とも黙ってしまった。

「あ、そろそろ晩御飯だよ」

「お、そうか」

まあこれが最後でした。

はあく、やっぱ千夏のキャメルクラッチの姉ちゃんの腕攻撃で一気に株落ちた？

俺の計画台無しもうだめぽ。

晩飯？まあいろいろ食べた。

でも暇でした^ ^

つで、夜……

あゝあ、暇……ん？

あれは勝政とみよん？そういうえば晩飯の時いなかったな。何やってるんだ？しかも水着姿で？

「いつまで匍匐前進態勢でいればいいのお」

「ちよ、日向！あと少しだか動かないで！」

「うづ……寒いよゝ、腹減ったよおゝ、暖かい布団で寝たいよおゝ」

「もう少しだけだから！」

「ああ……穴があるなら入りたい……」

……勝政カワイソス。

いや待てよ？あのみよんの笑顔……勝政は気がついたらんようだが……もしかして意外と合ってるでは！？

くそっ！勝政ごときに……！！

…ん？誰だ俺の肩をたたく奴は？

「おゝい、純」

「あれ和輝？お前いたの？」

「ひどい！いくら今まで出番がなかったからといってもそれはひどい！」

ごめん和輝。

完璧お前の存在忘れてた。

「それより…あの勝政と妙高が仲よさそうにしてるのはなに！？」

「知らん」

「くそっ！勝政こときが…」

泣くなよそれぐらいで…

「だが！俺にはお前という名の同志がいる！俺達はロンリーウルフだ！！ワツハハハ！！」

…ただの馬鹿だ。

っ！かロンリーウルフって…俺とコンビだったら全然ロンリーじゃないじゃん。

「おっ？あれは伊吹！！」

突如として和輝がそう叫んだが確かに千尋が俺の視界に入った。

「1人？これはチャンスだ…悪いな純、俺は今から脱ロンリーウル
ぎゃあああ！！！」

「寝てる和輝！」

「なん…でや…ねん！！！」

和輝は地面に顔と体を叩きつけてお眠り状態に入った。

多分明日までは起きないだろう…こいつに千尋を渡してたまるか！

俺の嫁です！！！！

…「ごめんなさい、流石にキモイな俺……」

「よし！終わり！」

「あああ…やっと解放されたああ！！！」

勝政とみよんの用事も終わって二人は今日の宿泊場所に戻った。

いよいよ俺と千尋の二人つきりになった。作戦発動すべきか？ここ
で出撃すべきか？

しかし…根性ねえからできねえええええええ！！！！！！

しかし…うん、このまま眺めているのもいいな。

千尋は水平線の彼方を眺めているようだ。今日は月がよく水面を照
らしている。絶好の海戦日和だ。

…まあ海戦なんてこのへんじゃ滅多にないだろうけどな。

千尋は髪を解いた。

元々長めのポニーテールだったが解くと余計に長く感じる…っーか俺あつちのほうが好きかも。

1人でいるからか静かだ。

うーん…しかしなんて幻想的な光景だ。

ん？千尋が立ち上がった。

そしてこっちに歩いてきた…まずい！！即時退却せねば！！

「…純、そこにいるのはわかってるよ」

バレてたあああ！！！！

もしかして千尋の頭には連合軍の電探やドイツの暗視装置が装備されているのか！？

…まあそれは冗談、俺どうなるんだろ？

part 19 ・たまには真面目にやりますよ

は、い前回までのあらずじ。

千尋髪解いたら可愛いくって思ってたずっと見ていたら突如として千尋が立ち上がり、俺に声をかけてきた。どうやら千尋は俺の存在に気がついていたらしい。

ナンテコッタイ！

「何してるの？なんか鈴谷もそこで寝てるけど？」

とりあえずなんて答えようかな？

よし、とりあえず俺は海軍式敬礼をした。

「報告！アンガウル島沖20kmを北上中の敵艦隊は一斉回頭！駆逐艦に護衛された輸送船12席を含んだ輸送船団と会合し本島北東部へ接近せり！」

なにいつてるんだ俺えええ！！

「ぶっ！」

笑われたああもうダメだああ！！！！

「純おもしろい、すごくそれっぽかったよ」

えっ？

もしかして褒め言葉？

「…はい？」

「だから、それっぽかったって言うてるでしょ」

「そ、そうか!？」

なんか褒められると嬉しい。

「…ところでさ、どう？」

「えっ?なにが？」

いきなりどうって言われても用件わからないし。

「…かもつ俺の海軍真似ネタは終わったの？」

「髪、解いてみたんだけど…変だったりしない？」

その事かぁ。

変じゃない、むしろイケてます!

「いいと思う。全然変じゃないぞ」

「そ、そう?よかったぁ」

なんでそんな事を聞いてきたんだろう?

はっ!?!まさか俺に気が!?!…いや、地雷だ。地雷に違いない、インパールのような無謀な攻勢はやめておこつ。

「…どう?南の島?」

「どっつて言われても……」

俺はこの島に来てからの出来事を思い出す。

千夏にキヤメルクラッチされたり姉ちゃんに腕を折られそうになったり退屈な晩飯を食べたり……いい思い出がない……

「すまん、なんか痛い目見ては伸びてで全然思い出がない」

「あつ！そついえば確かに純、ずっと伸びてたよね。ごめん……」

ふと思い出したらしい。

でも謝るような事したっけ？

「いや、別に謝る事ないけど」

「うーん、でもあんまり純、楽しそうじゃないし」

千尋は心底心配そうな顔。

「まあそつ心配するな。むしろ帰るほうが俺にとっては恐怖なんだから……」

「えっ？なんで？」

「……だって、帰ったら隼鷹の相良に西園寺の沢村、市川の残党が待ってるんだぞ？俺喧嘩好きじゃないし、疲れるのなんのって話だぜ……」

まあ隼鷹とは休戦中らしいからしばらく相良達と戦う必要はないんだろっけど、西園寺と市川はいつ喧嘩売ってくるかわからないし、

おまけに市内にはまだ数校不良の巣窟が存在してる。そして俺らが勝ち続けてるせいか桑園の名が売れてるっぽい。帰ったらまた面倒事に巻き込まれそうだ……

「うん、確かに…特に西園寺と市川はやばそうだね…うちの兄さんも不良やめたはいいいけど自衛戦闘は毎日だって言ってたし」

誠の奴はまだ戦っている、自衛の為に。

そして噂じゃ市川の番長は1年生のやたら強い奴になったらしい…2年3年もいるのにどうして番長になれたかは不思議な所だが相当恐ろしい奴だ…事は確かだろう。あゝあ、帰りたくない…

「でも明日帰んなきゃいけないよ」

「わかってるって。今度から喧嘩は全部勝政に任せようかな？」

「それがいいよ、純はほぼ被害者だしね」

…ってか勝政をパシるような発言したのに承諾するのか。
ある意味ひどい子かも。

「…あゝあ！疲れたし、寝ようかな？」

背伸びしながら俺はそう言った。
ついで欠伸もした。

「うん、お休み」

「千尋は？」

「うん…まだ起きてる」

「そうか、っじゃ俺寝るな」

「うん」

ふう、こうして1日は終わり、伸びている和輝を引っ張って寝場所に向かった……結局作戦失敗！チクショー！！俺の根性無し！！…ん？あれは勝政とみよん…今飯食ってるのかよ、しかもなんか話をしている。

「ようやく飯の用意ができた…」

「日向、これホントにおいしいか先に食べなさい」

「俺を実験台にする気かよ！」

「しょうがないでしょ！大体好きな食べ物同じだし、きつと似たような舌してるっての！ほらはやく！」

「俺…いつからパシリになっただら？」

勝政…哀れ…

…まあ勝政だし、どうでもいいか。
とりあえず今晚は御休みである。

……

……

…

翌日…

「あつ！ごめん！ご飯サ ウのごはん1個足りない」

「ちょ！姉ちゃんなんという事を…」

「ごめん！」

朝、起きて朝食はいいがごはんが足りないらしい。

しかもほかの奴らちゃっかり自分の分確保してるし！俺の目の前にある奴は1個…これは俺のものだ！

つと手を伸ばしたが誰かの手も一緒にご飯の上におかれた。

「ん？」

「ん？」

相手は和輝…

「純、ここは平和的に話し合いでかいけ」

「俺の飯じゃあああ！！！！」

右手で思いつき和輝の顎にパーンチ！

和輝はお日様の方向に消えていった。まるでバインマンド。

「…さて、食うか」

「純、ふりかけあるよ?」

「サンキュー姉ちゃん」

誰も和輝の心配しねーし…不憫な奴。

その後、再び海で遊ぶ、昼飯食ったら帰る予定だ。

俺も今回は水着!見よこの素晴らしき肉体を!!

…えっ?小説だから見えない?ごめんなさい。

んゝまあアレだ。ほどほどに筋肉はついているという感じだ。

「西瓜持ってきたけど食べる?」

千尋と千夏と伏見が3人で西瓜を持ってきた。

西瓜…西瓜…あまり好きじゃないけどまあ食べるよという感じだ。

「よーし!西瓜割りね!」

「ちょ!姉ちゃん木刀なんてどっから!?」

何故かうちの姉ちゃんは木刀を持っていた。

「えっ?決まってるでしょ?イザという時純を叩くため」

「死ぬわ馬鹿!」

ただでさえ南の島で日差しもものすごく、砂浜がやたらと暑いって

いつものに+木刀なんて死亡確定ですよ!? 都会の人間の俺にとっては耐えがたい気候だ。

「よし、まずボクがやる!」

調子に乗った千夏が目隠しをして木刀を両手に持った。

「おらぁ!!!」

……目標から1mは外れていた。

流石…、千夏は目隠しをとって戦果を確認した。

「全然離れてじゃん!」

「千夏、そうそう西瓜にあてるなんてできないよ」

ん? 待てよ?

ここで俺が怪力を見せたらもしかして千尋の俺に対する好感度アップ? よし!

「次は俺がやる!」

「なんだよ、いつもはヘタレの純にしては珍しいじゃないか」

「うるせ、勝政は黙ってる…木刀なしで西瓜割ってやる」

「えっ!? 橋立それは流石に無理じゃない?」

みよんは無理という。

まあ普通は無理でしょ、だが俺はやる!

「はい、純目隠し」

「おう」

俺は勢いよく目隠しをし、精神を集中させた。

……………ここだ！！！！！

手応えを感じ、西瓜が割れるような感じがした。

「「「「「おおおお！！！！」「」「」

割れたっぽい。

うーん、今更思ったが俺って強い！！！！

I a m s t r o n g ! ! ! !

s t r o n g ! ! ! !

s t r o n g ! ! ! !

「な、なんちゅー馬鹿力だ……」

「ま、まさかホントに素手で割るとは……恐ろしき橋立……」

「流石純……一度も喧嘩に負けたことないだけある……」

皆俺の事を褒めるかのように言う！

ワッハハ！！もっと俺を褒め称えていいんだZE！？

……手痛いけどな……

「よし純！残りの2つも頼んだ！」

姉ちゃんが俺に指図した。

でもこれ以上西瓜打ん殴ったら痛い気が…ってか！

「俺の右手を使用不能にさせる気か…！」

「しょうがないわね…えいつ…！！！」

すると姉ちゃんが1つ西瓜に踵落とし、もうひとつには空手家が瓦を割る時のようなチョップを西瓜に与えた。なんと西瓜は真っ二つ… SUGEEeeeeeeeeeeeeeee！！！！

「さっすが朋美先輩…きーちゃんより技のキレがある」

「お、俺！踵落としで割ったほうを食べたい！」

「変態か？和輝？」

…あれ？

なんかみんな姉ちゃんのほうに…はっ！？

しまった！！西瓜素手割りで褒められていたせいかうっかり忘れてた！

姉ちゃんは俺の数十倍強い！

力で勝負しようと思った俺がバカだったあああああ！！！！！！！！

………

…

…

今？日本だよ。

結局どうしたかって？

言えなかったに決まってるでしょ。

根性ないし、姉ちゃんばかりに人たかるし。

俺半分スルーっすよ？いくら力で俺より強いからってこの仕打ちはなくね？

別に喧嘩強くてもこのご時世あんまり意味ないでしょ。

南の島？そうだねえ〜楽しかったねえ〜

…俺、あんまり楽しんでないけど。

part20・月曜日、学校行ったら俺が恐れられていた件

翌日…疲れた……

散々昨日ネタのに疲れた……なのに、なのに!!

朝から悪夢は訪れた!姉ちゃんの踵落としが腹部にクリーンヒット
!!……まだ痛いです。

学校に着くころにはようやく痛みもひいていた。

…ん?玄関前に千尋…と話している男?そして千尋は嫌がっている
っばい?

俺はこそこそと近付いた。

「ねえねえいいじゃん伊吹さん」

「嫌です……」

「今日俺らと遊ぼうぜえ?」

うちの学校の不良にも満たない馬鹿チャラ男どものようだ。
よし……

「おい、嫌がつてんじゃねーか?」

「なんだあおまえ?」

「お、おい緑川!!よく見る!!」

「あっ?」

緑川とかいう茶髪のチャラ男は俺を凝視した。

千尋も一緒に俺の事を見ていた。俺の顔になんかついてるか？

「…あ…ああ……こいつ『狂犬橋立』じゃねえか!!」

「そつだよ!!西園寺の奴ら番長含む5人を相手に倒した上に市川の番長を更生させて奴だ!」

「ま、まさか伊吹さんってこいつの女…す、すみませんでしたあああ!!!!」

あれ?逃げちゃったんだけど?

しかも何?『狂犬橋立』って…俺そんなに恐れられるような事した?

「純、ありがとう」

「えっ?ああいや、なんか見てて腹立ったし、千尋も嫌そうにしてたし」

「うん、嫌だったよ。だから余計に感謝する!」

「うん…それよりもさ、狂犬橋立って何?」

「ち…ちあ?」

俺はその後、上靴に履き替えて校舎内を歩いていた。しかし……

「あ、あれが噂の狂犬橋立?」

「結構いい男じゃん！」

「ものすごく喧嘩強いらしいよ、しかも本人からはやる気らしいし」

「へえ、伊藤先輩より番長にふさわしいんじゃない」

「こここんな不良校だったっけ？」

「まあそれはともかく、いつのまにか俺は校内でも有名人になっていた。しかも有名になっているのは俺だけじゃなかった。昼休み、校内を勝政と二人で歩いていると…」

「お、おい見る。あれ橋立と日向だ」

「確か日向って橋立の相棒だったっけ？」

「あいつも恐ろしく喧嘩強いらしいぞ」

「マジかよ？ぜってえ関わりたくねえ」

「なんだこれ？」

「勝政まで有名人になってるぞ？」

「あゝあ、ちょっと喧嘩強いとすぐこれだよな？」

「まったくだぜ、大体被害者はどっちだよ…まったく」

俺が話を振ると、納得の回答が勝政から帰ってきた。

俺も勝政もホントは喧嘩が好きじゃない事は同じだ…でもどこそこの馬の骨とも知らない奴らが喧嘩を売ってきて自衛の為に戦ったらこ

れですよ！？…まあ現代社会、たとえ攻められている側でも命の危機じゃなかったら殴ったらおしまいなんだけどな。

「橋立〜！勝政〜！」

なんだ？後ろから声がつて、こいつは…

「あれ〜？お前3組のミヤじゃないか？」

ミヤ、勝政の小学校の頃の友人らしい。

本名は宮野大輔みよのだいすけだそうだが俺はよく知らん。

「どうしたんだ？」

「大変なんだよ！さいなんとか高校っていう所の不良が！」

さいなんとか？

「なあ純、もしかしてそれって西園寺じゃないか？」

「西園寺かよ…西園寺のボンクラども何しに来たんだ？」

「なんとかしてくれよ二人とも！このままじゃ関係のない人まで怪我しちゃうじゃないか！」

んな事言われてもねえ。

面倒くさいし、よしこいつは1つ。

「勝政、行ってこい」

「はあ！？なんで俺！？」

「俺は普通の健全な少年です。本来喧嘩はしません、喧嘩は勝政のお家芸だろ！」

正直面倒くさいだけなんだけどまあ事實は事実だし、ホントは喧嘩とかしたくないし、いいやこれで。

「…行くぞ、純」

「やっぱダメっすか？」

「あたりめーだろ！てめえもこい！」

「チツ！」

俺は嫌々勝政についていった。

まあ例の西園寺のボンクラは俺と勝政であっさりと撃退、先生が来る前にはつくれたのでOKだろう。

あゝあ、暇だなあ…っと思っていたが6時校目。

「よーし今日は明日の炊事遠足についての説明と文化祭の事についてです」

変な口調…

さて、説明しようか。炊事遠足とは道内じゃ定番の行事らしく、本来は小中学生の定番らしいが何故かあちの学校にはこんな行事が1年生にある。内容は簡単に言えば野外クッキングタイム、つまり外で何か作って食べるというやつだ。まあ道内出身の人なら経験した

ことがあるかもしれない行事だろう。

まったくもってどうでもいいような気もするがテスト明け間もないし、気晴らしにはなる…のか？

「……つというわけでうちの高校が行く場所には他校生徒も多数来るので絶対に問題を起こさないように、特に橋立と日向」

「はあ！？俺達っすか！？」

「そつだよ！純はともかくなんで俺まで！？」

勝政：お前だけ逃げようつたつてそつはいかんぞ。

「お前達噂になってるぞ、いくら自分の身を守る為とはいっても喧嘩はよくない、怪我はするだろうが変な事はしないで先生にちゃんといいなさい、わかつたか？」

俺と勝政は溜息をつきながら頷いた。

まったく…その後文化祭の話になったが盛り上がってるのはもちろん一部だった。それよりも興味がある事は明日の炊事遠足に参加する学校の事だ。

「源ちゃん！」

「おっ？なんだ？」

俺は気軽に源ちゃんに話しかけた。

…まあもう2か月近いし、いろいろあつて普通に話せる仲だ。

「あのさー、明日の炊事遠足ってさ、うち以外にどこの学校が来るんだ？」

「そうだなあ？確か飛鷹高校と市川高校つつつてたな」

市川か…そりやまた問題高校がいますねえ。

市川ってあれだよ。例のヤンキーばかりの高校だ。飛鷹は名前しか知らないな、まあマイナーな高校なんだろ、どうせ。

その後、SHRが終わり勝政とみゆんに別れを告げると千尋と一緒に学校を出た。

「ええ？絡まれない方法？」

「うんうん！」

…俺は女か？つとでも言いたくなる返事の仕方だ。

まあそれほど俺は今、猛烈に喧嘩がしたくないって事だ。

理由？決まってるんだろ？他校の生徒もいるんだろ？……もしかしたら思わぬ子と遭遇するかもだろ？その時に目のあたりが脹れあがったり唇が切れてたり鼻血が出てたりしてみろ？普通逃げるだろ…そもそもそれは他校生徒じゃなくて千尋でも逃げそうなんだが…っというわけで喧嘩したくねえ。それが俺の今の本心だ。

そもそもなんでこんな面倒な事に巻き込まれたんだろ？俺ってやっぱり、自分で思うのもなんだけど不憫なのかなあ？

「絡まれない方法…うん……とりあえずヤンキーさんに近づかない！」

基本中の基本だった！

でもヤンキーさんから近づいてくるんです俺の場合は！

「あつ、噂をすればヤンキーさんが目の前にいるけど？」

「へっ？」

確かに西園寺のボンクラ5〜6人が俺と千尋の前に立ちふさがっていた。

しかも今度は今井さん付きかよ…

「おい橋立！…随分こいつら可愛がってくれたみたいだな…」

「ま、待て！我々は人間であり言葉が通じる…つまりだ、相互の不可侵条約を締結して互いに武力による問題の解決は行わない事に

」

「うるせえ！！！」

「うおわっ！！！」

話してる途中なのに殴られそうになったチクショー！！

「純！！！」

「ちょ！お前ら今交渉中だろ！！！」

「誰がてめえと交渉するか！！！」

つというわけで見事に喧嘩になっちゃいました。
まあ千尋は遠目で観戦、俺は6人を相手に交戦、流石に数的に分が悪いです。

「おらあつ！！」

「だああ！！待てって言うてるだろ！」

「うるせえ！今日という今日こそめえを血祭りにあげてやる！」

「待て今井！お前と戦った事なんて1回しかねーだろ！」

「問答無用！くたばれえ！！！」

攻撃をかわしながらなんとか休戦にもって行こうとするが中々成功しない。

普段の俺ならとっくに打ったおしている頃だろうけどマジで喧嘩したい気分じゃない俺は面倒だから攻撃をかわすだけ。ついでに先述の通り休戦交渉中だが全くもって通用せずという状態…こうなったら、今井を叩く！

「わかったわかった！相手にするからとりあえず一瞬にしてくたばれ！！！」

俺は指を今井の目に！！

ズンツ！！

「あつぎゃあああああ目があ！目がああ！！！」

△ カ大佐のように叫ぶ今井はまさに情けないの一言で片づけられるようなものだった。

はあ、一気に疲れた…

「い、今井先輩！」

「く、くそ！！お前ら覚えてろ！」

野郎共は戦闘不能の今井を引きずって逃走した。

「うわあ、卑怯…」

千尋にまで文句を言われてしまった俺の戦法…

「勝てば官軍、負ければ賊軍！！結果オーライならそれでよし！」

「流石：まあ純らしいと言えば純らしいか…」

ほえっ！？

もしかして呆れられてる！？

「ゴメンナサイチヨウシニノリマシタ」

「…カタコトになってるよ？」

「…気のせい」

疲れてきた…逃げたい。

「……とりあえずか帰って寝たら？」

「そうする……」

つとまあ俺は寄り道する事もなく、その後普通に家に帰った。

…しかし、屋内に気配がない。店には人はいるが屋内には0…おかしいな？まさか全員総動員でお店手伝ってるのか？俺は荷物を置いた後、店の周囲を歩く事にしたが、そこでであったのが…

「あら、純君じゃない？どうしたの？」

従業員の歩夢さんだ、いつものにこやかな笑顔を見せている。

「あ、いえ…家に誰もいなかったもんで皆手伝ってるのかなと？」

「え〜っと…その、朋美ちゃんと勇君は私用で一二三さんと美智子さんは元徳さんと一緒に函館に行きましたよ？」

「は、はあ！？函館！？」

いきなりの発言に驚いた。

ちよつと待て函館って…何故に函館！？

「あのー、歩夢さん？何か言ってますでした？」

「そうねえ〜、支店の視察って聞いてますわ。確か3か月は帰ってこないって…」

なんて身勝手な親共じゃあああ！！

つじやあ今日からしばらく兄貴と姉ちゃんとの生活だど！？嫌アア

ア
ア
ア
ア
ア
ア
!!
!!
!!
!!
!!
!!
!!

part 21 炊事遠足 前編

うっ…朝か、眠い…
もう少し布団に…

「起きろー!」

「あべしっ!」

は、腹に激痛があッ!!

「姉ちゃん…ひどす…」

「純が早く起きないからいけないんですよ!ほら、あんた今日炊事遠足でしょ?もう準備できてるんでしょうね?」

それは流石に昨日のうちにやった。
…っか気にしすぎだろひの姉ちゃん…

「俺、そこまで子供じゃないぞ?」

「はいはい、さっさと朝ご飯食べて支度しなさい」

「へーい」

渋々俺は階段を下り、テーブルに向かった。

今日は例の3人はいない、支店の視察に行ったらしいからだ…函館支店がなんか問題でも起こしたか?

まあそれはともかく……

「おい兄貴」

「なんだ？」

「俺の飯を盗るとはいい度胸だな？」

「えっ？だって普段働いてないお前のほうが目玉焼き大きかったし…」

「そついう問題か食い物泥棒！！！」

俺はとりあえず息の続く限り兄貴を打ん殴り続けた。

兄貴はこの世のものとは思えないほどの断末魔をあげていた。ああ、今日に限ってこのうざい断末魔がすばらしいものに聞こえる。

「純、勇を殴るのは勝手だけどそろそろ時間的にやばいわよ？」

「あつ！ホントだ！兄貴殴ってる場合じゃ…ってきやあああああ！！！」

俺は思わず床に転がっている人っぽい何かを見て悲鳴をあげた。な、なんだ…この得体のしれない顔の持ち主は！？

「ちょ…なにこれ？」

「ば、バケモノじゃああ！」

「アホッ！誰のせいだ！ってか朋美までなにこれはないだろ！」

あゝあ、不憫な奴。

…ってそろそろ本格的にまずい！俺は荷物をたたんで大急ぎで学校に向かった。マジでそろそろ遅れてしまう！！

「いってきます！」

ちなみに普段より早い時刻なので姉ちゃんより先に行く事になる。

「気をつけなさいよ」

何気に心配している姉ちゃんの声聞き、俺は全力疾走、おっ？正面に何かが！？

「ゴルア橋立！今日こそけつちゃ

あああああ！！！」

今井…そんな所に突っ立っているから俺にぶっ飛ばされるんだ。

まあおとなしく昼間のお星さまになっているがいい…ってカッコいい事言っている場合じゃねえ！あと5分の電車に乗らないと遅刻だ遅刻〜！！！！

………

………

…

ふう〜、間にあった。

「おーっす純」

千尋が元気そうな声と片手をあげて挨拶をしてきた。

「おっ」

「あれ？どうしたの？随分息切れてるね？」

「全力疾走したから、あと…なんかあつたっけ？」

…あれ？

誰かと体当たりした気がするが…いまなんだっけ？

…ま、いいか。大した事じゃないだろうし。

「やっぱりなんでもない」

「ちゃんと早く起きないとダメでしょ」

「いや…心がけてはいるんだけどどうもこれは体質的にちょっと…」

「体質的じゃなくて意識の問題だと思っただけど…」

ち、千尋にしてはえらく真面目な意見だが正論すぎて反論できない…

確かに早く起きようと思って頑張っただけで早く寝て、意識して起きれば

早起きも可能ではない。

こいつ意外と手強いかもしれない…

「はは…ですよー」

もう同意せざるを得ない。

やがて電車は駅に到着し、改札を通過してバスに乗り換える事数分、ようやく学校に到着した。

どうやら俺らは最終グループの部類らしく、もう既に大多数の生徒が学校の校庭に集まっていた。

「あ、橋立く千尋く！遅いよ」

「あはは、ごめん」

「まあ間にあっただし、いいだろ別に？」

「うん、まあ確かに間にあっだし、追及するのはやめよう」

一方、勝政は下を向いて一言も喋っていない。
一体どうしたんだ？

「おい、勝政？」

「あつ、きーちゃん！」

なんか甲高い声が聞こえてきた。

多分千夏と…随伴するのは伏見だろう。

「おう」

「どしたのきーちゃん？」

「いや、あれだ…さっきから勝政がピクリとも…息はしてるっばいけど」

「どれどれ！？ボクが診察……こ……こいつ、寝ている！」

「へ？」

寝ている？

…俺に許可なしに寝ているだこの野郎！

「起きろおお勝政あ！！！」

俺は勝政の顔面を殴り始めた。

「ぶびっ！いたっ！！なにを！！」

「起きろ！！」

「はうっ！！純てめ…ぎゃあっ！！いて！！ちょ！待て、俺は起きてい…待てええ！！！」

…はっ！？

きゃあああああああああ！！

ば、バケモノが俺の目の前に！！

「うわあああ千夏ああ！！！」

「こ、これはボクも始めてみる人種…」

二人とも超関心。

「うわあ、なにこれ？漫画の敵キャラとかに使えそう」

「私も…」

「おう、なんだかよくわからないけど勝政が悪い事したらしいな。こいつはいつもの事だから許してやれ」

何故か和輝まで介入してきた。

まあ確かに勝政は…悪人でいいやもう。

「誰のせいだよ！」

勝政は絶望した表情でそんな事を言う。

何を今更という気もあるが、まあスルーする事にした。ほかの奴らも俺に合わせてか勝政をスルーする方針に出たようだ。

「えっ？無視！？ひどい…少しは俺を心配してくれえ！」

しょうがないなあ…

「砂糖と塩間違えるなよ、勝政」

「そんな心配されても嬉しくねえ！」

案の定怒りました。

ですよね！。

そのあと、長い話を聞き、眠くなった所でバスに乗り込んだ。

「あゝあ…眠い…」

「ね〜る〜なあああ！〜！」

「じふっ！」

「なんだ!？」

「顔が妙に痛い!!……って……」

「勝政……てめえ……」

「だって俺寝たらダメなんだろう?じゃあ当然お前もダメだろ」

「そっいつ問題じゃ……ぐー」

「言ってる傍から寝るな!!」

「ぎゃっ!痛いっ!

この勝政……いつか殺す!

「ええ加減にせい!」

「じゃあ寝るな!確かに眠いけど寝るな……ぐー」

「……寝るなあア勝政アツ!!」

俺は勝政の鳩尾に一発強烈なものを入れた。

「馬鹿かお前!下手したら死ぬわ!」

「うるせー!お前が寝る……ぐがあ〜」

「馬鹿かおめーは……」

「どづしたの？さっきから肋押さえて」

「ちょ…ちょっとな…」

まだ痛いとか恥ずかしくて言えない…

畜生みよんめ…俺の安眠を返してくれえ！…！！

part 22・炊事遠足 中編

…ああ、とうとうついてしまった。

駐車場には何台ものバスが並べられていた。団体様が多数…まあ他校の生徒が乗ってきたどこかのバスがほとんどだろうが、見たところ民間のごく普通のツアー客らしき人たちもいるようだ。

それに子供達も元気そうにはしゃいで…それに比べて俺は疲れなどからため息をついていた。

「はあ…」

「つたく、お前が寝るからだろ…」

「誰のせいじゃ誰の………」

そして勝政と俺の仲も険悪であった。

ちなみに俺の班のメンバーには困った事にこの勝政もいる、誠に疲れの限りだ。

その分千尋とみよんもいるし、それに…

「えっ？何何？俺になんか用!？」

このムードメーカーもいる。

こいつの名前は春田恭介、はるたきよすけまあクラスメイトだ。

俺達とは違ってチャラ系であだ名はチャラ男だ、別にたまにテレビに出てくるあの男とは関係ない、ただ雰囲気はチャラから皆からそう呼ばれているだけだ。

今まで登場しなかった理由？

そうだな…強いて言えば最近転校してきた。いつだったかはよく覚えてない。まあどうでもいい話だけ。

「いや、暇だし」

「ちょっと橋立とついでに春田！暇だったら手伝って」

あゝあ、みよんに文句を言われてしまった。

しかもチャラ男はついでだし…

「つ、ついで！俺ついで!?!」

チャラ男は涙目で俺に語りかけてくるが…まあ確かについででもいのようなキャラだし、所詮脇役
しかしチャラ男は立ち直りの早い男、突然急に元気になった。

「おっ！純あれを見る！」

「ん？」

チャラ男が示す方向を見ると可愛い女の子が歩いていた。

「あのジャージはどこ的高校だ？」

「俺の最先端情報によればあれは飛鷹の制服だ！」

っじゃあ間違いない。

こう見えてチャラ男の情報収集能力は東機関かと疑いたくなるほどのものだし。現に千尋も今となってはこいつに解らない事を聞くほ

どだ。まあ勉強については想像がつくが俺と同レベルかもっとひどいぐらいだ。

「おお！中々可愛いじゃないか」

「ちょ！勝政どこから現れた！？」

地面の中からモグラのように勝政は現れた。

…こいつ、ホントに人間か？

まあそれはともかく、飛鷹の女子のレベルが高いのは確か…まあ千尋には敵わんがな！

俺は密かにそう思った。だって…俺は千尋一筋ですから！

…何？じゃあさっさと告白しろと？無理無理、根性ありません（涙）。

「まあまあ固い事は気にするな！…うん、確かにレベルが高い。ざっと千夏ちゃんレベルか？」

「千夏ちゃんって…」

「うるせっ！タイプなんだよ！」

なるほど…ボーイッシュな女の子が好きなのかこいつは…
…よし、今度兄貴と取っ組み合いしてる（性的な意味で）コラ作ってやる。

「おお！あっちの子SUGEEE!!!」

チャラ男が言うあっちの子…確かに可愛い。

茶髪でくせのある短めの髪、千尋並みに小柄で…まあ隣の子は遙かに子供で対象外だけだ。

「純〜！」

「おっ！？なんだ！？」

千尋に声をかけられた。

テンションが高くなってきたぜ。

「ごめん、ちょっとこれに水汲んできて」

水汲み…しかも千尋の願い？

…断れん、勝政とかの頼みごとなら即却下だが千尋の願いは聞く。それが俺である。文句は受け付けないぞ。

「了解！橋立伍長以下3人！決死の覚悟で水を汲んできて参ります
！」

「よ、よろしく」

千尋はそうはいうが、まああんまり好印象ではないらしい。

みよんは「出たよ軍オタ…」という目線で俺を見ていた。遠くでは千夏と伏見が面白いものを見ているような視線で俺を見ていた。悪かったな…

そして…なにより勝政とチャラ男は不機嫌そうだった。

「あゝあ、なんで俺達まで付き合わなきゃいけないのおゝ、俺つかれちゃうよ〜」

「まったく純てめえ…今度覚えてるよ」

「チャラ男と勝政は黙ってる」

「はいはい」

あゝあ、疲れるなこりゃ……

つというわけでバケツを片手に公園の水道に向かった。しかしたまにこつという何も無い所に来ると空気がうまい。それは多分いつも俺らが街中にいるせいだとは思っし、ここも街からそれほど離れた場所ではないのだが……うゝん、何かが違う。

ま、どうでもいい話なんだけど。

「あれ？」

勝政がなんか声をあげる。

俺は前を向くといかにもという不良8人とさっきの女の子達…に+1名友達の女の子が向き合っていた。不良たちはやらしい笑顔で女の子達は怯えているようだ。ただ1人を除いて。

「いいわけないでしょ、直ぐに終わるから少しだけ待ってよ」

「待てねーんだよ…俺達そんな時間がないからな。なあ庄司さん？」

「おうよお、俺たちよお、待つこと嫌いだし、先に譲る事も嫌いだし、何より負けるのが嫌いなんだよ」

「順番でしょ、これのどこをどうしたら負けって事になるのよ」

あつ、なんかやばそうな雰囲気。
どうしようかな？別な場所をあたろうかな？そうだ、それがいい。
女の子達には可哀想だがヤンキーさんに構っている暇はない。よし
っというわけで勝政とチャラ男に声をかけようとした時だった。

「いけませんねえヤンキーさん達！」

「あつ？なんだおめーは？」

俺と勝政は目を点にしてその光景を見ていた。
そして二人で叫んだ。

「「チャホー（チャラ男の馬鹿！アホの略）！！！！」」

正直真つ青です俺らの顔。

「俺は泣く子も黙る桑園高校の春田恭介！」

「なんだとおゴラアツ！？」

馬鹿かあいつは！？うちの高校の名前を売るなよおい！

つてかあの制服は間違いなく市川高校：千尋の兄が通う不良校に違
いない。俺は前番長をたたんでしまった上に連戦連勝、ただでさえ
そこら中のヤンキーさんに目をつけられているってのに……はあ……

「つつかさ、最近そんな古風な不良流行らないぜ？俺みたいに金髪
に染めて髪伸ばしてついでに口調もチャラくしようぜ！」

「あつ！？もっぺん言ってみろ？」

「マジパネエっすよ超怖えっすよヤンキーさん！」

「庄司さん？こいつ殴ってもいいか？」

「好きにしる」

「ってかさ、マジで俺思っただけどさ、女の子にモテないっすよお古風な格好してる　　うぎゃあっ！」

チャラ男は1発KOされちゃいました。

そして女の子達も呆れた表情でチャラ男を見ていた。

「な…なんだっただらう？」

「さ、さあ？」

「ってか弱！お兄ちゃんとは比べ物にならないね」

「まあ充ちゃんは普通っていつか…運いいしね。それによりどつする真紅ちゃんと結衣ちゃん？」

すると一番強気な結衣っていう子が一步前に出た。

「とにかく早く用済ませよう？」

「そ、そうだね」

他の2人はそれに同意する形で水道のほうに向かった。

それより、チャラ男をどうやって回収しようか？ヤンキーさん達は

チャラ男を踏んづけ続けていた。

「ぐはっ！おえっ！ちょ！マジ超いてえっす！勘弁してください
」

「うるせえっ！じゃあ飛び込んでくるんじゃねーよ！」

「痛い目たっぷり見てもらっつからなおい！…それからよお嬢ちゃん
達、俺達が最初だろ？」

「はあ？だからちよっとの間」

「うるせえっ！」

すると結衣という女の子の顔をヤンキーさんは思いつきりはたいた。
やっぱり容赦ないですなあどこの高校のヤンキーさんも。

「俺はよ、うるせえ女大っ嫌いなんだよな？…っつーわけだからよ、
庄司さん？こいつらで遊ぶのってどうだと思っ？」

「いいんじゃないの？俺はよお、楽しみたいからよお」

「うっひひ、じゃあ覚悟しろよ3人の子猫ちゃんよお」

「うっ…」

「結衣ちゃん！」

「こんな時にどうして充ちゃんいないのよ…！」

「理由は簡単！お兄ちゃんは2年生だから！」

「うっ…そうだった」

…え〜つと、チャラ男の意識はどつかぶっ飛んでるし。

女の子たちは誘拐されそうだし、これってどうすりゃいいの？早く水汲みたいし、はあ〜

「…おい純」

「なんだ？勝政」

やけに真剣な声で勝政は声をかけてきた。

その表情は真顔である。これから戦場に行く男といった感じだ。もしゃ？

「助けるぞ」

「ちょ！喧嘩したくねーって言ってただだろ？俺もだけど」

「だけどさ…チャラ男回収しなきゃいけないし水汲みたいし……何より力のない奴に手加減せずに手を振る奴らは許せねえんだよ！」

お前そんなキャラだっけ？

…まあこのままじっと待ってても退きそうじゃないし、確かに勝政の言うことにも一理ある。っというわけで俺らは暴れる事にした。

「おい！」

全員俺らのほうを見た。

「なんだあてめえはよ!」

きゃーヤンキーさん怖いよー テキトー。

「邪魔、用あるならさっさと済ませ」

「あんだコラ? やんのかコラ?」

案の定ヤンキーさん達は絡んできた。
はあく、まぐた面倒な事になりそう。

part 22 炊事遠足 中編（後書き）

おまけ：

「おい作者」

「は、はいなんでしょうか橋立純？」

「いくらネタがないからって前作から引っ張ってくるのはどうかと思っぞ、しかも誰だよ結衣って」

「追加キャラです……」

「追加っておま……前作本編で一回も登場していない気がするんだけど」

「だから追加キャラなのです。いいじゃないですか自分の作品のネタ入れても、鳥 明だって別作品にア レちゃんとか悟 登場させてるじゃないですか」

そういう問題かよ……

うん、俺はわかった。この作者、絶対ダメ人間だと。

part 23 ・炊事遠足 後編

俺らはヤンキーさん達と睨み合いをしていた。
うくん、流石ヤンキーさん、眼力すさまじすぎる。

「おらあ！こつちは棒きれ持った奴が何人いると思ってんじゃ？」

8人全員が棍棒を持っていた。

先頭のリーダーと思われる比較的静かで、そしてヤバそうな奴もだ。男の特徴はリーゼントにカツと怖い顔ではないけどちょいと笑顔でいかにもヤバそうといった感じた。こういう奴って実は喧嘩強かったりする。だって漫画とかでありがちだし。

まあそんな事はともかく。

「おいチャラ男、大丈夫かー？」

「も…もちつと早く助けにこい……」

「だって面倒事に巻き込まれなくなかったんだからしょうがねーだろ？勝政が言うから飛び出してきたんだよ」

「ちょ…ひどす…」

…ってか、一応遠足編ですよな？

なんで喧嘩編になってるの？まあそれはともかく…どうしてくれようかこいつら？

「庄司さん？やっちゃおうか？」

「おもしれえ…おい兄ちゃん達よお！俺たち暇なんだよお…だから遊んでくれよお…死ぬ気でかかってこいよお！！俺とタイムン張る奴いねえのかよ！！！」

うゝん…リーダーの庄司とか言う奴…結構できそうだな。

ようし…ここは…勝政に頼もう！！…っと思っただけど女の子の前だし、やっぱそれは男としてどうかと思ったので俺は戦う覚悟を決めた。

「しょうがねーな、ようし。おゝい勝政」

「なんだよ？」

「水汲んどいてくれ」

「あ…ああ…」

っといつて勝政は水道のほうに行ったが7人に包囲されてしまった。あゝあ、使えないなあいつは…そもそもめ事になってるようだ。さて、後やる事は…女の子達を避難させる事だな。考えてみればこれが一番重要な事のような気がする。

「行くぜおらあっ！！！」

っと思んでいる間に襲ってきた！

俺はギリギリの所だとび蹴りを交わし、さらに投げつけられた棍棒をかわした後女の子達に叫んだ。

「そこの3人！時間稼ぐから逃げろ！！！」

「えっ？あつ、はい！」

「行くよ二人とも！」

「うん」

3人はどこかに逃げた。

その間にも庄司とかいう奴は襲ってくるがこれまた動きの速い奴。

「うっ！！」

あまりの速さに防御が間にあわない。

そうしているうちにだんだんダメージのほつが深くなっていった。

しかし俺はある事に気がついた。庄司の奴、喧嘩はかなり強いが何かが足りない。そう、力が足りない！

「はあ…はあ…なんなんだよおおめえは…寝ちまえば楽になれる
つてのによお……」

…っーか今思った。

こいつが噂の新番長か、確かに半端じゃなく強いな。

俺が押されるとは…姉ちゃんぐらいのもんだって思っていたのに。

しかしこいつは俺ですら手を出せないほどの強さだ。このままじゃ
まずい…だが。

「庄司さんよお、パワーが足りないぞ？」

「な、なんだとぉ！？」

殴りかかってきた庄司だが顔に隙アリ！
思いつきり顔を打ん殴り、ふらついている間にさらにもう一発を
加えた。

「ぐっ！！……て、てめえ…頭に乘ってんじゃねえよ！！」

俺は一発食らった。

…戦いはもう何分かたっている。双方とも疲れを見せ始めていたが
緒戦に動きすぎた庄司のほうが疲れはひどいようだ。つまりこの勝
負…変な一撃が入らなかつたら勝てる！！

「痛くねえ！」

「なんだとオラア！！」

こうしてしばらく殴り合いが続いた。

そして…ついに隙を見つけた！反攻作戦本格化、いよいよ庄司をぶ
ったおそうとした。

「もうめんどい！寝ろ！」

「ぐあっ！！」

庄司はそのまま倒れこんでしまった。

一方の勝政も最後の1人を蹴り倒した直後だった。流石に二人とも
ボロボロ…あゝあ、帰ったらお説教だなこりゃ…

「おい勝政、もうちょっとびしつと勝てないのか？」

「しょうがないだろ…7人だぜ？そういうお前だつて相当苦戦して

たじゃねーか」

「しょうがねーだろ…あいつ結構強いぞ？」

流石は1年生で番長の上りつめただけあるな、あの男。

まあどうでもいいか、チャラ男もボロボロの体に鞭を打って水を汲んでくれたし。

「ちょ…マジやべーっす…いてえっすよ」

「我慢しろ、ほれ行くぞ…っとその前に俺トイレ」

まずい、我慢できない。

「おいおい…早く戻ってこいよ」

「へいへい」

俺は一時的に二人から離れる事になった。

…そういえばトイレってどこにあるんだ？あんまり広い公園だから地図にかいてるとしてもかえって解らない。

そんな時、木の陰から人が現れた。

…さっきの女の子達のうちの1人？セミロングの黒い髪にアホ毛と目立つようで実は地味だったりする子だ。

「あ、」

「……」

反応に困る！

どう反応すればいいのか解らん！

「ごめん、折角逃げろって言うてくれてたけど私だけ見てた」

「そ、そうか…」

よくわからん。

何を言いたいんだろうこの子は？

「強いね」

「そ、そうか？でも…あれだあれ！正直言つとあんまり好きじゃないからな、面倒な事は」

「あ、あたりまえでしょ、あんな事好きでやってる人なんてさっきの不良ぐらいよ」

うん、中々可愛い。

…だが残念、俺は千尋一筋である。

「…あ、あの…」

「ん？」

「あ、ありがとう」

顔を少し赤くして女の子はそう言った。
感謝されるような事したっけ？

「あ、いやどうも」

「…」

「…」

話が続かん。

いや、別に話し合うような事はないんだが…なんかこの雰囲気は気まずい、気まずすぎる。

「…えと…名前は？」

名前？

うーん、どうせ二度と会わないかもしれないのに名前知る必要があるか？まあ俺は鬼じゃないし、名乗るか。

「橋立純」

「…私は香椎結衣…はっ！ごめん用事あったんだっけ！？」

「えっ？別にもういいけど？俺の友達に全部任しちゃったけどまああいつらだし、多分わかってくれるはずだ」

「うん、でもあれ…やっぱり早く戻らないと」

「そ、そうか。っじゃあ俺はこれで」

っというわけで俺は走って戻った。

はあ、後が怖いけどまあいいか。それよりさっきの子…可愛かったなあ。

って何を考えているんだ俺は!?

…数十分後。

「いただきまーす…」

「どうしたの純? さっきから元気ないけど?」

「わかるだろ? ボロボロだぜ?」

「い、痛いとか? 大丈夫」

「あたた…まずいかも」

結局どうしたかった?

ああ、怒られたね。特にみよんあたりに。「仕事すつぽかしてまで喧嘩するな!」ってね。

はあ、望んでやってる事じゃないのに…まあ仕事すつぽかしたの
は事実だし、文句を言える立場ではないんだけどやっぱり後味が悪い。

「ちよ、保健の先生に診てもらったほうが…」

「保健の先生の事を養護教諭という。ただし医者ほどの力を持っていない故に処置は限られたものである。ただし軍医とかはこの場にはいないし、野戦病院はないからロクな治療が望めない」

「ちよ! 無駄知識はいいから早くいったほうがいいよ!」

「む、無駄ア!?! 頭良く見えると思ったのに!」

「それどころじゃないでしょ、ほら早くいかないと傷に黴菌入るよ」

「へーい」

……

……

…

どうなったかって？

俺も勝政もチャラ男もまあボロボロだし、彼方此方絆創膏とかそんなものだらけであります。

…：そういえばふと思ったけどもうすぐ七月か…意外と短いものだな。

…：7月…7月…自衛隊の駐屯地の基地祭にでも行こうかな？

暇だし。そうだ、折角だし千尋達も誘ってみるか。

…：まあ自衛隊関係だし、下手したら拒絶される可能性があるけど（左的な意味で）。

…：…それはそれで怖いな。

別に千尋がそれぐらいで嫌がるとは思ってないけどでも嫌われたら突撃するチャンスがなくなるし…やめておこう、素直に1人で行くことにしよう。

そういうわけでこの炊事遠足、後半は平和に過ごしたがまあ適当でした。

めでたいのか？これ？…どうでもいいけど傷だらけの俺、帰ったら
なんて説明しよう？

喧嘩で手こずったと言ったら姉ちゃんにまたシメられるからな…
はあ、帰りたくない。

part 23 ・炊事遠足 後編 (後書き)

・香椎結衣

『あ、ありがとう』

生年月日：1993年11月26日

身長：160cm

その他のサイズ：B82 W56 H80

特技：早食い

趣味：読書。

特徴：飛鷹高校に通う普通の女子高生。

不良にからまれている所を純達に助けられたがその時一番目立っていた純に

気があるようである。

好きなタイプ：軍機です。

得意科目：現代文。

苦手科目：家庭科。

・チャラ男

『マジパネエっす!』

生年月日：1993年10月26日

身長：165cm

特徴：いわゆるチャラ系、それだけ。

ちなみに今更だが登場人物の生年月日がアレなのは昨年という設定だから。まあ2010年ネタもたまにあるけど気にしない方向で(汗)。

その他：前作を知らない人用

金剛様名：前作「貧乏な彼女」の登場人物、簡単に言えば幼馴染系、名前の由来は名字も名前も戦艦で本人も元ネタは知らないが変な名

前だと気にしている様子。

古賀真紅…前作「貧乏な彼女」の登場人物、見た目は小学生っぽい
がれっきとしてJKである。

part 24・陸上自衛隊駐屯地にて

…ついわけで7月11日。

今日は基地祭に行くことにした。もちろん1人で。

とりあえず俺はケータイを確認する。

…あれ？メールが4件も？とりあえずひとつひとつ確認する事にした。

……これはみよんから。

「暑い」

だから何？

…次は勝政。

「おい！エロゲーを無料でどこかからダウンロードする方法を教えてください！」

つか犯罪だろ…

悔しかったら買えよ…

次は千夏…

「ねえねえ暇？だったらデート行こうよデート！そんでき、夜はホテルいこ！」

却下。

こいつが何を考えているか瞬時にして解った。

絶対いかないぞ、行ったらこの小説が18禁になってしまう。

次は千尋…

「今日暇？」

うん、暇じゃないと返信しておこう。

暇だったら二人きりだったかもしれないけど…今日はそれどころじゃない。

そういうわけで俺はまだ寝ている姉ちゃんや兄貴の目を盗み、家を出た。

電車に乗り、次に地下鉄に乗り換えてしばらく、いよいよ駐屯地近くの駅に到着した。

ようやくついた…前々から行ってみたかったが……ついに1人で！
今までは中学生だという理由でダメだったが今ならok！夢のような話だ！

うん、いいねえ自衛隊。

これ見るとまだ大丈夫だって気持ちになるよ、少なくとも俺は。

「……」

朝早くから基地にいる俺。

もちろん観閲行進もばっちり見た。

日差しが厳しい中、陸軍分列行進曲に合わせて自衛官達は堂々たる行進を見せる。ちなみに自慢じゃないがほぼ自由の身となった今、基地祭には毎年行こうと思っていたりする。

それに流石にこんな所にヤンキーさんが来るってこともないだろう。

俺は観閲行進が終わった後、解放されている駐屯地内を歩いていた。たまに子供が自衛官に銃の構え方を教わっている所を見かける、なんだかいいですねえ。ちなみに作者が軍事に目覚めたきっかけが子供の頃陸自の駐屯地で隊員に銃の構え方を親切に教えてくれた事らしい。

あれ？

「あつ」

どこかで見たことあるような…あつ！
間違いない、この人は香椎さんだ。

「こ、この前の！」

「ど、どうも…」

ばったり会いというものも対応に困るな…
もしかして俺って言うほどこつこつというのは得意じゃない？その可能性大だな。

「えと…香椎さんだっけ？」

「は、はい！」

なんだ？

緊張しているみたいだな？

「今日はお一人？」

「いえ、友達のお父さんが自衛官で…ついでに誘われたから」

「あ、そうなのか」

親父が自衛官…か。

頼りありそうだな、でもうちと同じで滅多に会えなさそうだ。

「あっ！結衣ちゃん…って」

どこかで見たとあるような小さな女の子が現れた。

「う、うそ…そうか。ついに結衣ちゃんにも彼氏が！」

「ちょ！真紅！これはその…違う！」

あれ？話が変わな方向に？

これは一体どうした事か？

「何何？あつ、貴方は！」

「榛名ちゃん！この人結衣ちゃんの彼氏！」

「ええええ！？」

「だから違っつてば！真紅の言う事は信じちゃダメ！」

…止めたほうがいいんだろうか？

それとも逃げたほうがいいんだろうか？うん、微妙な所だ。しかし俺は千尋一筋と勝手に脳内では決めている。従って他の女の子と付き合うという事は天も許さぬ反逆であって、それを起こせしもの

は栄えた試がないわけであって…結論としては逃げるが勝ちって事になる。

うーん、逃げちゃおうかな？

いや、でもこれ收拾つけないとダメだよねやっぱ？

「あ、あのー……」

「なつ、何結衣ちゃんの彼氏さん!？」

「だから違っつてばあ!！」

どうしてそんな反応になる!？

今はどう考えても香椎さんの反応のほうが正しい!

「おい!！」

へ？何か男の声が？

後ろを振り返ってみると……確かに男がいた。黒髪ロングの少し幼く見える女の子と一緒に。

「お前何してんの？」

「へ？いや…特になにも……」

何？何なのこれ？

「あわわわ!ま、まさか真紅ちゃんと榛名ちゃんと結衣ちゃんを恐喝!？」

「ちょー！はい！？」

「恐喝？大丈夫か！？」

「え？いや…そのお兄ちゃん？」

「あの一、充ちゃん？」

「ちょっと待て！」

「なんだこれ？まずは状況を整理しよう。」

俺は香椎さんとぼったり出会った。そして香椎さんのお友達2人が現れて俺と香椎さんが付き合っている付き合っていないの話になって、そしてあの二人組が現れて、女の子の発言で話がややこしくなつて、つであの男が俺の事を勘違いしたと。

「おいそこの、女いじめて面白いか？」

「いや、いじめてたわけじゃないんだけど？」

「っじゃあ何してたんだ！？」

「え、え…っつと…」

「ああもうなんとかしてくれ！」

「っつーか俺には関係ない！よしここは…逃げろ！」

「俺は全力疾走した。」

「あー！こら待てー！」

「保坂さん追うよ！あくどーたいじあくどーたいじ！！」

「おう！」

ちよー！！後つけてくるんですが！！

助けてええええええ！！！！なんで自衛隊の基地祭に來ただけなのにこんな面倒な事に巻き込まれるんだあ！？

はあ……

俺

っ

て

不

幸

！

！

なんか知らないけど俺は人目につかないところに逃げ込んでしまった。しかも行き止まり。

「まぢい！！」

俺は立ち止まざるを得なかった。

後ろを振り向けば例の二人組。あんたら何者ですか？

「もう逃げられないぞ」

「うん！うん！」

どうでしょう？

俺もしかしてこの後警察沙汰する事になるの？それだけは勘弁…マシ免罪ですよ…

「あ、あのー…一応言っけど俺なんもしてないっすよ」

「うーん、怪しいですよ保坂さん？」

「うん、見るからに怪しいキャラだな」

…俺ってそんなに怪しい？

上は普通のポロシャツだし、下も普通のズボンなんですが？サングラスもしていなければマスクもしていないし、眼鏡も掛けていない、キモイ髪型ではないし……怪しい要素なんてない気がするけど。

「なんとか言ったらどうだ？不審者さん？」

「ちょ！誤解だ誤解！俺は何もしてない！」

「じゃあ何してたんだ？」

「えーっと…うーん…」

まずい、言葉が思い浮かばない…

確かにどうでもいい事だったんだけどアレはアレで説明に困る。

「やっぱり不審者だよ、保坂さん」

「そうだね、裏で変態臭いし」

「ちょ！勝手に決め付けるのもどつかと思っぞー！」

「よし！あくどーは成敗するぞー！」

「ちょー！！」

なんか女の子のほうが進んできた！！
まずいと思って俺は攻撃（？）をよけた！

「うわっ！！」

「あー！避けたね！」

「普通避けるわ！」

なんてこつたいなんてこつたい！
もう帰りたい！

「やめとけー不審者さん。早川に抵抗するとロクな目に遭わないからおとなしく殴られたほうが吉だと思っぞー」

「ちょー！うわあっ！！」

「えい！えい！このー！」

は、速い！

この早川っていう女只者じゃないー！！

そりゃあ前作「貧乏な彼女」の最強クラスキャラクターです

からねえ、さて今回の主人公vs前作のヒロイン、どっちが勝つでしょう？

作者ああ！ナレーションしてないでなんとかかしてくれえええ！！！！

無理、だってそういうネタだし

ひでええええ！！

俺の意見は無視！？もうすこし自分の作品のキャラを大事にしようよ！

うーん、気分だね。気分

ひどい！ひどすぎる！！

「えい！」

「じぶっ！！」

は、腹ITEEEEEEEEEEEE！！

こ…これって…もしかして…

「えい！」

「ぎゃぶっ！」

お、俺の勘違いじゃなかったら…

「とりゃあ…！」

「…いや、そういう問題でもない気がするんだが…」

解ったぞ！

男のほうはまだまともだ！問題は1人で突っ走ってる早川って子だ！
！そうに違いない！

「い、いごうか…とりあえず」

「うん」

「…南無阿弥陀仏」

俺まだ死んでないんですけど！？

…俺は悟った。あの2人、もしかして恐怖の現人神なんじゃないかと。

…

…

…

「…あのー」

んん？なんだ？

俺はどれぐらい寝ていたんだ？

「はい？」

おっ！香椎さんだ…ってかこの姿どう考えてもみっともないような…
っ！か可愛らしいパンティー見えてる！これは突っ込むべきか？…
いや、このまま眺めてるのもいいな。

っ！かこれいいのか？

最近はパンチラ描くのもNGみたいな感じになってきてるらしいけど…ま、いいか。昭和じゃ当たり前だったし。大体気にしすぎなんですよねえ皆さん。最近じゃ東京都で二次規制やらなんちゃらってのがあるけど、規制したら余計に犯罪が増えるという今まで通りの展開になってまた新たに規制…っという繰り返しになりそうな予感しかないんだけど俺。

まあそれはともかく、早く帰りたい……

「大丈夫？」

「まあ一応」

俺は立ち上がった。

ま、痛いけどな…

「あの二人、私の友達の知り合いの先輩なんだけど…ちょっとかわった人たちだからまあ気にしないで」

変わってる…変わり過ぎているぞ！？

「ちなみに俺、どれぐらい寝てた？」

「えと…3時間ぐらい？」

「うわあ…結構寝てたなあ」

「みんな先に帰っちゃった。私はその…心配だから来てみた」

「御心配ありがとう…」

ああ、穴があるなら入りたい……

つというわけで駅まで送ってくれる事になった。まあ駅は近いんだけど…って、ん？

なんか柄の悪いのが2人近づいてきた。学生じゃない、ガリとデブな大人だ。ちよつとここ駅付近ですよ？

「おお？可愛い嬢ちゃんじゃない？ねえねえ、そのボロ男はほつとして俺達とどこか遊びにいかない？」

ガリのほうがいやらしく香椎さんの顎を触りながらそう言ってきた。

「えっ？あ…あの…ちよつとやめてください」

「いいじゃないいじゃん？なあ？」

「うんうん」

デブも同意…ってそういう問題じゃない。

このままじゃ香椎さんが危ない。こんなガリとデブだったら多分相良達のほうが強い。よし決めた！こいつらをガード下まで連れてっ

て…ってあれ？もうガード下じゃん？

そうだ、忘れてた。

駅の近くって…ガード下の自転車置き場の香椎さんの自転車がある場所までの話だった。

…誰も見てないな、よし！

「おい」

「なんだあようあんちゃ　　」
「ぶっ！！」

まずめんどくさそうなデブの足を攻撃。

デブは転んで動けなくなった…これはひどい。なんてテキトーな戦闘。

「て、てめえ！！覚悟しろよこの野郎！」

「きゃっ！」

香椎さんが声をあげ、大急ぎで俺の背後に隠れた。

その理由はあるのガリがジャックナイフを出してきたからだ。やべえ刃が光ってるぞ？流石の俺もドス持つてる相手と戦うのには慣れてねーぞ。そして今気がついた、さっき倒したデブもポケットからジャックナイフらしきものが出ていた。こいつら武器を使うのか…

「へっへっへ…おらおらおらあ！素直に言う事きかねえと刺すからなっ！？」

うっん、しょうがないなあ。

まっ、相手にしてやるか。

「おもしれえ、桑園なめんじゃねーぞ！ーてえりゃっ！ー！」

「ぐっ…なっ！？ナイフがっ！」

俺はガリの手を蹴り、ナイフを落とさせた。
そして…

「…ッ！？…お…おお……」

ガリの腹に強烈な一撃を加えた。

ふう…終わった終わった。男達は白目を向いてそのまま地面に倒れこんだままであった、しかし俺もさっきのあの女の子にやられたダメージが予想よりも深く、体中に痛みが伝わってきた。

「うっ！」

「だ、大丈夫！？」

「大丈夫大丈夫…これぐらいいつもの事だから」

「いつも…もしかしていつも望まない喧嘩に巻き込まれてるの？」

その質問は…まあ大体正解だ。

「うん」

「そうなんだ…」

何故か香椎さんは暗い表情だった。
そして、何かを決心したのか右手を強く握りしめた。一体なんなん
だろう？

「あ、あの！」

「ん？」

「ちょ…ちょっと伝えたい事が…」

伝えたい事？

俺はとりあえず頷いた。一体何だろう？

「あの…その…ちょっと待って」

「う、うん」

すると香椎さんは深呼吸をした。

一体何を言っただろう？…ま、まさか愛の告白！？…いや、そりゃ
ないっすよね常識的に考えて。

「……よっっ！」

香椎さんは決心したらしい。

「私！橋立君の事が好きです！私とお付き合いしてください！」

「…えっ？」

「なんで？」

「お互いの事よく知らないだろ？そういうのって付き合い始めで見ると最終的に仲が悪くなるって事になる、つまり一目惚れっていうのは信じちゃいけないものだよ。俺も経験済みだし……」

「そ、それじゃせめて……お友達からでも！」

お友達……悪くはないけど中途半端にしておくのも香椎さんの為じゃない。

……だけど、お友達になってくださいって言うって断るのは流石にどうかと思う、よし。

「友達かぁ……まあいいよ」

「あ、ありがとう橋立君！……じゃ、じゃあ……」

「ああ……」

俺はメールアドレスと電話番号を交換した。

よかったんだろうか？いまいちよくはわからない……だが友達もダメって言うって香椎さんが泣きながらこの場を去っていくのを見たくなかった俺は香椎さんと友達になる事にした。

……やれやれ、それよりも俺、いつ千尋に本音を言おう？勇気が出ない……

part 24・陸上自衛隊駐屯地にて（後書き）

おまけ：前作を知らない人用2

保坂充：前作「貧乏な彼女」の主人公、高校2年生。なお本作の中での設定は序盤〜中盤にかけてのものだがその後ヒロインの優希とどうなったかは本編参照。

早川優希：前作「貧乏な彼女」のヒロイン、高校2年生。現役自衛官をもぶっ飛ばす事ができるその実力は純ごときで抵抗できるものではない。だがちよつと天然が入っているなどある意味恐ろしい子である。

part 25 文化祭 準備編

月曜日…目覚ましうるせえ……
もう少し…もう少しだけ…

「起きろー！」

「ふっ…！」

あっ！！なんだ！？胸痛っ！！
なんか妙に胸が…きつと姉ちゃんが胸に踵落としを加えたに違いない。

「…姉ちゃん…それは流石にないわ…」

「えっ？そっ？？」

「下手したら心臓止まるっつの…」

「あっ、ごめん！それより早くご飯食べないと、今日月曜日だよ」
「？」

「わかってるからもう出てって…着替える」

「うん」

姉ちゃんは部屋から出ていった。

これも毎日の事なんだけど当然慣れない、痛いし。

そのあと俺は朝飯を食い、顔を洗った。
いつも通りの朝だ、そしてある時刻になるとドアチャイムが鳴る。

「はい」

「あ、純。おはよ」

「おう、ちょっと待っていてくれ」

千尋と一緒に登校する。

これももう日常、考えて見れば俺って千尋と接する機会がたくさんあるっていうのにならぬ。このままでいんだらう…それそれ言っちゃえばいいのには思っているけどいまいち勇気が出ない。

一目惚れだし…俺が昨日香椎さんに警告した通りだ。一目惚れって結構危険が潜んでいるらしい。ってか俺も経験済みだ。中学生の時に玉砕経験アリ。

「今日から文化祭の準備本格化だね」

「ああ、2日後には本番か…」

ちなみにうちのクラスの出し物はクレープ屋…上品ですねー。

実はこれに決まったきつかけはチャラ男と勝政のせい。まあいいんだけど…うまいし。それで俺の役目は宣伝、なんで決まったかって？

実は…面倒な事に文化祭のどこかのなんかで「彼氏にしたい男子ランキング」とかいうのがあって、それで俺は2位にランクイン…某豆腐屋の息子かよ…

まあそれはともかく、そのせいでクラスから客寄せ要員としてカ

ツコいい男1人と可愛い女1人が選出される事になったが投票で力ツコいい男に俺がランクインしてしまったんだ…めんどくさい事になんでつて聞いた所、顔がよくて体つきもよく、しかも強くて予想に反して優しそうだかららしい。はあ〜面倒だ…。

「はあ〜、でもさ。考えてみたら私達つて客寄せの練習だけなんだよね?」

「そういえばそうだな」

そうそう、可愛い女の子のほうは見事に千尋が選出された。

やっぱり学校上、そこまで頭が良くなくとも見た目と家のせいだろう。なんだつてそういう風には見えないけど財閥の令嬢だからな、一応。

「退屈だね」

「まあ準備期間は退屈だけど文化祭本番はそれなりに楽しいと思うぞ、周りは個性強すぎる奴らばっかりだし」

「それもそうね」

勝政とチャラ男に至ってはいるだけで面白いし。

……………ふう、ようやく学校だ。

「っというわけで今日と明日は文化祭の準備です。本番が近い、ラストパートだ。頑張っていい文化祭を作り上げましょう」

源ちゃん…特に特徴がない為か全然出番がないよな。
ある意味不憫な人…

っというわけでまだ朝早いが早速作業が開始された。俺は勝政とチヤラ男、何故か別なクラスの和輝に更衣室に連行された。

「あのさ、なんで和輝がいるんだ？」

「えっ？だつてさあ、うちのクラス劇なんだけど俺脇役だし……主役大石でヒロイン鞍馬だぜ？」

…大石って誰？

スマン、俺も知らない。しかしヒロインは千夏か…まあお似合いだな確かに。千夏も黙ってれば可愛いし。

「っじゃあ早速これに着換えろ！」

「ちょ！勝政っ！人の服を勝手に脱がすな！」

「いいから、早く」

「どうしてこんな事に…」

っというわけで無理やり着替えさせられた。

その服装とはオーソドックスな英国風の執事服だ。如何にも紳士っ
て感じだが…正直似合ってるのか俺？

「あっ！橋立すっごい似合ってるじゃん、今度の漫画の主役のモデルにしようかな？」

「えっ？」

みよんに褒められた。

それはいいが面倒な事になりそうだ。

「「「きゃー！」「」「」

女うるせええ！！

一体俺の何が珍しいんだ！？

「橋立超力ツコいい！」

「ねえねえ写メ撮っていい？」

「はあ…めんどいからお好きにどうぞ……」

何故か女子による俺の撮影会が始まった。

みよんに至っては漫画の主人公のモデルにすべて俺をスケッチしているし…

「なあなあ、俺も、執事服着ようか？」

「日向は別にいいや」

「家に帰れ」

「そうよ！日向なんて純君の喧嘩の相棒やっつてればいいの」

「ぐはっ！女子全員で総攻撃とは…っつっ」

頑張れ、勝政。

女なんてな、所詮そんなもんだよ。

…っ！かさつきから和輝を見ないな、やっぱり自分のクラスに戻ったか？

「うん、俺としては純はチャラ系も似合うと思うけど。」

「えー、チャラ系はチャラ男だからいいんじゃないの？」

「そ、そうすつか!？」

チャラ男は肯定的な感想を貰って大喜び。

俺もここは喜ぶ所なんだろうがいまいち喜べない、疲れるし。そんな時、俺の興味をそそる人物が登場した。

「……」
「……」
「……」

今度は野郎共がうるさい!!

ダメだダメだ!これは譲らん!だって…千尋だから!!

千尋はオーソドックスな英国風のメイド服に身を包んでいた。まあイギリスかよって突っ込みたくなるかもしれないが実はメイド服の歴史をたどれば自然とイギリスに到着する。19世紀後半のイギリスでは一般に「メイド服」と呼ばれるものを着用する家事使用人やハウスキーパーの人たちがいた。そう、メイド服はコスプレではないのだ!

それを真に理解している奴は一体何人いるのだろうか?

似たような事例にセーラー服もある。あれはイギリスの水兵が着用していたもので日本では大日本帝国海軍の水兵が着用、いつの間に

か女子の制服になっていたというやつだ。

……そう、俺が言いたい事、わかったな？

つまりイギリスは素晴らしい！

メイド服もセーラー服もみんなイギリスですぜ？

「あ…あの…似合う？」

「う、うんにあ」

「すっげえ似合うっす！マジパネエぐらいっす！」

「これは…俺達を萌え殺す気か！？」

「すばらしい！すばらしすぎる…！」

野郎どもによって俺の声はかき消されてしまった。

畜生…俺の千尋に手を出したら全員しばくぞ？

「なになに！？うわぁ二人ともすごい、ボクはセーラー服なのに…」

突然現れた千夏は何故かセーラー服を着ていた。

まあ劇の衣装だろう…しかし！このセーラー服、これはこれでありだ。ん？執事にメイドにセーラー？なんというブリティッシュ。

「いや千夏、それはそれでいいと思うぞ。すばらしきブリティッシュ」

「えっ？ぶりていっしゅ？…うん、よくわからないけどきーちや

ん褒めてくれたし、ボク自信でできた！」

「ちよつと〜！千夏、そろそろ練習！」

「あ、ごめんね紅音、今行くから。じゃ、またねきーちゃん」

そういつて千夏は向こうに行った。

はあ…千夏のセーラー服ちよつと可愛かったかも…だがあいつの場合性格に難が…黙ってれば可愛いのに。

ただ、今回解った事はひとつ。

イギリスって破壊力高い物多いよね（いろいろな意味で）。

その翌日も、客寄せの練習だった。

なに？練習シーン？しょうがないなあ…

「クレープおいしいよー！」

「うまいぞ、クレープ」

「……ねえ、昨日から思ってたけどあんた達それ本気？」

「えっ？みよんはこれじゃダメだっていうの？」

確かにみよんの指摘通りダメな気はするけどしょうがない。

俺も千尋も口クナ事思いつかないからな。

「…だつてねえ？ほら、もう一回」

「じゃあまず俺から……寄ってかんかい！クレープくってげやー！」

「……」

あ、やっぱりダメだった？

「橋立…すっかりヤンキーっぽくなってきたね」

「だって…だってえっ！あいつら個性強すぎるんだもん！」

「わかったから泣かないで、とりあえず二人ともがんばって」

「「はい」「」

疲れてきた……

こんな事で明日の文化祭、大丈夫なんだろうか？
そして今日、帰ろうと思ったたらこんな頼みこみまでされてしまった。
頼んできたのはうちの姉ちゃんだった。

「純」

「ん？姉ちゃんじゃん。どうした？」

「あのさ…これ出てみない？」

「はっ？ベスト・オブ・イケメンコンテスト？」

「うん、ほら、女子は女子でコンテストするでしょ。その男版」

興味ねえ……

なんか意味あるんだろうか？

「女の子にモテるかもよ？」

「ふふ、折角で悪いが俺には既に意中の子がいるのだ」

「えっ？ そうなの？」

「っつーわけで不介入の方針で！…じゃ、そういう事で」

「あつ！ ちよつと純……折角いい所を皆に見せれる機会だと思ったのに…」

「つとか姉ちゃんはあるけど別に興味ないし。」

「どうでもいいや。あゝあ、明日から2日間大変そうだ。」

part 26 · 文化祭

ついに来てしまった。

校門にはでっかく「桑園祭」とか描いてある。いかにも文化祭って感じた。

まあ俺は特にそういうのには興味がない、ただ俺が見たいのは…そう！千尋のブリティッシュメイドさん姿のみ！

「おい」

「ん？誰だっけお前？」

「ひどい！俺の事忘れたの!？」

俺に声をかけてきたのは伊藤先輩だった。

…っ！か久々の登場だな番長さんよ。

「別に忘れちゃいませんけど…」

「それよりその姿どうした？」

「うっ…っ、これは…」

俺は執事服を着用していた。

もちろんアレだからさ、ちなみに俺の店は紅茶も出るよ、是非とも3時に飲んでくれという感じに。

「ちっ、呑気な野郎だぜ。保護者席によお、西園寺のボンクラどもがいるぜ？」

「はあ？あいつらも確か今日文化祭じゃなかったんですか？」

「それがよお。どうしてもお前とケリつきたいっていうからよ…はあ〜これだからよく解らない奴らは」

なんと面倒な事に…

ん？待てよ？伊藤先輩の怪我はもうほとんど治っている…そして伊藤先輩は一応桑園の番長…っという事はわざわざ俺が出る幕はないんじゃないか？つまり伊藤先輩にすべてを任せれば解決じゃないか。

「よし、伊藤先輩、頼んだ」

「へ？」

「だって番長でしょ伊藤先輩？当然生徒のお命守ってくれるんですよね？」

「えええ、え〜っとは、はい！喜んで追放させていただきます！
！野郎ども！行くぞ！！」

「「「「「おっ！！」「」「」「」

そういつて伊藤先輩達は行ってしまった。

ふう〜、これで俺は喧嘩をしなくて済む。つーか一応先輩なのになんか俺に対しては頭低いなあの人、俺ってそんなに恐れられてるの？

そういうわけで始まった文化祭、俺と千尋は客寄せをやっている。
しかし……

「見て見て、あそこ」

「あれもしかして橋立？」

「レベル高！行ってみよ？」

「うん！」

「おお！？千尋たんが！千尋たんが！！」

「こ、これは行かざるを得ないな」

これはひどい…

俺達何もしていないのに勝手に客がやってくる。俺と千尋が突っ立っているだけで。

そして……

「あれ？伊藤先輩じゃん。どうしたのその傷？」

「う、うるへ……」

伊藤先輩まで来た。しかも傷だらけ…

喧嘩に負けたか番長さん？伊藤先輩の仲間も傷だらけ、やっぱり喧嘩に負けたらしい。大丈夫かこの高校？いや、もしかしたら勝ったは勝ったけどズタボロになりましたっていう可能性もあるけど…

「はあ、疲れた…」

「ああ…突っ立ってるだけなのにな…」

千尋も一緒らしい。
やっぱり疲れるものは疲れるんだ。

「千尋、こつこついうのって苦手か？」

「うん…」

そういう千尋は確かに楽しそうではなかった。

そつえばいつだったか、千尋はモテるからストーカーもいるって
いう話になった時千尋はやけに暗かったし、なんかあったのかやっ
ぱ？

中学時代がなんだかっていう記憶もある。

気になる…非常に気になる。

「よし、交代ですぜえ」

「おう」

つというわけで悪いとは思いつつ休み時間、後をつけて見る事にし
た。

ちなみに交代したのはチャラ男とみよんだ、理由はチャラ男はチャ
ライのがまたいい、みよんは可愛いかららしい。

千尋が向かった先は玄関だ。

外に行くのか？確かに外には出店もある。

千尋は下駄箱を開けた。すると大量の紙（多分ラブレター）が床に
落ちていった。

あの量は…流石に引くな。

「はあ…」

溜息をつく千尋。

そりゃあそうだろう、付き合う気もないのはまあそうなんだろうけどあの紙の量は処理するだけでも大変だ。

「お、ちっひろたん!」

っと軽やかにキモい事を言いながら走っていったのは彬良だ。

覚えてる人いるかなあ? まあいいや。しかしあいつは千尋に何の用だろ?

「な、何?」

「え、え〜っと、よ、読んでくれた!? そ、それ!」

「えっ? いや…」

「え〜っと…あれだ! 俺は千尋たんが好きだあ!」

「…謹んでお断りさせていただきます」

「ぎゃああああああ!」

彬良は泣きながら逃げて言った。

「つか千尋たんとか言っている時点でもうフラれるのは確実だろ…馬鹿かあいつは? それより全く元氣のない千尋、どうすりゃいいんだろ?」

「やっぱこのタイミングで話かけるのはまずいかな?」

っというわけで俺は千尋に気がつかれないようにこっそりこの場を離れた。それにしてもあれだけのラブレター、どう処理するんだろう？

ん？足音？…やべ！階段の上から千尋の後頭部が見えた。

この状況だと非常に気まずい、今のうちに俺はダツシユで逃げた。そしてぐるーっと回る形でもう一度一階へ、流石にもう千尋も来ないだろう。

…ん？あれは香取？

まあ教師だから玄関に現れるのは不思議じゃないけどなんだか挙動不審だ。俺はこっそり香取に近づき、なんとか香取の視界外に潜入する事ができた。香取は下駄箱を開けた…あそこって千尋の？

そして香取は靴を取り出した。

あの靴、以前千尋が履いているのを見たことがある。やっぱり香取は千尋の靴を取り出した。そしてあろう事かその靴のにおいをかぎ始めた。変態かあいつは？

「へっへっへ…うんいい匂い…」

き、きめえ…！！

教師としてどうかと思つぞ。

「ん？」

げっ！千尋…！！

幸い俺には気が付いていないようだが香取には気が付いている。遠いからよくわからないがわけがわからなくなっているんだろう。香取は靴の匂いを嗅ぐのみならず靴をなめ始めた。本格的な変態だ。

あれでも教師か？

「あつ！…き、君は！？」

「！？」

香取が千尋に気がついた。

香取は千尋に近づく。

「い…」

「ち、違う。これはだな…まああれだ……そ、そんな事より今誰も…いないな？」

確かに見ているのは俺ぐらい。

しかし香取の奴、何で確認しているんだ？

「伊吹」

「は、はい」

「静かに」

「えっ？…！！」

なんと…という事を！！

…えっ？何をやったかって？香取の奴が突然千尋のスカートの中に手をつ込んだ。完璧犯罪だ。とりあえず俺はケータイでムービーを撮った、理由？証拠。

「喋るなよ？叫ぶなよ？…静かに、直ぐに終わる……目え瞑れ」

「やだ！！」

「瞑れ！」

「…」

千尋の体は小さく震えているように見えた。

…あの犯罪者、前々から嫌な奴だとは思っていたがあそこまで腐っているとは思わなかった。

「ようしようし、この香取先生様が特別にキスをしてやる」

「た…助けてくだ」

「叫ぶな！外や中の生徒や他の先生にバレたらタダじゃ済まされないぞ！」

タダじゃ済まされないのはためえだる香取…

…ああもう我慢の限界だ！香取ぶっ飛ばす！！

俺は徐々に加速する形で背後から香取に接近した。

「…おおおおっ！！！！」

「うっ！！き、貴様何を！！」

俺は香取の髪を掴んで引っ張っりその場に投げ捨てた。

香取はすぐに立ち上がって俺を睨んだ。

「橋立てめえ！！教師に暴行加えるとはいい度胸じゃねーか！！」

「うるせえ！！この猥褻教師！！！」

俺は力の限りのパンチを香取の頭に加えた。

香取はよろめき、近くの下駄箱に背中を打ち付けた。多分相当なダメージだろう。殴ったこっちの手まで痛い。

「純やめて！もういい！」

つとは千尋も言うが俺は感情を抑える事が出来ず、香取の胸倉を掴んだ。

「二度と猥褻な事できねえようにしてやるこの野郎！！！」

「うつつ！！こらっ！やめんか！！…わわわ、悪かった橋立！！もう猥褻な事しない！ゆ、許して！許してくれえ！！！！！」

「何をしているんだ君！！！」

「は、離せ！！離せえ！！！」

突如として俺は誰かに両手を掴まれた。

ああ、俺もうおわた…多分教師だろう…

えっ？結局どうしたかって？

そりゃあもうお呼び出しされましたよ。

「まったく、君は文化祭の最中に何をやっているんだ！？」

まああれだ。

関係者3人全員一室に集まっていた。

「……………あ、あの……………山岡先生」

「ん？なんだね香取先生？」

「……………」

香取は黙り込んだ…っがはつきりと言った。

「申し訳ございません！！自分のせいです！！…教師とも有ろう者がこの伊吹さんに対して…せ、セクハラをしてしまいました！」

「な、なんだって？」

これは意外な展開。

絶対香取の性格からこの事実をひた隠しにするだろうと思っていたけどまさか自分から白状するとは思いもしなかった。

「そ、それを見ていたじゅ…いや橋立君は怒りを抑えられなくなっ
て私は助けられる形で…」

「うーん…こりゃあ話がややこしい。とりあえず、香取先生がやった事は立派な犯罪です。警察にも伝えておきます」

「……………」

香取は黙り込んだままだった。

…香取は当然、警察沙汰となった…が俺も教師を暴行したのでたじや済まされなかつた。次の週の月曜日に俺に対する処分が言い渡されたが…1週間の停学だそう。親？そうだね、母さんは死ぬほど泣いたね、爺さんは犯罪者をとっちめたまでは褒めてたね。

本来なら退学らしいが香取が犯罪者だつていう理由もあるらしい。しかも伊吹財閥が背後にあるらしいからあんまり俺達を敵に回したくないという学校側の意図もある。まあよくはわからんが…俺は処分を言い聞かせられた後、教室に戻った。

「よう、どうだった？」

流石の勝政もざまあみろという視線では俺を見ていなかった。

千尋に至つてはすぐく暗くて…はあ、千尋を助ける為とはいえやっぱり香取打ん殴つたのは流石にまずかつたかな？

「一週間の停学だつてよ。まったく相手が犯罪者なうえにこっちに千尋のお父さんが背後にいてよかつたぜ」

「純…ごめんなさい」

千尋は悲しそうな様子で俺に謝る。

「別に千尋が泣く事じゃない。悪いのは俺と香取だし、むしろ千尋の家に迷惑かけちまつたし、なにより停学は夏休み明けだぜ？」

「…うん」

「夏休み明け？」

「ま、まさか純。お前だけ夏休みが長いとか!？」

「そう!?!その通り!?!」

「くそっ! 思えばお前、一回もサボった事ねーし、出席日数も気にする必要がないとは…! っらやましすぎる!?! 俺も問題起こそうかな!?!」

勝政が半泣きでそういう。

そんなに休みがほしいか?

「やめときなさい日向、あんたの場合は即退学になると思っつよ」

「ひどい! みよんちゃんそれはひどい!」

「キモイ」

「ぎゃあ!?!」

…勝政って変な奴。

千尋も少しだけ元気が出たようだけど…! っぱり暗いのは変わらなかった。

…もうだめだ、俺の計画多分失敗…!

part 26・文化祭（後書き）

おまけ：

「おい作者、なんか文化祭関係ない上になんで俺停学？」

「いやあ、なんというか。馬鹿 喧嘩 馬鹿 喧嘩の繰り返しだったのでそろそろ物語を進めようと…」

「でも停学するような事させるのってひどくない？」

「そういう運命さ、主人公は」

「ひどい…助けてえ！！」

まあ純が退学になるような事は多分ないと思うのでご安心ください。あと、最近ネタ不足気味です。誰かネタを提供してくれると非常に嬉しいです。

part 27 ・ 護れ、超護れ！

…はあ…夏休みか。

今日の終業式…散々だったなあ…

何がって？

勝政とチャラ男が人の噂（俺の停字の話）ばかりしてすっかり俺クラスの笑い者だし。具体的にどんな話かっていうとまあセリフにすれば「あいつ伊吹にセクハラする香取にキレて殴りかかった」とかそんな感じだ。

おかげですっかり「千尋たんが好き」我らの敵」って思われるようになっちまったよ、特に男に。つで逆に女子からは「ピンチの時に助けてくれる王子様」とかい意味で噂されているがそれも困る。実際の俺は全然逆の存在だからだ。

つで、今何してるって？

夜中、暇だから公園を1人ほつつきあるいているのであります。先ほど香椎さんからメールがあつて明後日一緒に某所の神社の夏祭り行かないって話があつた。俺は友達も連れてくという条件でそれを承諾した。そういえば香椎さん最近会ってないなあ、元気にしてるだろうか？

「よっ」

「ん？」

…なんか、どこかで見たことがある二人組が…

もしかして基地祭に帰りにぶっ倒したデブとガリの二人組でしょうか？なんでこの公園にいるの？まあ夜中だし、街で遊んでいても違和感はないんだろうけど。

「てめえよお前に自衛隊前のガート下で会ったよなあ？」

関わりたくない、超関わりたくない。

こことは一つ…

「えー？君達誰だっけ？」

「とぼけんじゃねえよタコツ！」

通じないか…ですよー。

どうしましよ、人見てるぞ？

「ちょっとこっちいや」

「はい」

つというわけで俺はこの変な奴らに連行されてしまった。

連行された場所は人目が少ない路地裏、しかも何故かさっきのガリとデブを含めて5人集まっていた。ちょ…もしかしてこれ全員相手にしなきゃダメ系ですか？

「へっへっへ…あの時の借りはたっぴり返させてもらっからなあ…

…おらあっ！…！」

ああもうめんどくさい…！

もう毎度の事だし慣れてるわこれぐらい…！

俺は次々チンピラ共を倒していった。
そして最後のガリも…

「ちっ！」

前回と同じようにジャックナイフを出してきた。
でも対ドス戦は前回経験したからもう怖くないぞ？

「てえりゃあっ！！」

「くっ！！…くそお！」

「前と同じ手に引っ掛かるとは馬鹿野郎めっ！！！」

「ぐはあっ！！！！！」

…ふう。

案外5人って大した事ない事に気がついたけどそれって俺が強いだけ？

その後俺は公園に戻ってぶらりとしていた…っがまた誰かさんと遭遇してしまった。飛鷹高校の制服を着た男二人組だ。切っ掛けはちよいりーゼントの男とぶつかった事だ。

「…おいちよつと待てよ」

「ん？」

突然声をかけられた。

ぶつかってきたのあんた達でしょ…何！？まさか喧嘩巻き込まれフ

ラグー？もうやだー読者さん助けてえ！！

「ん？じゃねーよ、ぶつかっついてごめんの一言もなしか？ああっ！？」

「ちょ、しげちーやめたほうがいいよ。俺達別に不良じゃないんだし…それに相手は…」

「えー？たまにはいいじゃんドンちゃん。俺だって…俺だって活躍したいんだよお！」

可哀想に…脇役なんだな。

だがそれが脇役の宿命、泣くほどの事でもない。

「っというわけで面貸せよ？」

「…めんどくさい」

「なっ！！…おいドンちゃん！！…こいつ全然動じないんですけど？」

「そりゃそうだよ、だってこいつ…桑園高校の『狂犬橋立』だぜ？」

「へ？きよ…狂犬？そ…それまずいんじゃないの？」

「…相当」

「きゃああああ！！！！ごめんなさい私が悪かったのでありますどうかお許しを！！！！！！」

っといつて二人は逃げていった。

…結局なんだったのだろうか？俺にはさっぱの理解できない。
だがひとつだけわかった事は…根性、ないんだなあ。二人…

それにしてもいつのまに俺有名になっちゃったの？

確かに基地祭の時に飛鷹高校の奴らと喧嘩したけど…しかも女と戦
ってボロ負け…

いや、それは関係ないか。じゃあいつ俺の情報が伝わったんだろう？
きつとヤンキーさんの社会にも特務機関みたいなものがあるんだろ
う。

しかし、明日から暇な日常が続くのか…

どうしようかなあ？喧嘩だけはやりたくないし、痛いから…おっ
？あれは千尋？

どうしてこんな時間にここにいるんだろう？結構荷物を持っている
とすると買物かバイト帰りだろう。でも一応伊吹財閥の令嬢だし、
バイトなんてするんだろうか？まあそれはともかく、何やら千尋は
男二人と話しているようだ…っというよりかなり困っている様子だ。
よくよく見ればさっき俺の名前にビビって逃げた飛鷹の二人組だ。

ひそひそと近付いた。

…きつと余所から見たら俺って相当怪しいんだろうな。

「いえ、私はですから…」

「まあまあいいじゃない。ねっ？家まで送って帰るからさ」

「しげちー、見え見えのナンパもどうかと思うよ」

「馬鹿！そういう事は言うな！…ハハ、さっきの事は気にしないで

ね。この男は空気が読めない人だから」

普段は元気で口論しても勝てそうな千尋だけど意外とピンチに弱い事が今わかった。

これは…どうするべきでしょうか？

- ・あの2人を追っ払う、もしくはぶっ倒す。
- ・警察を呼ぶ。
- ・ガンを飛ばして路地裏に誘い込み、相手にする。
- ・逃げるか有り金渡して土下座する。

4番は男として論外、3番は完璧悪人じゃ俺：

2番？妥当だけど遅いよ！ならば1番：でもどうやって助けよう？いくら俺が相手に恐れられてるって言っても一応相手は2人だし。

…よし。

「おい」

「んあ？あんだコラ！？」

「じゅ…純？」

俺はしげちーとか言う奴の肩に手を乗つけて「おい」とか言ってみた。

…決まった。超決まった！次は…次は…この2人へタレだって事はさっきわかったから大声で怒れば逃げるかも。さっき俺に恐れて逃げたぐらいだし。

「女離さんかいゴルア！」

「ああ！？あんだコラ？やんのかコラアッ！？」

「ちょー！しげちーやめとけ！そ…そいつさっきの狂犬橋立！」

「うるせえー！！」

何この人？

完璧キレてますよ？

…面倒だから早く帰ってくれよお……

「おらあー！！」

俺はヤンキーさんのパンチを難なくかわし……

「しげちー援護するぜー！！」

ドスッ！

「うっ！！」

もう一人いたヤンキーさんの蹴りをもろに喰らいました。

「おっ？もしかして狂犬橋立って以外と弱いんじゃないか？ドンちやん？」

「あ、案外そうだったり！ようし……」

調子に乗った二人組。

とりあえずどうしよう？ここ公園だし街中だし夜でも人は見てるし…警察徘徊してそうだし……とりあえず俺は千尋に。

「今のうちに逃げる！」

「えっ？で、でも…」

おお！もしかして俺、今モーレッツにかっこいいかも！！

「早く！」

「う、うん！」

よし！千尋が逃げた。

とりあえず俺は2人に言った。

「サシで勝負してやるからちよつと来い！！！」

「あつ！待てえ！！！」

やっぱりヤンキーさんは追い掛けてきました。

俺はその勢いで路地裏に逃げ込み、ヤンキーさん達を連れ込んだ。

ここならまあ多少暴れても警察様に見られる事はないだろう。

「いたぞ！」

「おい逃げんなよ？それでも狂犬橋立か？やっぱりさしげちー、狂犬橋立って実は大した事ないんじゃないの？」

「そ…そうだな、よし二度と威張れないようにしてやるうか！」

「お、おう！」

別に威張ってないけど……

誰か助けて、もうヤンキーさんに絡まれたくないんだけど。

「てええええ！」

2人同時にかかってきた。

俺は2人の攻撃を軽々とステップしながらかわした。我ながら相変わらずすばらしい動き、伊達に姉ちゃんに鍛えられてないぜ。

「ていつ！」

「とおうつ！」

左右の腕を使ってヤンキーさんの攻撃を防御する。

イメージ？ そうだなあ、何となく初期ドラゴンボールの格闘シーン？

「くっ！このっ！」

ドンッ！

「ぐっ！」

あ、防御失敗。

俺の腹に一発入りました（笑）しげちー、動きだけは確からしい。

ドンちゃんは力だけ？ つまり2人一緒じゃないと強くないタイプだ。

「弱っ！」

「おりゃあー!!」

「おえっ!!」

今度は顔面にビンタ！
痛えー!!

「弱っ!!」

「でもドンちゃん、油断すんなよ？こいつ、防御だけは確かだぞ？」

「あ、ああ…あゝあ、こんな時に充がいればねえ。俺らホントは喧嘩上等じゃないのに」

「でも喧嘩売られたじゃんしょうがねーだろ」

売られた…ですって？

俺はちよつと鼻で笑った。大体ねえ…千尋ナンパしている〓俺への挑戦状だぜためえら。

つと俺は思った。ようし、2人は雑談…隙だらけ。

「余所見してんじゃねーよ!!」

俺はドンちゃんにタツクル!

「うおっ!!」

ドンちゃん怯んだ!

「なっ！てめえ！！」

「んっ！！」

俺の裏拳しげちーの顔面にクリーンヒット。

鼻の上を赤くしてしげちーは倒れこんだ。鼻血が出ている…一発K
Oとか弱いなこいつ。

「し、しげちーの仇！！」

「なんの！！」

ドンちゃんが俺を驚？みしようとしてきたがそれをかわした俺は蹴
りを一発ドンちゃんの腹に入れた。怯んだ隙に10発連続でドンち
やんを殴ってみたら伸びちゃいました（汗）

はあ、疲れた。でも勝ったけど全然嬉しくねえ……考えてみる？
喧嘩強くて女の子にモテねえよ…

千尋だつて喧嘩強いからって俺の事好きになるわけないし……

なんで俺って喧嘩しか取り柄がないんだろ？頭は悪いし、あんま
りあてにされてないし、何よりやる気が足りないってよく言われる
し、自分でも自覚してるし。

……あつ、ケータイにメール。

千尋からだ。

「純、大丈夫？助けてくれてありがとう、でも怪我していたらごめ
んなさい」

……心配してくれている。この文を見る限り心配しているんだろっけ
ど……実際は千尋も一応令嬢、暴力的な事は内心嫌いだろっ。もし

かして嫌われていたりして?…もう嫌だ俺。

「いって……う、ごめんなさい!」

ようやく起き上がった2人は半泣き状態で逃げていった。

これじゃあ完全に俺が悪者だな、まあ実際手出したし、俺も悪者なんだろうけど?…それよりメール返信しよつと。

別に大丈夫、千尋はどう?つと…

またしばらくしてメールが来た、今度は千尋が大丈夫と答えるような内容だ。俺もよかったと返信した。

…しかしなんてあっさりしたメールだろう、もうだめば。

そのまましゃがんでちよいとしょんほりしていると、向こうから足音が聞こえた。

…もしかして警察?

「は…話してください!」

「うるせえ!黙ってる!!」

うわぁ、真面目そうな男の子がヤンキーさんに捉えられてるよぉ。

真面目そうな男は制服からすると南陽高校、偏差値最高で進学校で服装自由化の話題すらある難関高校でエリートばかりが通つと噂されている場所だ。何か街に用事があった所ヤンキーさんに絡まれてしまったんだらう、カワイソス……ってかこっちにくるんだよね?やば!さっさと逃げない!!

しかもヤンキーさんったら稲川高校の奴らじゃん!稲川高校は北区

にある高校で制服が可愛いという理由で女子には人気だが不良の数が半端ではないと聞いた事がある。これはまずい。
…っと思つて逃げようとしたら…

「ん？…ほっほう…先客かい？」

「その制服桑園だな？」

あつ、家に帰らず制服のままほっつき歩いてきた事に今更気がついた。

まあ俺が帰つてこないつとていのは中学時代にも何度かあつたし、あんまり心配はしてないだろうけど…でもやばいっすねえ、よりよつて稲川高校のヤンキーさんに遭遇しちゃいましたよ。

…逃げるが勝ち、だと思つ。

よし、逃げよう、逃げる事にしよう。人生逃げたほうがいい時つて一度はあるはず。

「あつ、え〜つと。いやあ大した用じゃなかつたんっすよ〜、では自分はこれで…」

「あつ？てめえどこ行くんだ？」

「えっ？…帰つちやダメ？」

「あたりめえだろ？このまま帰れると思つたかコラっ？」

…泣きたい。

捕えられてる南陽高校の生徒は心配そうな表情でこつちを見ていた。

「はは、ですよね……」

そうは回答してみるもの……

誰かたちゆけてくだちゃい!!

ちよっと見ればヤンキーさん達、いかにもやばそうです。

皆凶悪そうな見た目だった…やです、関わりたくないです。

「おい小僧！この桑園の奴、殴ってもいいよなあ？」

「だ、ダメです！暴力はいけ」

「やかましい！」

南陽高校の生徒を思いつきり打ん殴る稲川高校の生徒…噂通りの凶悪さです。

南陽高校の生徒は口と鼻から血を出して痛がっていた。そりゃあ顔面にクリーンヒットですものね。

「おら、今見たる？」

「まあ…一応」

「…面貸せや？忘れさせてやるからよお？」

ちよ！無理無理無理！かえって鮮明に覚えるって！

誰か助けてくだちゃい!!…っ俺の頭の中に俺の声が再生される。

part 28 ・こちら橋立、変態を救出した。

前回のあらすじ？

千尋を助ける為に飛鷹高校の奴らを倒した。つで喧嘩強くてもいい事ないよなとか悩んでいたら偶然南陽高校の生徒を拉致ってる稲川高校のヤンキーさんと遭遇、今にも殴られそうです。

俺？もう泣きたいですよ？だって悪そうなのがなんかどんどん集まってきたて10人越えてますよ？

「ようし、賭けだ。てめえ勝ったらこいつ解放するからよお、がんばれよ？」

はい？俺が勝ったら南陽高校の生徒解放だって？

…っじゃあ負けたら2人ともフルボッコ！？っでついでにがんばれよって…俺に拒否権はないの！？

「うおらあつ！！」

「ちよ！待てえ！！！」

ある程度は予想していたからか突然の攻撃をかわすことができた。うっん、さっきの飛鷹の2人組より動きにキレがある。流石はヤンキー高校の生徒ですね。…こうなったら、やっぱ抗戦するしかないね。話し合いで解決しそうにないし、相手は特別「頭」が弱いからすぐ暴力振るうだろうし。

「…てめえら、突然殴るなんてひでえじゃねーか？」

「うるせえよ、賭けだろ？てめえが勝ったらあそこの小僧も助かるんだぜ？」

「そうかよ、っじゃあ遠慮なくお前ら全員叩きのめすからな！後悔するなよ！！」

俺はとにかく力の限り戦った。

流石にヤンキー高校の奴らだけあって相当手ごわかったけど勝てない相手じゃなかった。多分学校でも下っ端連中だろう。それでも1人1人がそこそこの強さを持っている。

ようやくあと1人の所で…もう体力の限界。

結構強い奴が多かったせいかな体力の消費が妙に早かった。

「ぜえ…ぜえ…お前ら人数だけかよお！」

「戦つてのはなあ、勝ちゃあいいんだよ」

確かにそうっすね。

あゝあ、やっぱ強行的に逃げればよかった。

っというわけで俺は残り1人を相手に死ぬ気で戦った所、辛勝しました。

「ぜえ…はあ…手こずらせやがって…大丈夫か？」

俺は南陽高校の男にそう呼びかけてみる。

「は、はあ…ありがとっございます」

「夜中に遊んでるとああいう不良に絡まれるから気をつけろよ」

「いえ、遊んでいたわけでは…用事があったて…バイト帰りなんです」

「…そうかよ、どうでもいいけど敬語はやめてくれ。一年だろどうせ？」

「まあ…そうなんですけど…」

耳あるのか？

敬語らめえっていったばっかりなのに。

「だから敬語はやめろって」

「は、はい、いめん…」

「さてと、もう用は済んだのか？」

「はい」

「んじゃ、こんなとこでつととおぢらば…」

「…ああ！…後ろ！…」

はい？

っと思った瞬間、後頭部に激痛が走った。しばらく痛みに襲われたがちよっと後ろを見てみるとなんと追加の5人が…：…ちよ…何人いるんだよこいつら…：…今の状態だと5人相手にするにはちよっときついで。

「おいおい余所見すんなよな？」

「俺ら稲川舐めんなよ？その野郎シメんに結構人呼んだんだぜ？」

「そうそう、喧嘩なんて1人でするもんじゃねえよ」

「おらどうした？たたんかいホケエ？それとも木刀で叩かれたいか？ああ！？」

超腹立つ。

「てめえら卑怯なんだよお！！！」

俺は思いっきり鉄拳を先頭の奴に入れた。

そいつはふらついた後に倒れたがすぐに4人が立ち向かってきた。

「野郎！」

「その制服桑園か！？桑園如きが俺らに喧嘩売んのか！？」

「上等じゃあ二度と喧嘩できねえようにしてやる！！！」

戦う事15分、ようやく最後の1人を倒した。

途中からさつき俺に打ん殴られた奴が復活し始めて大変だったがようやく静まりかえった。しかしその頃には俺も立つとフラフラになるほど弱っていた。

「っちいゝ、あいつら手加減知らねえのかよ……」

「だ、大丈夫？何か…怪我ひどいよ？」

「これでまた不良が現れたら今度は虐められるかもな…それより早く帰れよ。親も心配してるぞ」

「あ、うん」

つという事で帰ろうとしたが、また真正面から3人のヤンキーさんが登場。

しかも同じ制服って事は戦いを見ていたとかいうオチ?…うわぁ俺もう戦う体力ないんですけど。

「ほお?これ全員お前が倒したのか?」

「ちょ!まずいよこれは!」

「おおおう小僧、その男に護ってもらったそうだなあ?でも今度はそううまくいくと思うか?」

どうしようかコレ?

…今のHPは残り30ぐらいな気がする、これじゃあとでも勝てないぞ。しかも相手は雰囲気からしてかなり手強いと見た。

「ちっ…」

そしてさらにぞろぞろ6人ぐらい…こいつら馬鹿?何人集めたんだよ?

つてか俺と喧嘩しているという情報はどこから伝えられたんだ?まさかこいつらが最初から見ていたとか?

「まったく、さっさと倒そうぜ?じゃねーと蘇我さんにまたひどく

扱かれるぞ?」

「そ、そうだな…おい!!…てめえ弱ってるんだな?心配すんなよ?ちつよといてえ目に遭ってもらうだけだからよお?」

それ非常に苦しいと思うのですが?

俺は肩を押さえながら立ち上がり、強くヤンキーさん達を睨みつけた。相当体が痛い、やっぱりあれだけの人数を相手にするのは無理があった。このままでは間違いなく敗北する。

「ちつ、おいあんた。早く逃げろ」

「えっ?でも」

「俺が時間稼ぐ!男だったら勇氣出して行動しな!!」

「は、はい!!」

「あ、待たんかコラッ!!」

俺は1人ヤンキーさんに思いっきりタツクルした。

うん、効果絶大、ヤンキーさんはよろめいた。さらにもう1人かかってきた奴に対してもタツクル!おっ、怯んだ怯んだ。

「なにすんだてめえ!!!!」

「うっ!!おっ!!」

まあそのあとヤンキーさん達にフルボッコにされたけど後悔はしていない。

一応、人の役には立つたつばいし……それにこのまま負ければ俺の不敗伝説もなくなって俺を相手にしなくなるかもしれない。

「おらおらどうしたあ！！立てよポケエツ！！」

「…その辺にしときな」

「なにい！？てめえは誰だよ！！」

闇から現れた男は勝政だった。

なんでこんな所にいるんだ？まあ私服だったけど。黒いＴシャツに黒いズボン…何から何まで黒いなあの男…

「か、勝政なんでこんなところに？」

「暇だから街中歩いてたらよ、不良共が路地裏に駆け込んでいったから見に来たんだ」

勝政に助けられるだと？

それはそれで嫌な気がする。

「またわけのわからないのか！一人現れた…おめえら！こんな野郎さつさとたたんじまえ！」

「………おう！！」「……」

つという事で気合を入れたヤンキーさん達は次々と勝政に襲いかかっていたが勝政は持ち前の実力でヤンキーさん達を次々と倒していったアツという間に最後の1人になったがさつき俺にやられた奴らが復活し始め、相手の数が約20人に達してしまった。

「つてたんだよ？」

「う、うるせえ。成り行きだ…別にやりたくてやったわけじゃねえ」
俺も勝政のボロボロ…流石にあの大人数はきつかった。
まあなんとか勝ったけど…

「…そういえば公園で伊吹の奴とばったり会ったがお前の事心配してたぜ？」

「えっ？…千尋の奴、帰ったんじゃないのか？」

「ちげーよ、お前の事待ってる。自分の為に己の体犠牲にしている奴を見捨てられないんだとさ」

「そうなのか……」

「…千尋は暴力沙汰嫌いじゃないのか？…そんなはずはない。けどなんで俺なんかを心配するんだ？喧嘩しか能がない男なのに…やっぱり友達としてか、それが一番妥当だろうけど。」

「ついでに言えば、伊吹はこいつらとお前が戦っていた事もしている、理由もな」

「はっ？…どういう事だ？」

「…すまん、俺途中から見てたわ。あとさっきの男、確か山岡って奴だっけな？あいつが俺と千尋にお前を助けてくれて頼んだから俺は来てやった。それが俺がためえの戦いに加勢した本当の理由だ」

あの南陽高校の男、山岡っていうのか……

そうか、タイミングがよすぎると思ったらあいつが援軍を呼んだのか。

…って事は千尋、俺がボコられる所も見ていたんだろうな…最強にへボだぜ俺。

「あたた…」

「大丈夫か？肩貸すぞ？」

「いらねえよ。お前も自分の事心配しろ」

「お前よりはマシ…痛っ！！」

「ほら、だから言っただろ。じゃあな」

「チツ…折角気を使ってやったのによ……」

俺は体に鞭を打って路地裏から出た。

すると心配そうにしている千尋の姿があった。千尋は俺のほつを見ると走って近寄ってきた。

「純！…大丈夫？怪我ひどいよ？」

「あたた…結構ヤバイ…それよりすまなかった。まゝた手をあげちまったぜ…俺ってホント強い事以外取り柄がないな」

「そんな事ない…だって、純は人を助ける為に…確かに私、本当は喧嘩嫌いだし、日本の法律的に手をあげたら負けだけど…でも純は力の使い方を間違っていないよ。人を守るっていい事だと思うよ？」

嗚呼！なんて心が広いお方でしょう…
もうダメ、俺のハートが真っ赤に燃える！！

厨二臭いと言われようとそれは事実だから仕方ない！！千尋がこんな寛大なお方だったとは俺もう幸せすぎて今死んでも文句は絶対言わない！

そういう自信がある。

「あ、ありがとう！」

だがダメだ！

なんというか…緊張して普通にされてられませ〜ん！！

「あ、そうそう。さっき山岡君から純に伝言があるって、それ、伝えていい？」

「えっ？うん」

山岡から伝言？
なんだろう？

「僕は勇敢に戦った桑園高校の戦士、橋立純に惚れました。本気で。お付き合いです。どうぞ」

「…はあ！？」

う、嘘だろ？

あいつ、絶対真面目キャラだと思ってたのに…その言葉ってアレだよね？絶対あつちの方向ですよ？まさか…冗談でしょ？

part 29 ・男勝政戦います（勝政視点）

…夏休みに突入してから1日目。
明日は夏祭りがあるらしい、純の姉さんや純の知り合いも来るらしい。

俺も行く予定だ。

ちなみに昨日の怪我はまあ思ったよりは大したことはなかった。それより純が重傷らしいが……

しかし今日は暇だなあ………うちは親父が土建屋で母は専業主婦、家は裕福ではなくぶっちゃけいって私立高校に通うのは厳しい状況。だから大学進学もどんなに勉強してもお金の都合で無理な可能性が高い。

どうしようかなあゝ俺。

…ところで今回俺視点？もしかして俺って第二の主人公的なポジション？今 から俺はでいとうと伊藤のようなポジションかなるほど……まあ俺はあいつほど保守的じゃないし、正直に言つと半端な人間だけ。

…しかし暇だ。外でもほつつきあるくとしようか……

「お母ん、俺ちよつと出掛けるわ」

「そお？晩御飯までには帰ってきなさいよ」

「はいよ」

つといて俺はガラガラと玄関の扉を開けた。

ちなみにうちは築50年のオンボロハウス、どう？貧乏人でしょ俺
って（涙）。

…ちなみに妙高の家はわりと近い場所にある。かといって特別親し
いわけでもないがあくまで友達程度、それ以上のお付き合いはない。

ちなみに俺、最近バイクの免許を取った。

そして親から金をだまし取ってつい最近バイクも勝った。今日もバ
イクのサウンドを聞こうと思った…が！！！！

「ああ！てめえら何してるんだ！！」

「げえっ！おい逃げるぞ！」

「へっ！バーカ！！高校生の癖にバイクなんて乗ってるからだよ！
べっー！！」

「こ、この！！てめえら中坊だな！！待てゴルア！！」

俺のバイクは無残にミラーが両方とも取られてタイヤもパンクして
いた。

そして犯人は…悪ガキの中坊だ、畜生絶対許さんぞ中坊ごときが調
子に乗りやがって！！…っというわけで中坊2人を追いかけている
と近所の公園に到着した。そこには中坊が12人群がっていた。

「おいきちやっただぞ？」

「てめえら…人様のバイクぶっ壊すとは…中坊にしては中々悪い
事やってくれるじゃねーか」

「うるさいぞ！！…少しぐらい早く生まれたからって調子に乗るな！

しかも1人でノコノコと馬鹿だなあ」

「やっちまおうぜ！」

人の話を聞かずに中坊は俺に襲いかかってきた。

うーん、どうしましょ？相手は一応中学生だしなあ…本気出したらやっぱり格好悪いよな？でもこの人数だと中坊でも苦戦しそうだし。よし、手加減は無用って事にしておこう。とにかく有り金はたいて買ったバイクの仇だ。

「って！この！！中坊めえ！！」

俺は中坊を次々となぎ倒していく。

生き残りの2人は俺に怯え始めていた。

「や、やべえぞ……こいつ市川の庄司より強いかも……」

「お、おいお前！どこの高校だよ！！」

とりあえず中坊の質問に答えてやるとするか。

っていつかなんで俺が高校生だって解るんだろ？見た目かな？

「俺は桑園だ」

「えっ？…す、すると……」

「おいやべえぞ！あそこって確か……」

「きよ、狂犬橋立の！？」

「「ごめんなさ〜い!!!」」

…あつ、逃げた。

…しかも純の事知っていてなんで俺は知らないんだよ…あいつが勝つ理由の50%ぐらいは俺のような気もするんだけど。昨日だって俺が加勢しなかったら純の奴、病院送りになってたくせに。

しかも純の奴、ホントに望んで喧嘩しているわけじゃないなあ、不憫な奴だぜ、純も。

だが俺もアレだ、ホント俺って目立たないよな…いつそツツパリになってみようかな?…っと思っただけど勘当されるのは嫌だからやめようとすぐに思った。

「あれ?日向じゃん…ってなにこれ?」

「ん?妙高?」

何故かそこに私服姿の妙高が現れた…っといつても珍しい事ではないが。

妙高の興味は俺よりもむしろ伸びている中坊だった。

「聞いてくれよお、俺のバイクをぶつ壊すもんだから成敗したんだぜよ!」

「うわ…中学生相手に本気出すって…あんたって本当に大人気ないね」

「う、うるせー!有り金叩いて買ったバイクだったんだぞ!?お前だって折角描いた漫画の本を破られたら怒るだろ!」

「そりゃあまあ…そうだけど…でも流石に殴りこみはしないと
思
うよ」

「うっ！…んん…」

は、反論できない！

確かに普通殴りこみにはいかないよな…純じゃあるまいし。

「…まあここじゃなんだし、そこ座る？」

「お、おう」

っというわけで2人でベンチに座った。

うくん、こういうのも初めてですな。妙高はスケッチブックらしき
ものを取り出した。

「なんだそれ？」

「いつもの事ですよ、絵だよ今度の漫画の背景の元ネタにでも使お
うと思ったの」

「なるほど」

ホントこいつは漫画が好きだよな。

うくん、やる事がない、確かに妙高は達筆で絵も相当うまいが見て
いるこっちはあんまりおもしろくない。缶ジュースを買いたい気分
だがなんかここから立てない空気が…

「…なあ、妙高」

「何？」

「暇」

「…あっそ」

「ひどくね！？その反応！？」

「ベーツにー」

な、何なんだこいつは？

…帰りたい……っと思っただらなんだか向こうからガラの悪そうなヤンキーどもが歩いてきた。どこかで見た顔だなっと思っただらあれは伊藤先輩と庄司じゃないか、あとは知らんが多分庄司側の人間だろう。

…どうでもいいけどなんでこんな所に伊藤先輩がいるんだろ？

しかも夏休みのはずなのにお互い制服だし。

「…ねえ日向、あれ日向と仲良しのヤンキーさん達じゃないの？」

「ちっげえわ！！俺はああいうのとは一時も仲良くした事ないわ！！」

「そ、そうなの！？…ちょっと意外」

意外って……なんじゃそりゃ？

俺ってそういうキャラだと思われてるの？それよりも相良vs市川高校か…面白い事になりそうだ。

「てめえが伊藤かよお…馬鹿だねえ1人で来るとわ……」

「ふっ、教えてくれたんだよ。うちの奴がよお、喧嘩はタイムン張るもんだってな」

「なんだと？っじゃあこの俺とタイムン張るかコラ？」

「上等じゃねえか」

「やれやれ庄司さん！！！！そいつ倒して狂犬橋立おびき出すぜ！！」

「おいおい…ネタばらしするなよ…」

つまり、伊藤先輩を人質にとって純を呼ぼつていうのか。

妙高も流石にやばいと思ひ始めたのかこっちを見てきた。

「ね、ねえ…あれヤバイんじゃない？」

「うーん、あれって確かうちの番長の伊藤先輩だったっけ？…どうだろ？」

「……まあ、ある意味おもしろいかも」

ちよ！妙高…もしかすると漫画感覚？

流石です、きつといいネタになるでしょうこの抗争は。

…おっ、始まった。伊藤先輩vs市川の1年生ながらも番格に上りつめた庄司という男！どちらが強いでしよう…ってまあ想像はつく。炊事遠足の時、純でもそれなりに苦戦した相手だし、多分伊藤先輩じゃ勝てないでしょ。

「てえい！とりやつー！」

「ううっー！」

完全に伊藤先輩が押されていた。

「ハア…ハア…どうしたそれでも桑園の番格かよお…橋立純とかって奴はもつと強かったぞおらあ！」

「バーカ！タイマンで庄司さんに勝てるわけねーだろー！」

俺はただその戦いを見ていた。

確実に伊藤先輩が押され始めている、そこで妙高が俺に話しかけてきた。

「ね、ねえ勝政。あんた喧嘩強いんですよ。やつつけちゃいなさいよあの庄司とかいうヤンキー達」

「ンなこと言っつてねえ。相手何人だと思っつてるんだよ……っつておい妙高ー！」

妙高が突然ヤンキーどもの中に飛び出していった。

ちよつと待て、あいつつてそういうキャラだっけ？なんか見た目はあんまり強そうに見えないけど…っつてこうしてる場合じゃねえ！このままだと妙高がフルボッコにされるぞ多分。

っつというわけで俺も飛び出したが思いのほか妙高は善戦していた。

「ぐっー！」

「……」

無口で戦う妙高。

流石に1発やそこらじゃ倒れないが技のキレはいい、あいつあんなに強かったっけ？

それはともかく、このままだと俺が何もしていない事になる…っというわけで突撃い…！！

「な、なんだてめえは…！」

「うるせえ…！」

バキィッ…！！

俺の拳がクリーンヒット…！！

相手は1発で倒れた…うん、やっぱり男の俺は妙高とは腕力が違うようだ。

「て、てめえらあ…！！」

庄司が俺に向かってきた。

俺は庄司の攻撃を防いだ…こいつ、スピードはかなり速いがパワーは並だ。俺は妙高と伊藤が先輩雑魚共と戦っている間に庄司との戦闘を行った。かなり速い、俺の防御が間にあわない、だいたんだメージが深くなっていたがそんな時、突然庄司は殴る蹴るをやめてきた。

「て…てめえそういえば炊事ン時に橋立と一緒にいた奴じゃねえか」

「久しぶりじゃねーか、パンチプレゼントするぜ…！！」

「いらねえよ!!」

庄司は至近距離であったのにもかかわらず俺のパンチをかわした。相当速いぞ。

しかも伊藤先輩との戦いで少しは傷ついているはずなのに今まで戦った誰よりも強い気がする。こいつ相当の腕の持ち主だ。おそらく西園寺の沢村よりも手強い。

「俺はよお!!負けるのは大っ嫌いなんだよお!!!!だからさつさとくたばれよ馬鹿野郎!!!!」

「馬鹿はてめえだ!!さつさと寝ろ!!!!」

互いに顔面のパンチが入った…っが俺のほうが強烈だったらしく、庄司は怯んだ。

その隙に俺は頭突きを加えた。

「フラついてんじゃねえよ!!!!」

ゴンッ!!

「…あ…あ…」

庄司はその場に倒れこんだ。

俺は後ろを振り向いた、するとボロボロの伊藤先輩と無傷の妙高がいた。

「ちょっと日向、もう少し簡単に勝てないの?」

「しょうがねーだろ…ほら、あいつ炊事遠足の時俺らと揉めた奴だよ。純でも苦戦するんだから楽に勝てるわけねーだろ…それより妙高、お前ってそんな強いキャラだっけ？」

「うん、ちよっと暇な時間に格闘技を？」

全然そういうタイプに見えない。

そうか、わかったぞ。妙高はきつと並の不良相手ならかなり強いけど庄司クラスよりは弱いというキャラか。

「ま…待てやコラ…俺と勝負しろよお…」

ボロボロの庄司は俺にそう言う。

「バーカ、市川に帰れ。それからよ、純はもっと強いからな。相手するんだっらそれなりに覚悟しろよ」

「……」

庄司は座りこんで黙ったままだった。

俺と妙高は1人去る伊藤先輩を放っておいて別な場所に行った。

「あゝあ、日向ボロボロだね。明日どうするの？」

「そりゃ行くに決まってるだろ？」

「純の知り合い、女の子らしいから引かれるかも」

「…別に関係ねーよ」

「そっか」

何故か妙高は笑顔だった。
ホント何なんだろう？

part 29 ・男勝政戦います（勝政視点）（後書き）

おまけ：

「ねえ作者、俺って一応主人公だよな？」

「多分、な。まあどうでもいいじゃないか純よ」

「…俺、名前しか出てきてないんだけど」

「そうだな」

「…もしかして勝政に主役交代？」

「知らん」

「ひどい…こゝこのままではタイトルが日向勝政の日常になってしまっ…」

「まあ一応主役なんだから頑張る事だな」

「一応…ですか、もはや作者から受けている俺の扱いがひどい…うわっん…！」

「私も一応位置付け的にヒロインなのに出番が一回もないんだけど」

by 千尋

あゝ、あじいいいいゝ

…でも今日は夜に夏祭りに行くことになってるんだっけ？

はあ、あじいゝ…もうだめだあゝ

俺はベットで伸びていた。

上はシャツ、下は半ズボン、畜生ここつて一応日本でも北のほうだよな？何故にこんなに暑い……

ロシアにでも行こうかな？……いや！冬は死ねるほど寒いからやめておこつ。

…それにしてももう11時か……なんでだろう。

最近はあるまり遅くまで寝てられない、体が慣れてしまったからか？とりあえず一階に下りるといるのは爺さんだけだ。

「おう純」

「おはよ」

「…どうでもよいが、あまり遅くまで起きてるではない。休み明けが辛いぞ」

「大丈夫だって。一週間前には調節開始するからさ…えゝつと」

俺は家の中の冷蔵庫を漁った。

とりあえず牛乳でも飲もうかと思ったから。

「…ありゃ？」

「おお、そういえば牛乳切らしていたわ。悪いが買ってきてくれんか？ほれ、金」

「…はあ……」

「…うちって一応喫茶店やってるんだよね？」

「…っことは牛乳とかって家の中にも充実していてよさそうなものだけど……どうでもいいが冷蔵庫ガラランじゃないか…普段飯ってどっから出てくるんだ？まさか店から持ち出したものとか言っんじゃないだろうかと本気で心配してきた。」

「仕方ない、ついでに夜のお摘みも買っとするか。」

「…っというわけで携帯と財布を持っていざ出陣！」

「…なにこれ？」

「え〜っつと、状況を説明すると前にどこかで会ったようなヤンキーさん3人が伸びていて、そのヤンキーさん達を見下すように突っ立っている姉ちゃんがいて……」

「…あれ？純どっか行くの？」

「買い物、爺さんに頼まれた」

「…そうなんだ」

「…そうなんだじゃないでしょ。」

このヤンキーさん達はなに？

「あのさ、これなに？」

「不良3人」

「見ればわかるけどどうした？」

「倒した」

ですよねーそれ以外考えられないですよー。

「なんかさ、この人たち稲川高校って所の生徒らしくて純の事探してるみたいだったよ。なんかやったの純？」

「いえ、特に心当たりは…」

ありまくりなんだけどな。

確かつい最近大人数で俺に襲いかかってきたヤンキーさん達だ。そんでもってとんでもないホモをついでに助けてしまったんだっけ？よかったあメールアドレスとか教えなくて。

もし教えていたら今頃結婚だとかやらないかだとかって毎日送られてくる気がする…

「ふーん、まあ少しは自重したら？今どき不良も流行らないし」

「俺不良じゃないんですけど？」

「わかってるって。でも喧嘩を自重しなさいって事。喧嘩ばかり

やっているとこの3人と同類に見られるし、いつまでも襲ってくるよ？純の噂を聞いて純と戦いたいっていうヤンキーさん達が」

それはそれで困る。

… ってか前者は既に手遅れだけどな。もう学校内でも半分以上には不良だっっていう風に見られてるし。でもそれが災いしてか以前よりも女子にモテるようになったような… なんで？暴力って嫌いなんじゃないの女の子って？

… もしかして見た目と体力の問題？

… あんまりモテたくもない、俺は千尋一筋ですから！！

「ま、気をつけなさいよ」

「へいへい」

俺は気の抜けた返事をして店のほうに向かった

近くに結構大きいスーパーがあるんだ。ある意味便利でしょ？

っというわけでスーパーに到着。

ウィーン！

やっぱりいつも賑わってるなあ。

とりあえず俺は買うものを買おうと… え〜っ、なんだっけ？牛乳と夜のお飲みだっけ？

そっだ！そっだ！たはは、っというわけで飲料水コーナーで突撃イ
！！

ドンッ！

ITEE!!

誰かに追突された。そして俺は床に転んだ。

…こんな事かんのはどこかのヤンキーに違いない…

「おいてめえ!!どこ目えつけて歩いてんだ!？」

あゝあ、言っちゃったよ。

でも決まったしょ？我ながらちよつとかっこいいかも。

「俺様に喧嘩売るとはいい度胸じゃないか？えっ!？ガキよお」

「あ…ありゃ？」

素晴らしきスキンヘッドに真つ黒なサングラス、そして白いスーツに黒い革靴。さらに高そうな腕時計と…ちょ！これってやつぱあれ？あれだよね？

「おいなんかいったらどうだ？えっ!？」

「やややや…やつちゃんでしたの……」

「おい聞ってるんかいガキッ!」

「ひいひいごめんなさいごめんなさいごめんなさいゴメンナサア
アアアアイ!!!!!!」

「チッ、言葉に気をつけるよ……」

ふう〜、やつちゃんは去っていった。

こ、怖えええええ！！！！！！おしつこちびる所だった…

俺だつてヤンキーに喧嘩は売ってもヤクザに喧嘩を売るほど馬鹿ではない。そうだ、ヤクザとは関わらない方がいい、それが一番いい。

やつちゃんとの抗争勃発未遂事件があつたけどまあ無事に買い物は済ませた。

帰ったら…またですか……

「おうアママ！さっきはこいつら可愛がってくれたそうじゃねえ
ギヤアアアア！！！」

はいフルボッコお。

流石姉ちゃん、半端じゃなく強い。つというわけで俺は姉ちゃんとヤンキーさん達をスルーして家の中に入った。

「おお、おかえり。買ってきたか」

「冷蔵庫いれとくぞ」

「おっ」

爺さんは今日もテレビを見ながら話してた。

いつもの事だけどこの人はテレビとか以外に楽しみはないのか？

「あ、そうだ純。今日夏祭りだろ？」

「まあそうだけど…」

「ヤクザには気をつけな」

「は…はあ…」

忘れたかったのにやっちゃんとか言わないでくれ……

もうあれ死ぬほど怖かったんだからな！！俺は極道とかとは一切関係ない関わりたくない、よし！！ok！

…夜。

今は某神社付近、確かこの編だった気がするんだが…どこだろう？

…お、いたいた。勝政発見！！

「おい、どうした？」

何か知らんが勝政はボロボロでした。

「ん？ああ昨日な、市川の番格と喧嘩して勝ったんだけど…いって
！」

馬鹿かこいつは？

まぐたうちの高校の名前売って、誰か攻めてきたらどうするんだよ。
その隣にはみよんがいた。服装は普通だった。

「ほんと、私に加勢しなかったらフルボッコだったと思うよ」

「お前が勝手に潜入したのが俺参戦の原因だろ！」

「…日向君も自重しなさいよ」

「俺だけ！？」

…よくわからない。

どうでもいいけどみょんが加勢って…そんなに強いキャラだったっけ？まあ姉ちゃんが呆れているのは言うまでもない。

さて、後は千尋と香椎さんだ。

…あつ、いたいた。

「オッス」

「あつ！純」

「久しぶり」

これでメンバーは揃った。

夏祭りだけにいろいろある。金魚救いとか射的とか。

「はっ！？」

千尋はなんか声をあげて射的のほうを見た。

そこにはいろいろな景品が並んでいた…っていうかそれは当たり前前か。

「ね、ねえ。純」

「なに？」

「あ、あれ！あの…あの武将風の奴ほしい」

そういえば確か戦国武将とか好きだったってメールで見たことがあるよ

うな気がする。

しかし一回200円かぁ……5回で1000円…高いぞいね？どつするべきかな？

…しかし株を稼ぐ為にはやるべきだな、うん。

つと決断した瞬間だった。

「あ、私やるうか？」

ね、姉ちゃん！

邪魔さんぞ！！

「はいはいはいはい！是非ともやらせてください！」

「…あんた随分気合入ってるね、じゃあやってみなさい」

「ようし！おっさんほれ！」

「あいよ、どれで撃つ？」

おっさん優しいね、銃を選択させてくれるのか。

っていうか普通射的に銃選択するようになってあったけ？まっ、いいか。

とりあえずこの村田銃を……

自慢じゃないが、射撃は俺の得意技。

どれぐらい得意かって？そうだな、例えるならフィンランドのシモ・ヘイヘレベルだぜ！！

「なっ！？日本のドラマでは見る事が出来ないほどの完璧な構え！」

みよんですら驚き。

俺ってすごいしょ？勝政なんか主役を譲るか！！

照準を合わせた俺は引き金を引いた。弾丸は高速で発射され、標的へと命中した。

「なにい！？初弾命中！？」

「す、すごい！」

「おうあんちゃんなかなかいい腕だな。ほら、景品だ」

よし！何かよくわからないけど武將をゲット。

それを千尋に渡した。

「あ、ありがとう」

それをいう千尋の顔は少しだけ赤かった。

中々いい感じだ。それにしてもまさか初弾命中とは…10000円浪費は覚悟していたんだが…これなら俺、戦争いけそうだよ。行かないけど。

part 31・夏祭り 後編

そのあと俺は千尋と香椎さんとで行動した。
なんでかって？成り行きだ。

「橋立君、焼きそば食べない？」

「あ、私も食べたい！」

「そつえば腹減ったな、よし食うか」

俺は店に行き、3人分を頼もうとした…っが！！

その店、問題アリだった！なんと店主が今日スーパーで俺とぶつかったやつちゃん！怖くて行けねえよ……

「わ、悪い千尋と香椎さん。あつちの焼きそば食わないか？」

「えっ？何で？」

香椎さんは俺の突然の言葉に疑問を抱いている。

まあ普通の反応ではある。しかし困ったなあ…どう言い訳しよう？千尋も不思議そうに俺の顔を見ているからまともな言い訳じゃないとダメそうだしなあ。

…よし。

「あつちのほうがつまいから」

「そ、そうなの！？それってホントなの！？」

「ホントだぞ千尋？俺はよく夏祭り来るから言えるけどあっちのほうは絶対うまい！」

「そ、そうなんだ」

「じゅ、純って実家の実家だけにそういうのは詳しいんだね」

「そりゃもちろん！さーあって行くところか！！」

ふう〜、これでやっちゃんにしばかれるルートは回避できた。

まあ別な店の店員もどうせやっちゃんなんだろうけど…っーか、夏祭りとかの屋台のおっちゃんってみんなやっちゃんじゃね？っとなふと思いました。

っというわけで別な店で焼きそばを購入、案の定ホントにうまかった。

千尋と香椎さんの評価も高く、俺の言い訳作戦は戦略的勝利に終わった。

「あれ？ねえあれさ、千夏と紅音じゃない？」

「あ、ホントだ」

「千夏？」

「俺らの友達、あの二人も来てたのか」

…しかし様子が変だ。

伏見を守る形で千夏が前に出ていて、千夏の正面にはガラの悪そう

な金髪ロングで厚化粧の女がいた。
揉め事ですかあ……

「純、助けに行く？」

「うん、助けに行ったほうがよさそうかもな。よし行くか」

しかし香椎さんをどうしよう？

「あれえ？純と伊吹じゃん。夏祭り来てたの？ンモオー僕ちんも誘ってくれてもよかったのに」

おっ、丁度いい時にチャラ男が来た。

「悪いチャラ男、香椎さんを頼んだ」

「えっ!？」

「あつ！ちよつと橋立君！？伊吹さん!？」

ごめんなさい香椎さん！

後でソフトクリーム奢ります!!

…あ、成り行きで干尋連れてきちゃったけどよかったんだらうか？
そつえば千尋って自他共に認める運動音痴だったような…ま、い
いか。今更引き下がれないし、こういう展開だと絶対引き下がらな
いだらうし、何より相手は女一人、話し合いで解決するだらう、多
分。

「ねえ純、やっぱりさ。いきなり現れるのはアレじゃない？」

「…言われてみれば」

「じゃあさ、近くによって少しだけ盗聴して様子を窺おう？」

「そうだな」

つというわけで近くにあった公衆トイレの陰に隠れて3人の会話を聞くことにした。

盗聴？まあ気にするな、千尋本人も言っちゃったし、この場面で聞きたくならないわけがないじゃないの。…しかし何を話しているんだ？……ようやく聞こえてきた。

「アア？だからそつちの後ろの女でしょ？ぶつかってきたの？」

「何度言えばいいんですか？貴女が後ろから追突してきたんでしょ？」

「ああもつ！ムカつく女ね！！…あつ！隆夫ちゃん！」

金髪の女は隆夫とかいう金髪ロングで髭もちよっと生えている頭の悪そうな男に甘え始めた。彼氏が。

しかしこれじゃ千夏側が不利になるな、男の勢いって凄まじいからな。

「どうしたんだ恵美？」

「この女ども私に喧嘩売ってきたのよ」

「ちょ！売ってません！」

「だからさあ隆夫ちゃん。東京一のヤンキー高校出身のバリバリヤンキーでしょ？喧嘩売ってきたんだからやっちゃってよ、このウザ女どもを」

「ほお…てめえら俺の恵美に喧嘩売ったってホントかコラ？」

隆夫とかいう男は間接を鳴らしながら怖い顔をして千夏達に接近した。

女にも容赦しないタイプらしい。

「ち、違います！売ってません！」

その背後で恵美が自分の手で自分の顔を殴っていた。

そして…

「隆夫ちゃんこの顔の傷見て？こいつらがやったんだよ？」

「あつ！…！…てめえら許さんからな？」

「えっ？」

「言っとくけどなあ俺は恵美以外の女には容赦しねえからな覚悟しろよコラっ？」

さらに間接を鳴らして千夏達に接近した。

このままだとヤバいぞ？

「おおじめ」

隆夫とかいう男は千夏の肩を掴んだ。

「やめてください!」

パシッ!

「おっ?...このアマア!」

「きゃあっ!」

千夏に顔にビンタが入り、千夏は怯んでしまった。さらに後ろの伏見は恐怖のあまりか非常に怯えていた。隆夫さんマジギレ。どうしましょうこれ?

「じゅ、純。これってヤバくない?」

「うん、ヤバいね。時に千尋さん?」

「なあに?」

「ボクチン暴れてもよろちーでしょうか?」

「許可します!」

千尋から許可をもらったので俺は……突撃い!!!

「おらあ!」

「ぶびっ!」

俺の飛び蹴りで一撃ノックアウト!!

「キヤアア隆夫ちゃん!! アンタ達ちよつと待ってな! 痛い目見るからね!!」

つといて金髪女は隆夫を引きずって逃げていった。
千尋も走ってきた。とりあえず俺は千夏達のほうを見た。

「き、きーちゃん! 今ボク超ピンチだったんだ! ありがとう」

「たまたま見かけただけだ。それよりまだ油断しないほうがいいぞ?」

「はい?」

後ろを見ると5人の悪そうな男達とさっきの恵美が現れた。
なんなんだこいつら?

「おう! 俺達の友達を甚振ってくれたのはてめえらか?」

パーマを掛けたロングの男がそう叫んだ。

「お前らこそ何なんだよ? この2人に変な言いがかりつけて絡みやがって」

「俺ら東京から遊びに来たんだ。俺は吉川だ!! こいつらは全員俺の友達だ!! 隆夫の仇はとるからな、覚悟しろよガキ!」

そう叫んだ直後吉川とかいうのが殴りかかってきた。

…いてっ！派手に動いたから2日前の傷がひらきそつであります！！

「だ、大丈夫純！？」

「あたた…き、傷がああ…ごめん千尋、姉ちゃんとか誰か人呼んできて」

「う、うん！」

「あと千夏と伏見！とりあえず逃げろ」

「えっ？あ…うん！」

「逃がすかボケエ…ぐおっ！！」

ニツト帽を被った男にタツクル！

やった！怯んだ！！

…ああ、痛いよお体痛いよお。

やる前から痛いなんて…今日は絶対喧嘩に勝てません。

「おらあ…！！」

「くたばれガキイ！！」

「二度と立てねえようにしてやる…！！」

散々殴られた拳句地面に倒れこみ、俺は背中を蹴られまくり中。

もう戦闘続行不能、しかもこの前の戦闘での傷もあるから余計に攻撃が痛い。このままだと俺戦死するかも。その時は皆で「純は壮絶

なる戦死を遂げたるものと認む！」つと行ってやってください。

「おい」

「…アア！？なんだてめえは！？」

…誰？

首まで痛いけど痛みを耐えて首を回転、俺の目に映ったのは何故か制服姿の隼鷹の生徒ども、その中には相良の姿があった。

「邪魔だ、どけ」

「なんだとコラ！？高校生が俺らに喧嘩売るんか！？」

久々に隼鷹の奴らを見たが相変わらず皆悪そうだ。

中でも相良は飛びぬけてるな。

「だから邪魔だつとんだろ？日本語通じねえか？てめえら聾かよおい？」

「てめえらこそ瞎なんじゃねえのか？俺ら東京出身のバリバリに田舎モンが喧嘩売るなんて笑える話じゃねえかよ」

「なんだとコラ！？」「やるかおい！？」「上等じゃねえか東京モン！！」

「田舎モンが調子乗るなよコラア！！」「誰に口きいてるんだおい！？」「年上ナメんなよボケェ！」

あゝあ、もはや都道府県対抗ヤンキー同士の抗争になっちゃってる

よお。

俺もうしーらね。

「やるぞお前ら！」

「」「」「」「うおおお！」「」「」「」

「ガキ共！一瞬でたたんでやる！」

「」「」「おう！」「」「」

あゝあ、凄まじい抗争になった。
もう戦況がよくわからない。

「純！」

千尋の声だ。

千尋が援軍を連れてきたぞ！その援軍とは勝政とみよんと姉ちゃんだった。勝政は怪我人だから戦力になるかは微妙だけどみよんは強いらしいし、姉ちゃんは多分この地区じゃ最強だと思う。でももう加勢する必要もないほど戦場は滅茶苦茶になっていた。

「…あれ？純、これってもしかして？」

「…何か、知らないけど東京のヤンキーさんと隼鷹高校の抗争になっちゃいました」

「…今のうちに帰る？」

「…そうですね」

「ほれ、掴まれ」

「サンキュー」

俺は勝政の肩を借りて立ちあがった。

そして全員でこの場を去った。ついでにいうと、何故か戻ったらチヤラ男と香椎さんが超仲良しになっていた。何があったんだ？まあそれはともかく今はこの場から離れる事が先決、っというわけで祭会場の北側に向かった。ここではなんか人が踊っていた。

「はあく、疲れたあ……結局どっちが勝ったんだろうな？」

「どっちでもいいだろ？東京の悪が勝とうが隼鷹の不良が勝とうが」

「それもそうだな」

勝政とそんな事を話していると千尋が俺の所にやってきた。

「純、大丈夫？」

「ああ、まあなんとか……あたた！！」

「ちょー！……やつぱり帰ったほうがいいんじゃない？」

「……そうさせていただきます」

うん、流石に今回はきつい。

「……あ、私送ってくよ」

「えっ？別にいいよ」

「1人じゃ危険でしょ」

「じゃあ悪いけど千尋ちゃん、純の事家まで送ってってあげて」

姉ちゃん勝手に許可するなあ！！

「はい、行こう純？」

「お、おう」

つというわけで俺は千尋と一緒に祭り会場を離れた。

夜道を2人で歩く、知らない人が見たらカップルに見えるかもしれない。これはもしや夢のような出来事なのでは！？…まあ、痛いし、不純な事を考えるのはやめとこつ。

「…大丈夫？」

「まあ、なんとか」

千尋はあまり嬉しそうではない。
やっぱりこれって俺のせい？

「あんまり楽しめなかったね。踊れなかったし」

「踊りたかったの？」

「だって折角でしょ？だから浴衣着てきたのに」

そういえば千尋は可愛らしい浴衣を着ていた。
しかも高そう…流石は実家が財閥。

「ごめん、何か俺が飛び出したせいで面倒な事になったみたいだし…」

「いや別に…私が許可しちゃったから…でもあのままだと千夏達
が危なかったし…ホントにごめんね」

「別にいいよ、千夏達は助かったわけだし。ボコられたぐらいどう
ってことないよ。慣れてるし」

「でも…」

千尋の表情は暗い。

やっぱり自分が俺の出陣を許してしまった事に罪悪感を感じている
んだろう。俺も馬鹿だなあ、話し合っても解決しそだったのにい
きなり飛び出して…はあ、俺って馬鹿だ。

「このまま…このまま純が喧嘩してたらいつか純が死んじゃうよ…」

「死ぬのは大げさっしょ。まあ喧嘩しないように気をつけるから心配
しないで」

…つかいってもしてしまっただろうけどな。

西園寺の沢村や市川の庄司みたいに俺の事を敵視して襲いかかって
くるヤンキーさん達がいる限りは。俺だって本当は喧嘩なんて好き
じゃないし、そんな事しても精々味方ヤンキーから頼れるぐらいに

しかならない。

「…でも、純の周り、敵だらけだよ？」

「そうだな」

「大丈夫？」

「その為の強さだろ？自ら喧嘩を売るような馬鹿な真似はしない。千尋なら解ってると思うけど、俺、不良じゃないからね」

「…うん」

小さく千尋は頷いてくれた。

…でも多分わかってくれと思う、そういうキャラじゃないってのは多分千尋も知っているはずだ。

「…橋立」

ん？

後ろを見たらボロボロの5人がいた。そのうちの1人は相良だ。

「あれ？相良ちゃんじゃん！」

「相良ちゃん言うな！てめえの代わりにとんでもねえ奴と戦ってやつたんだぞ少しは感謝しろ！」

「はいはい、それなりに感謝はしてるから心配すんな」

「そうかい、まあしっかりしろよ、狂犬橋立、てめえ叩きのめすの

は俺だからな。じゃあな、行くぞおまえら！」

「……オツス！」「……」

相良達は気合を入れて闇に消えていった。

…敵なんだか味方なんだかよくわからない奴らだ。ただ、あの東京から来たヤンキーどもは攻撃された感想、結構な実力者達だった。そいつらとほぼ互角って事は…俺と戦った時よりも強くなってるんだろうな、相良の奴も。

「…純、お友達いっぱいだね」

「あれはお友達ではございません」

多分、敵です…

part 32・厄介者が行く場所（庄司視点）

ようやく8月かよ…

あゝあ退屈だなあ夏休みつて。

つでもよあ、別に学校来んなどは言われてねえんだよなあ？

進学する真面目さんたちもいるんだからよあ。だから俺は仲間が集うんだよ、学校にな。

…俺誰かって？庄司里吉だ、伊吹って野郎が影を潜めた後、この市川高校の番格に上り詰めた。でも、その後は退屈で仕方ねえ。

俺は刺激のある生活がほしい。だから喧嘩好きなんだよあ。

ホントに退屈だ…だが今日は少しは刺激がある。最近稲川高校つてというのが調子に乗って北区遠征に來てるらしいぜ。生意気だからそいつの番長シメたる事にしたんだ。

反対意見があるけどなあ。

「な、なあ庄司？ホントにやるのか？」

「刺激欲しいんだよ俺は？それともなにか？山田怖いのかあ？」

「い、いやそうじゃなくて…ただ警告だよ！相手の番長はなんでも須藤つてやつでやつちゃんの組長の息子らしいぜ？」

「マジかよ…おもしれえ、つええんだろうなあ？」

「ああ、詳細は不明だけどチャカとか持つてくるんじゃないかねえのか？」

「…いいねいいねえ！おもしれえぜさつさとやりてえぜ！！！」
なんか山田は気に乗れねえらしいけどよ。

俺は楽しみだよ。ヤクザの親分の息子だぜ？どんだけつええんだろ
うなあ？

つつーわけで2時間後、俺は6人ぐらいのグループを作つてスーパーの裏の駐車場に行つた。

「てめえが市川の庄司かあ？」

「っじゃあてめえが稲川の須藤かよ…ただのチンピラじゃねえか？」

「ほお？これ見ろよコラ？」

須藤の奴が出したのはぶつとい針だ。

「市川高校の奴らはムカつく奴らが多いな、全員体に穴あけてやる
うか、好きなとこ言えやコラ？」

…するとなぜか4人は須藤のほうに行つてこつちを向いてきた。
しかもなんかしらねえけど申し訳なさそうな顔で。

「なんだてめえら？」

「へ…へへ！だつて、武器持つてるんですけど？残念だけど俺は須藤
さんの味方しますよ」

「俺もだぜ庄司、大体てめえホントはうぜえんだよ。1年坊主の癖
に番張りやがつてよお？」

つふふふふふ……
いいねいいねえ、いきなり山田以外は裏切りかよ。最高だよてめえら。

「上等じゃねえかよ……」

俺は須藤に近づいて睨み合いをした。

…ヤクザの親分の息子か…おもしれえじゃねえか。

「なんだよ？もしかして怖くて動けないのか庄司さんよお？…そうだなあ、じゃあボコボコにしてやんよ？」

「そのセリフ…そっくり返してやんよお！！！！」

俺は須藤の顔面に裏拳を入れた。

鼻からは血が出ていた。だがそんなのはお構いなしに2発ほどパンチを加えた後に飛び蹴りを腹に加え、さらに横っ腹に蹴りを入れた須藤をぶっ飛ばす……もうおねんねかよ。

さらに俺は裏切り者をほぼ一撃で倒していった。
あとは稲川の奴らだけ。

「ひ…ひひ…ひええ！！」

「須藤さん！須藤さんったら！！」

「逃げるぞ！！」

「おっ！！！！」

……奴らは須藤を引きずって逃げて行った。

……なんだよ……おもしろくねえよ……しかも裏切り者まであの程度の実力かよ……弱いんだよ張りあいがないんだよ、北区のレベルなんてこんなもんかよ……

「あゝあ、須藤って奴ぶつたおしちゃってよかったのか？」

「いいんだよ、調子こいてるだけだしよあ。それより山田、俺っち別ん所いくぜ？」

「はあ？どういうことだよ？」

「張りあいねえからな。沢村の野郎も最近俺っちにびびっちゃって退屈だしよ。もつと骨のある奴がいる場所に行く。俺はもつと刺激がほしい、もつと強い奴と戦いてえんだよ」

「す……すげえ目標だな。まあがんばれよ。応援してるからな」

「じゃあな山田、たまに連絡入れるぜ」

「お、おう」

俺が行くべき場所……

強い奴……隼鷹？確かに番格は強いらしいけど興味ねえよ……俺が会いたいのは狂犬橋立と相棒の日向だ。っとなると行く場所は決まったぜ、さっそくいってみるか。

……っというわけで翌日、俺はあちこちを回った。

奴らを見つけ出す前に……

狂犬橋立と相棒の日向……思えば橋立と日向以外に俺は負けた事がねえ。

あいつら最高だぜ、1発加えれば3発は返してくるような奴らだ。俺が求めてる奴ら、俺が求めてる強さだぜ……待ってるよ。楽しい時間が待ってるからよお。

……ん？

……っへっへっへ……िताぜ。

橋立がよお。

「はあく、おいしかった」

「そ、そうか。いやあしかし千尋のお父さんがうちのケーキ食いたいとは」

「うちのお父さん甘い物好きだから」

「そうなのか。っじゃあよかつたらたまにケーキ送るよ、家族説得して」

「えっ？いいの？なんか悪いよ」

「別にいいって」

仲よさそうじゃねえか……

まあ邪魔するぜ。

「おい」

「それにしてもさ、チャラ男と香椎さんの組み合わせって意外だよ

ね

「確かに…チャラ男めえ、一体どんな術を使って！」

「おい」

「あつ、明日暇？」

「えっ？俺は毎日暇だけど？」

「じゃあ明日花火大会行く？みよんも来るよ」

「よし、暇だし行くか」

「おいコラッ！！」

「うるせえ！さっきから黙って聞いてりゃなんだよ？」

「ようやく反応かよ……」

「やる気あんのかコイツ？」

「御取組み中失礼だなあおい」

「…誰だっけ？」

「純、知り合い？」

「いや？しらねー」

「惚けんなよコラッ！…俺は一瞬たりともてめえの事忘れた事はね

…なんだよ。

橋立の周りって女も強いのかよ……

おもしれえ、超おもしれえよこいつら。

最高だよおい……

俺はその後喫茶店「Hashidate」って店に入った。
しかも電話をしながら。

「…っというわけだ山田…おっ？」

…いたぜいたぜ日向さんがよお。

「っじゃあな山田、後でまた連絡する」

…よし、男3人でつるんでやがるな。

楽しみだぜ日向さんよお。

俺は日向の席の近くに来て日向の事を睨みつけた。

「よっ」

「ひえっ！！か、勝政！！…や、ヤンキーさんじゃん！！」

「ちょ！マジかよ！！…どうすんだよ勝政！お前何やらかしたんだよー！」

「…あつ！おめえは！！…市川の庄司！」

「感激だよ覚えていてくれて…おい勝負しろよ…勝ち逃げすんなよなあ？」

日向は俺っちの事を睨みつけていた。
そうじゃなかったらおもしろくねえんだよ……

「…生憎ここは店内でね。暴れたかねえんだよ。てめえ相手にしている暇は俺にはねえ、純でも相手にしてな」

「…じゃあ大暴れしちゃうぜえ？店中ぐちゃぐちゃだぞオラア！」

俺は日向に向かってそう叫んだ…っがなぜか急に背中が痛くなり始めた。

それどこれか強烈に痛い、なんなんだよお…初めてだぞこんなにいてえのは。

…ようやく気がついた。俺は背中を誰かに殴られた…誰だあ！！！！

…振り向いたらそこには女がいやがった。

「ちょっと貴方！人の店で暴れないでくれる！？」

「うるせえ！女は引っ込んでろ！」

「引っ込んでろ…っですって？表でなさい表！！！！」

「…へっへっへっ…おもしれえ、ブタみたいにしてやんぜ！！」

っというわけで外でこの女とタイマンを張ることになった。
しかし何モンだこの女？

「…てめえ、名前なんだよ」

「橋立朋美、別にいいでしょ」

橋立…朋美？

…ま、まさか狂犬橋立の姉か妹か！？

…そりゃあ強いわけだ。いいじゃん、いいじゃねえか。おもしれえじゃねえか。

「へっへっへ…行くぜオラア　なにいつ！？」

な、なんだこの女！？俺のパンチをあっさり回避しやがった。

しかも瞬時にして背後に回り込んで絞め技をかけてきやがった！

「スピードは中々のものじゃないの不良！でも私にたてっこうのは10年早い！」

「あ、あだ！あたたたたたあ！！！！…うう…」

「もう店内で暴れないでください！まったく…」

なんだと？俺がものの数十秒でノックアウトだと？

…っふふふ…っふふふ…女は去っていきやがった…

「…ツワツハツハハハハハア！！！！…山田あ、俺居場所みつけたぜ。桑園行ってやるよ…ツフフ、アツハハハハハ！！！！！！！！！！」

っつーわけだからよお。

夏休み明け楽しみにしてくれよお？俺っちも桑園行くからなあ。

part 32・厄介者が行く場所（庄司視点）（後書き）

・庄司里吉

『てめえら最高だぜえ：死ぬ気でかかってこいよお』

生年月日：1993年11月26日

身長：167cm

趣味：喧嘩。

特技：飛び蹴り

特徴：元々市川高校の番格であったが「強い奴」を求めて桑園に転校してきた

筋金入りの不良。実力は高く、純や勝政ですら苦戦するほどの実力を持つて

いるが純や勝政よりも小柄だからかパワーが他者に比べて劣っている。

それでも恐ろしく強い奴で転校後も二人との再戦を強く望んでいる。

好きなタイプ：可愛い子ならよし！

得意科目：学力は多分純レベル。体育だけは得意だが真面目にやらない。

苦手科目：いつもテストの点数はギリギリ。

part 33 ・ 久々の学校（今から通常通り橋立視点だよ〜ん）

あゝあ、夏休み明けから1週間。

俺はようやく家から出て学校に行くことができるぜ。

なんでって？

詳しくは文化祭編見ろよ…俺、香取ぶん殴っちゃったし。

結局香取は懲戒免職にされて警察沙汰をしている。まあセクハラしたんだからただじゃ済まされないだろうとは思っていたけど…それにしても香取が逮捕か。世の中何が起こるかわかったもんじゃないな。

…しかし、それはともかく…ああ、この前の花火大会、楽しかったなあ。

振り返れば千尋といっぱい話した。全然進展なかったけど…

この1週間の停学…ホントにつまんなかった！だって…千尋がいないんですよ！？

…しかし今日からは違う。学校行けば千尋がいる！

俺の大大大大好きな千尋がいる！…考えただけで楽しみで仕方ないぜ。

ぐふ…ぐふふふふふ！…！…すんません、きもいつすよね。ごめんなさい。

学校到着！靴を履き替えて、階段を上って廊下を歩いて教室に入
て…そこは天国！

「うっす…！…ってあれ？」

「よお」

…なんか、どこかで見た事あるような奴が…
つい最近見たような？…誰だっけあいつ？そう疑問に思っていると
後ろから彬良が話をかけてきた。

「あつ！純聞いてくれよ！こいつ転校生なんだけど生意気な奴でさ、
番長の伊藤先輩やその仲間、拳句の果てには俺までシメられたんだ
よ！ちよつと…狂犬橋立って恐れられる実力でシメてやってくれよ」

転校生？

…ああ！！思い出した！！この前千尋にゴミ箱で撃退されたところか
のチンピラ！それ以外は思い出せないけど…こいつ転校生だったの
か。

「てめえまだ思いだせねえのかよ。前の市川の番格だぞコラ？」

「…ああ、庄司かあ！元気してた！？なんで転校してきたの！？」

「てめえ…」

庄司は急に席を立ちあがって俺の目の前にやってきた。

俺と庄司は睨み合った。まずいな、このままだと喧嘩展開だぞ。

「…うつとおしいんだよお…！！」

ガララ…

あ、源ちゃんインしたお。

助かったあ。

「こらあ庄司！お前も3年の伊藤と同類なのはわかるけど朝っぱらから停学明けの生徒殴るな！」

「…チツ、また後でな橋立さんよ」

源ちゃんナイス！

僕ちん戦わなくて済んだよ！

…あれ？なんか足りないような？

ああ！！

「ちよつと！みよん！みよん！」

「なに？」

「千尋は？」

「風邪ひいたらしいよ。かなりしつこい夏風邪だつて」

「なにい！！大丈夫かな！？心配すぎるう！！お見舞いにいかなきゃ！うちからケーキかっぱらつて！」

「橋立え！とりあえずSHRやるから座つてくれ」

「…は〜い」

しよんなあ！！

千尋が風邪ひいて休みなんて…学校の楽しみの80%が失われてしまったじゃないか！！俺千尋と会うために真面目に学校通っているっていうのに…ああ、心配だ。たとえただの風邪でも心配だあ！！

たとえきもいと思われても俺はとことん心配するぞ千尋、ケーキ、後で届けてやるからな。出来立てのやつ。

S H R 終了後

「お前ってホントに千尋の事に関しては大げさだよな」

「うるせっ！勝政にはわからねえんだよ！」

「さつさと告白すればいいのに。千尋って自分のために必死になつてくれる人好きらしいから」

「みよん…そんな、告白するだけの勇気があつたら俺はこんなに取り乱したりしないぞ…：それより、あの庄司って野郎、なんでこっちに転校してきたんだ？」

「さあ？」

夏休み中に問題でもおこしたかあの野郎？

…しかもよりによって同じクラスとは…：これから半年面倒な事になりそうだなあ。そういえばそろそろテストも近い、まあそれは庄司の件には関係ないが9月には1年生は宿泊学習がある。

宿泊学習は2泊3日でニセコのあたりにいくらしい。

もちろん他校生徒もいるから揉め事は起こすなよと言われてるが…：まず庄司の好戦的な性格からしてそれを避ける事はできない。しかも俺の悪運つたら半端じゃないし、絶対ヤンキー高校が一緒だぞニセコも…

なんてこつた…：なんでよりによって庄司が桑園に転校してくるんだ

よお。

しかも転校できるほどの学力あったのかよあいつ…見た目に反して意外と頭がいいのかあいつは？

昼休み

俺は一人でぼけえっとしていた。

勝政？ああ、最近そういえばみよんとよく飯食ってるよな、家が近くて学校が一緒だから仲良しですかそうですか…俺も混ぜてほしいけどあのムード…追い返されるよなやつぱり？

チャラ男は見かけないし、彬良も見かけないし。

和樹？知らんなそいつは。千夏と伏見さんもどこにいったんだろう？俺って千尋がいないとホントに暇人なんだなあ、別に友達いないわけじゃないけど何かと遭遇しないし…学校そんなに広いか？ん？なんか前方にヤバなのか…

「う…う…」

「どうしたもう終わりかよ？かかってこねえのかよてめえら！」

うわぁ庄司が緑川ともう一人をシメてるうゝ。

ホントに好戦的な野郎だなあ。関わりたくない、関わらないのが一番。

「「すす、すみませんでしたあ！」」

「チツ…やっぱあの二人が最高にはりあいるぜ…おっ？」

げっ！！気付かれた！！

どうしよっかなあ？逃げようかなあ？ああもつとんでもない問題児が転校してきやがったぜ！！

「橋立じゃねえか。つまんねえから相手しろや」

「ここは学校だからいやです」

「嫌…じゃねえだろ関係ねえだよあ？」

…泣きたい。

「おらあ庄司い出てこい！！！！こつちに転校してきたのわかつとんだぞゴルア！！」

なんだ？庄司を呼ぶ声が。

つというわけで校門のほうを見てみると…うわ、がらの悪そうな奴ら…ってあれ西園寺高校のボンクラどもじゃないか。

「やれやれ、最近おとなしいと思ったら……橋立、一時休戦としないか？」

「どづいつ事だよ？」

「俺つちと組んであいつらのしてからやるっぜ？」

「めんどくさい、ボクちゃん不良じゃないし」

「あっそ…いつそ不良になれば楽にやれるってのによあ。じゃあ俺つち一人あのボンクラども片づけてやるぜ？」

…っとはいうものの少しは心配だ。
庄司の事だ。負ける事はないだろうけど相手が死ぬまで攻撃しそうだ。いざという時止めるためにもこっそり俺、ついていく事にします。

校門付近

っというわけで来てしまった校門、やっぱりヤンキーさんたちがいて…あれ？知らぬ間にヤンキーさん達は人質を捕まえていた。あれは…千夏じゃないか。おびえながら近くでみているのは伏見さん…どうせ大した実力ないのをわかつていながら絡んだんだろ。

…当の庄司が現れた。

やけに笑顔だ、やっぱり好戦的な変態じゃないか。庄司は千夏をおさえている西園寺の今井さんの肩に手を置いた後、ぶん殴った。

「ぐおっ！…！」

「千夏！」

今井から解放された千夏を伏見さんは抱きしめた。

べ、別にいやらしい意味じゃないんだからね！しっかし庄司の奴、いきなり殴るんかい。

「い、今井さん！…！…てめえ庄司い！！　　ぐはあ…！」

「ぎゃあ…！」

「げはあっ…！」

あゝあ凶悪な奴。

あっさり倒しちゃったぞ。ようやく今井が立ち上がった。

「野郎！ナメた真似してくれんじゃねえか！！」

「いいねえそうこなくっちゃおもしろくねえよあ…なあ今井さん？
少し遊んでくれよあ？」

「ナメやがって！！てめえなんて沢村さんが出る幕もねえ！！この
今井様がボッコボコにしてやんぜ！」

「やってくれよあ？俺退屈だからよお喧嘩してえんだよあ？」

不良校の市川から至って普通の桑園に転校してきたから少しはマシ
になったのかと思いきや…全然変わらない悪じやないか庄司の奴…
はあ、庄司と同じクラスとはマジで疲れそう…
そもそもなんであいつこっちに転入できたんだ？完璧な悪なのに。

「おう上等だコラ！俺が勝ったら狂犬橋立と金髪の日向って奴を呼
べ…！」

いつのまにそんな名前ついてたのか勝政の奴…
確かにあいつ金髪だけど。

「そいつら呼ぶ心配ねえよ…なあ！？」

「うっ！…ぐっ！…おっ！？…ぎゃああ…！！！」

うひゃあゝ乱暴な奴。

「純！喧嘩はダメでしょ！少し自重しなさいって何度言えばわかるの！？停学明けなんだから少しはおとなしくしてなさい！！」

「いててて！！そこはらめえ！！！！！！！！」

俺が姉ちゃんにフルボッコにされる様子を庄司は呆れた様子で俺らを見ていた。

「あんた前に店荒らすって大声で言ったワルでしょ！あんたも喧嘩を売らない！わかった！？」

「は、はい」

流石の庄司も姉ちゃんには正直だった。

…っということは一回姉ちゃんに負けてるんだな、あっさりど。

part 34・相良の頼み事

その翌日。

はあく、眠い。

昨日ケーキを持ってお見舞いに行ったけど千尋は元気そうだった。よかったあと安心、今日は千尋も学校に来ていた。

「おはよー純」

「おはよ」

うんうん、いつもの朝…

「よ」

っじゃなかった。

くそっ！完全に忘れてた！庄司の存在を！！！！
さて、前回までの話を簡単にまとめるとあの筋金入りのヤンキーさん庄司が転校してきたからかもう俺早くもクタクタ。これほど疲れる奴とは初めて付き合った。

正確にいえば俺は関わりたくはないんだけど。

「橋立、すつかり気に入られちゃったみたいね」

「えーやだあ！言つとくけど奴が狙っている人物には勝政も含まれるからな」

「なんで俺も!?!」

「強いから」

たったそれだけの理由だ。

そもそもあいつは何のためにこっちに転校してきたんだろう？まあ庄司はご覧の通り不良なので友達らしい友達は少ない。何人かはいるけど。

「庄司さん！今日いいですか!？」

「なんだあ？緑川ちゃん？」

「えと、最近駅前で稲川高校の奴らがたむろってうちの生徒に通行料払うように言ってるらしいんすよ！ちょっとシメんの手伝ってもらえますか？」

「いいぜ、俺は喧嘩大好きだからよお…そういう仕事は喜んで引き受けるぜ…」

「ありがとうございます庄司さん！」

…友達というよりは部下のような気もするけど……
ん？緑川の奴がこっちを見てきた。

「じゅ、純…あの不良こっちにくるよ」

緑川も不良だ。

前に一度だけ絡まれた事がある。まあ俺の「狂犬橋立」というちよつとした通り名のおかげで喧嘩は免れられたけど。

「なんだあ狂犬橋立と庄司さんが一緒のクラスねえ？…てめえなんて庄司さんにかかれれば指一本だ！ちよつと喧嘩が強いからって威張るのもほどほどにしときなターコ！」

うわあ腹立つく殴りてえ。

けど後ろじゃ千尋が俺にどつどつと止めよつとする…俺は牛かよ！でも面倒だし、やっぱり千尋の願いどおり緑川をシメるのはやめておきますか。

「そつちもだぞ金髪の日向！てめえも目立ってるんじゃないよ！悔しかったら庄司さんに土下座しなバーカ！」

あつ！馬鹿！！

勝政にそんな事言つと収集つかなくなるぞ！！

「…ほあ、緑川ごときが俺にバーカか…」

「ま、まずい！」

みよんが千尋同様に勝政をなだめよつとするがほぼきいていない。緑川は庄司がいるせいが強気だ。

「な、なんだあやるかコラ！？…いつとくけど俺はこれでも中学じや喧嘩最強に強いつて恐れられてたんだぞコラ！？」

それ以上勝政を挑発するなあああ！！！！

「…寝てる、ガキITT！！！」

バキITT！ドスツ！！ゴンツ！！

あゝあ、緑川ちゃんフルボッコだよお。

俺と千尋とみよんは呆れながらのびている緑川を見ていた。

「あゝあ、やっちゃったね？」

千尋が俺に何かを訊く様にそう言ってきた。

回答に困る。

「あ、ああ…まあしょうがない。勝政だし」

「そうだね、日向だしね」

「ここは橋立と千尋に同意しておいて…日向だしね」

「だから前々から思ってたけど俺だからって何！？みんなひどいやひどいや！…！」

だつてえ…ねえ？

本来勝政って戦闘要員じゃなくて俺ら3人のイジられキャラって役じゃなかったっけ？皆それぞれ役の位置つてもんがあるんだよ。たとえば和輝は空気、千夏は変態、伏見さんは単なるお友達役…どうでもよさそうでないけりゃいないで寂しいという実は重要なキャラどもだ。

さて、そんな事よりも今日ほとんどもない事が発表された。

それはテストの範囲表だ。いよいよ期末考査が迫っているわけで赤点なんてとつてられない…だから勝政と遊んでいる暇とかもないし、庄司らと喧嘩している暇もない。

っというわけで！

「ちひろ」

みよんとハモった。

「な、何二人とも」

「勉強おしえて」

「い、いいよ」

よっしやあ！！

これで無事に進めば俺のテスト…赤点は避けられるぞ…！！
千尋先生に教わるとなぜか点数がやたらと上がるっていう魔法があるからな（俺の思いこみかも）。

「…じゃあ俺にも教えてくれよお」

げっ！！庄司！！

こいつが介入するとロクな事が起こらない。

しかしうちの制服似合わない男だなあ。

「…純と日向の事いじめない？」

「いじめねえよ…こっちだって成績ギリギリなんだよ……」

何気に庄司は成績の事を気にしていた。

学力劣等で向上する見込みがまるでない場合は退学って可能性もあ

るからな。そこらへんだけは真面目なんだな、庄司の奴。

「なんだ庄司？千尋に教えてもらうの？」

「文句あるかよてめえ？」

「別に」

面倒事起こしたくないからこれぐらいで勘弁しておこう。

ようし、今度のテストもせめてギリギリラインは通過してやる。

そんでもって今度こそ千尋に告白してやる！！男橋立純！がんばれ！！今度こそ必ず千尋に本心を伝えてやるぞ！！

「は、橋立さん！日向さん！大変です！」

「…誰？」

はて？誰だっけ？

見たところお調子者の不良っばいれど。

「俺佐川っす！ってそれどころじゃない！隼鷹の奴らが来てますよ
「！」

「隼鷹？」

あいつらうちの高校は諦めたんじゃないか？
あいつらうちの高校は諦めたんじゃないか？
んーどうしょよ？よし、ここはひとつ。

「おい庄司、喧嘩好きなんだろ？真面目に勉強したい俺の代わりに
いってあげたらどうだ？」

チャラ男のせいで千尋が強制退場！

最後の希望が失われてしまった！！！！

…仕方ない、行くしかないかそうですか……

俺と勝政と庄司は3人並んで廊下を歩いていた。庄司や勝政はともかく俺まで不良扱いされている上に「狂犬橋立」とかいつのまにか変なものがつけられているためか、周囲の視線は普段よりもすごく感じられた。

「お、おい！狂犬橋立と金髪の日向だぜ？」

「も、もう一人って最近転校してきた市川の元番格の庄司じゃないか？いかにも悪そうだなあ…リーゼントだしよ」

「ひえ、ひええ…マジかよ。あの3人が揃って喧嘩じゃ誰も勝てないんじゃないか？」

「馬鹿！声が大きすぎるっての！」

誰か誤解を解いてくれ…

もう俺、泣きたい。

とうとう校門まで来てしまった。

そこにはボロボロの相良達がいた。

「あれ、相良じゃん。どうしたあ？」

「うう…聞けえてめえら…逃げたほづがいぞ？」

はい？

なんででしょうか？

「うちの番長が動き始めたぞ…てめえらシメられるかもしれないぞ？」

相良の処の番長…って誰だっけ？

うーん…覚えていたような気もするけど思い出せないなあ。よし、庄司にでも聞くとするか。

「庄司、隼鷹の番格って誰？」

「古賀って奴だあ…手ごわいとは噂されてる…おもしれえじゃねえかよお…古賀だろうがボクちんフルボッコにしてやんよお」

「と、とりあえず落ち着け庄司。相良、何があったか具体的に説明してくれ」

勝政は相良にそう訊いた。

しかも隼鷹の番長って市内最強と言われているらしいし、一体何なんだろう？

相良はボロボロの体に鞭に打って事情を話し始めた。

「実はよお……」

はいここで相良の簡単な回想

「おい相良、お前最近何かと桑園の味方してるらしいじゃないか」

「そ、そんな事はないぜ元徳。大体休戦しようって言ったのはそっちじゃねえか？」

バキイツ!!

「ああ!! うううう…くっ…」

「相良さん!!」

「てめえらも相良の味方すんのか!!」

バキイツ! ドカアツ!!

「…よく聞けゴルア! 近々シメに行くから覚悟しろって言っ
てこいや、狂犬橋立と金髪の日向によお。あと、てめえらも狂犬橋立と金
髪の日向シメる為に戦えや? わかったかゴルア!!」

っで、元に戻って

「そういうわけだ。言っとくがてめえらシメんのは俺だ。古賀とか
あとのカスどもに負けるんじゃないぞ」

「お、おい! お前俺達シメにきたんじゃないのか?」

「馬鹿か橋立? 理不尽にシメられてよお、協力する気になるか? 俺
らはしばらく学校フケるぜ」

そっいつてボロボロの相良達は去っていった。

え〜っと、要するに桑園 vs 隼鷹の休戦は終わって再び戦争が始ま
ったという事ですか…

ああ…誰が不良じゃない(自称)のに喧嘩に巻き込まれる俺を助け
てください。

part35・桑隼戦争開戦

ようやくSHRも終わって帰ろうと思った。

庄司は緑川に頼まれた件で早々に帰っていった。あいつ喧嘩好きだなあ…勝政とみよんも一言挨拶を入れると家に帰っていった。自宅に帰って

さて…俺はというと廊下で待っていた。

なんでかって？千尋が掃除当番だからだよ…

それより勝政とみよんと庄司、結局テスト勉強の件はどうしたんだろ？まさか明日に引き延ばし？

「ハローキーちゃん！」

「ん？この甲高くてうるさい声は千夏か」

「うるさいとはひどいな！今日暇だったりする？」

「んー、別に暇じゃないぞ」

「くうく、とうしていつもキーちゃんとボクの予定は合わないのだからああ…！」

「知るか、うるさい」

「ひどくいい！！泣いてやる泣いてやるう！！」

まったくいつもハイテンションな奴だ。

そこがこいつのいいところなんだろうけれど。

「きーちゃんの童貞！早漏！」

「なっ！！」

周囲にやにや、俺注目。

忘れてた。こいつが変態でそういう事ならすぐに思いつく奴だって事を！！

つてか軽くこれってやばくね？確かに前者は合ってるけど後者は…
つて待て！このままだとこの小説がR18になってしまう！！

「あれえ？なにやってんの純？」

彬良とチャラ男がやってきた。

「あ、出た！脇役二人組！！」

「「ひどー！！」」

まだいいじゃないか。

和輝に至っては最近登場すらしていないぞ？

つまりあんたらまだ恵まれているほうだ。主役の俺でさえ一度も登場しない回があるっていうのに…

「千尋待ってるんだよ」

「そ、そうかあ！つじゃあ俺さ結衣ちゃんとデートしてくるからお
さらば！じゃーねえ！」

「あつ！待てチャラ男！！」

そういつてチャラ男は走つてどっこに行った。
ちなみに杉良は半泣き状態でした。

「畜生！リア充どもが！…ねえ鞍馬？」

「なに？」

「…もしかして不良のほうがモテるの？」

「俺は不良じゃねえ！！」

マジギレ寸前で怒鳴つてみました。

「ひいひい！ごめんなちゃ〜い！！」

杉良は走つて逃げていった。

しかも周囲の人たちはなんか俺を怖がつてるっぽい。まったく俺つて世間じゃどう思われているんだ？思わず俺は悩む人のポーズをやつてしまった。

「き、きーちゃん落ち込まないで。す…少なくともボクはきーちゃん
の事不良だとは得持つてないから！」

ああ、たまに千夏はやさしいい。
でも俺は悩み続ける、悩み続けていると教室の扉が相手千尋がやつてきた。

「あ、千夏。純の相手してたの？」

「うん、暇だってし、きーちゃん不良だと思われて悩んでたから」

「そ、そう…」

あ、やばい。

千尋の元気がなくなってきた。なんとかしなければ。

「べ、別に悩んではいないよ！ただ世間の俺に対する評判悪いですねえと思っただけ」

「それって悩むって事じゃない？」

「うっ！！」

くそっ！反論できない！

しかも千夏の奴周囲の様子を窺いながらどこかに逃げてったし！なんでこういつ時に限って使えないんでしょうあのお方？

「私心配してるんだからね…悩みがあるんだったら相談に乗るよ」

「いや、自己解決できる範囲なので結構であります！さ、さて帰るか！」

「えっ？あっ…うん」

ちよつと横暴すぎたかな？

まあいいや、だってここ廊下だし、こんな処で人生相談するのは恥ずかしいからな。っというわけで俺達はバスに乗って電車に乗り換え、その後帰り道を歩いてた。

今日はなんか会話が少ない…やっぱ俺のせいかな？
よ、よ〜し！こっちから話を振ろう！

「…純！！後ろ！」

「えっ？」

妙に慌てているかつ力の入った声で千尋は叫んだ。

なんだろうと思って後ろを振り向こうとした瞬間、後頭部に激痛が走った…なんでしょう？例えるなら棒で後頭部を思いつきり叩かれた感じだ。俺は痛みを我慢して顔を方向転換！上を見上げるとそこには隼鷹の制服を着た男5人がいた。

「純！！！」

千尋は俺の名前を叫んでいた。

だけど今はそれどころじゃない、こいつらに用がある。

「…な……なんだてめえらは…」

「うるせえっ！！！」

ドスッ！！

横っ腹に強烈な痛みが走る。

クリーンヒットしたなこりゃ…

「おらおら……どうした？それでも狂犬橋立かコラ？」

「うう…うう…」

頭を踏まれて一言も喋れない。

まずいな、このままだと死亡確定…やだあまだチューすらしたことないのに死にたくない!!

意識が朦朧とする中、ヤンキーさんたちの話声とぼやけてはいるが、ヤンキーさん達と千尋の姿が映っていた。

「チツ、案外大した事ねえな狂犬橋立は。もしかして俺って強い？」

「すごいっすよ高橋先輩!!こいつをあっさり仕留めちゃうなんて!!」

「でもどうすんだ高橋？女が見てたぜ？」

「じゃあ口封じに女さらってくか？なあ？」

「ち、近寄らないでよ!!」

ま、まずい……千尋がこのままだと。

助けなければ……っと思っただけど体が思うように動かない、そもそも頭痛が激しくて立てない。

「うるさい!!ちょっとついてこい!!」

「た…たす……」

俺にはわかる。

前の香取の時もそうだったが千尋はピンチの時になると恐怖のあまりに大声が出せない。だから抵抗できない、しかもうちの姉ちゃん

と違って運動神経のこの字もないから抵抗もできない。

「ま……待てやゴルア……」

「ほお？まだ喋る元気があったか？……くたばりぞこないが。てめえは弱いから負けたんだよ？おらあっ！……」

く、首蹴られたっ！

そのまま段々視界が暗くなっていったような気がした……

……

……

……

……知らない天井……っじゃなかった。

俺の家だ。だけど枕は氷枕になっていて、俺はベットで寝ていた……
そうか。姉ちゃんあたりが俺ほ見つけたのか？そう疑問に思っていると姉ちゃんが部屋に入ってきた。

「あ、起きてた？」

「……」

そういえば千尋は？

「大丈夫？だから喧嘩は自重しなさいって言ったのに…」

…隼鷹？高崎？…アイツラガ？

「純？…ねえ純、聞いてる？」

そうか…あいつらそういえば千尋さらっていったな…微かに記憶がある。

…野郎、許さんぞ…

「…あの野郎おお！！！」

「ちょ！ちよつと純！！！」

姉ちゃんの声なんてあんまり聞こえなかった。

俺の怒りはもう止められるものじゃねえ。何が何でも千尋を助けてついでに…高崎とその野郎どもにヤキいれてやる！！

家を出ると隼鷹生徒が2人歩いているのが見えた。

このあたりで活動しているらしい。俺は無も聞かずにそのうちの一人に殴りかかった。

「おらあつ！！！」

「ぐあつ！！！」

一人は一撃で倒れた。

「な、なにすんだてめっ！！」

「んんん！！！」

「言え…てめえ隼鷹の生徒だろ？高崎って野郎知ってんだろお！？
どこにいるか言えっ！！！」

「だ…誰があ…」

「言えつつてんだろおがあ！！！」

すると男は汗をかきながら口を動かし始めた。

「た…多分…農試公園の公衆トイレ…」

「くそおっ！！！」

俺は農試公園に行った。

そのうち空も暗くなっていった。そしてようやく…公園についた。
俺は声が聞こえるトイレに近づいた。

「っで？どうする高崎？あの女もう解放するか？」

「そうだなあ、俺達が怖くて一言も喋れねえらしいからな。まっ、
先公とか親にチクると殺すとかおどしとけ」

「はっ！」

許さん…全員許さん！！

死ぬ寸前までボコってやりたい…俺はトイレの中に入った。

「んっ？誰だてめえは！！！」

「よう…さっきの不意打ち利いたぜ？」

「は、橋立え!!」

高橋の部下の数人は俺にびびっているようだ。

確かにあんだけ攻撃されて数時間のうちに復活してるとなるとビビるのもわからなくはない。だてに姉ちゃんに鍛えられていないんだぜ俺？

「何しにきたんだ雑魚？」

「何しにつて……千尋助けに来たに決まってるだろぅがあ!!!」

俺は思いっきり走って高橋をぶん殴った。

高橋は口から少量の血を出し、小さく唸ってふらついたが俺はそんなのお構いなしに高橋の胸倉を掴んでトイレの壁に叩きつけた。

「うっ!!」

「てめえだけは絶対許さんぞゴルァ!!!」

「高橋先輩!!!」

「て、てめえ!!」

俺は高橋を助ける為に突撃してきた4人のほうをぐっと睨んだ。
そして…

「うるせえ!!!てめえらは引っ込んでろ!!!」

「うっ!!」

一人の腹にパンチをいれ…そいつの頭を掴んで2人のほうに投げた。
一気に3人を倒し、最後の一人の目には唾をかけた。

「だあつ！汚！」

「きたねえのはどっちだゴルァ！！」

顔面に思いつきりパンチを入れたあと、さらに裏拳をもう一発入れて相手をノックアウトさせた。

「このやるお！！」「」

さつき投げた奴に倒された2人が襲いかかってきた。

「うるせえっ！！」

「ぐおっ！！」「」

俺は二人の頭を掴んでそのまま勢いに乗り、二人を壁に叩きつけた。
まあ予想通り二人は失神、俺の目先は再び高崎となった。高崎は辛うじて意識があるようだ。微妙に笑いながら俺に何か言おうとしていた。

「っへへへ…やるじゃねえか橋立…でもこれで勝った気になるなよ？…女もまとめてブタみてえにしてやるぞコラァ！？」

「うるせえっ！！」

バキィッ！！

「うおっ!!」

「てめえだけは許さねえって言ったただろうが!! 俺は女をさらって人質に取る奴と女に暴力を振るう奴が一番大嫌いで腹立つんだよお!! てめえだけはただじゃおかねえからなゴルア!!」

俺は高橋を殴り続けた。

その時…

「ま、待て純! 落ち着け!」

なぜかそこには勝政がいた。

…でもなんか腹が立つ。

「うるせえっ!! てめえも一緒に始末するぞ!!」

「落ち着け! 熱くなるな! もうそいついつてるぞ… お前の勝ちだ!」

俺は改めて高橋を見た。

すると整形外科は余裕ってぐらい顔はボロボロだった。もちろん気絶している。まあ呼吸はしているみたいだ、多分生きている。

「はあ… はあ…」

「落ち着けよ純… あっ、なんで俺ここにいるかって? ちょっと勉強に疲れたから気晴らしにちよいと遠くまで散歩してたらなんか声が聞こえてたからさ… まさかと思って…」

そう… なのか。

…まあ確かに勝政が来なかったら俺、高橋の野郎を殺してたかもしれない。

しかしあれだな…こんなにキレたの初めてだ、自分でもそう思う。

そ、それよりも早く千尋を解放しなければ！

「千尋！」

俺は扉を開けた。

中で誰も見張ってないのかよ…外にしか番がいなかったらしいから鍵はかかっていなかった。そこには突然視界に入った俺の事を見つめている千尋がいた。

「じゅ…じゅん？」

「大丈夫か？何もされてないか？」

「う…うん……」

とりあえず俺は千尋の手を取った。

「…」

「帰ろ、早くしないとあいつら起きるぞ、事情とか全部俺がお前の父さんに説明しておくから」

なぜか千尋は泣き出した。

声も出さずに…どうすりゃいいんだ？俺はちよつと勝政のほつを見た。

「…じゃ、じゃあな!」

あ、あの野郎逃げやがったな!!

くそお…よし。もう後の事はどうでもいいや!

ぎゅ……

「えっ……」

俺は千尋をそつと抱きしめた。

「怖かった?ごめんな、不意打ちされたとはいえあの時助けられなくて、長時間あいつらに監禁されて怖かったよな?しかも原因は俺が春に殴りこんできた隼鷹の生徒を倒してしまったことだよ…俺のせいだ、変な事に巻き込んでホントにごめん……」

俺はそつと千尋の顔の様子を窺う。

千尋は涙をボロボロ流し、俺の胸の中で思いつきり泣いていた。

…もうダメだ…絶対嫌われたにこりゃ…この後どうしよう?とりあえず千尋を家まで送って翌日から…なんでこうなったんだろ
う…

part 36・純の決意

とりあえず俺は夜道を千尋と並んで歩いてた。

しかも千尋が「手、繋いで……怖い……」って言うから手をつないでいた。

これはこれでいい気もするけど今の俺にとっては全然よくない。

千尋に長時間恐怖と苦痛を与えてしまった、もう多分だめだ俺……
とりあえず伊吹家の前に到着、どうなる事やら……

ピンポーン

あー怖い怖い怖い!!

だって…だってえ!! もう嫌ああ!! 絶対千尋のお父さんに俺が殺される!! だって夜中だし千尋元気ないし涙目だし俺と二人つきりだし勘違いフラグじゃないかコレ!

「はい」

すると千尋にそっくりな美人の女性が現れた。

「あら千尋?…どうしたの? 元気がなさそう……あら? 貴方は?」

「えっ? 俺っすか? ちひ…いや伊吹さんのクラスメイトです…アハハハ」

まずい…殺される。

「あらそうですの? 私は伊吹宮子いひきみやこ、千尋の母であります。貴方の名

前は？」

「えっと…俺橋立純です…」

怖い…殺される…さらば俺の16年間の人生！

チユーすらしてないけどもついいや！来世は幸せになるぞ、ついでに勉強もしっかりしてもつといい学校いくぞ、虫じゃなくて人間に生まれ変わりますように！

「あら貴方が橋立君？結構いい男じゃないの？」

「きよ…恐縮です………」

「それで、どうしたの？千尋の元気がないみたいだけど」

「ここで対応を間違ったらマジでおさらば……！」

「えと…その……不良にからまれている処を助けて………」

「あらそうなの？あつ、そうだ。お父さんかんかんだよ千尋？」

「…はい………」

とりあえず俺は家に上がった。

まあ半分成り行きだけど、やっぱり中は綺麗で猫とか犬の数も多い。あのお父さんホントに動物好きなんだなと思った。俺は猫苦手だけだ。

「千尋お……大丈夫か……！」

出たあああお父様あ！！
怖いよ助けてよ母ちゃん！！！！

「話は母さんから聞いた、橋立君が千尋を助けてくれたようじゃないか。この伊吹宰平、伊吹組頭首として。また千尋の父親として貴方には特別に感謝したい」

そこまで改まらなくても…

そういえば今更気がついた。こつちも頭に包帯巻いている事に。千尋のお父さんはそれに気がついたのか視線は俺の頭だった。

「ところでそれは？」

「へっ？これ？ああいや、不良に後ろから棍棒で殴られたので、大した傷ではないですよ」

「そうかあ。まっ、気をつけるんだぞ千尋。いつまでも守ってくださる人がいるわけじゃないんだからな」

「…はい」

そう返事をして千尋は廊下のほうにいった。

多分自分の部屋に戻ったんだろう。っで俺はどうすりゃいいんだ？
帰ったほうがいいのかなあ？

あゝあ……

「橋立君…頼みがある」

「は…はい」

なんだろうこのやたらとシリアスな雰囲気は？
もう逃げ出したいくらいだ。」

「千尋襲った奴らの番格シメてくれねえか？」

…この人マジで社会人？
いいのかよシメても……

「大丈夫だって、うちの誠貸すし、もし捕まっても伊吹組の権力を
使って全部チャラにするからよ？」

こ、怖えええ！！！！

チャ：チャラって制服さんにも有効なんですか伊吹組の権力って！？
一体なんなの？伊吹組の裏側って一体どうなってるの！？

「おい誠！ちよつと来い」

「なんだよ親父…ん？げえっ！！て、てめえは！！」

伊吹誠、覚えている人は多分少ないでしょう。

千尋の実の兄にして元不良、庄司の前の市川高校の番格だった男で
実力は多分高いほうだ。つでどうやって更生したかっていうと俺の
策略だ…つでも更生したはずなのに外見全然変わってないな？

「あの…伊吹さん？確か更生したんですよね？」

「それがなあ、最近の不良は墮落しているとかいってシメてたらま
た不良に戻っちまったんだよ。まあ動機が動機だけに以前よりは凶
悪じゃないし、むしろいい子ちゃんなんだが…」

なるほど…不良を徹底的に叩き直そうとする不良か…
これまた特殊なタイプだな。

「きよきよきよきよ…狂犬橋立！」

「狂犬橋立？いかにもって感じで……橋立君も随分勝ってるんだな
あ」

「ええまあ…成り行きで…」

ホントはこんな風になりたくなかったんだけど…ってかなったつもりはないんだけど。

いつのまにか勝政の奴とセットで不良って扱いにされてるし…もう
いつそのこと本物になっちゃおうかな？最近そついう風に思うよう
になっちゃいました。

「てめえには借りがあるんだよ、よくも前は卑怯な手を使ってシメ
てくれたな…おかげでしばらくは恐怖でロクになにもできなかった
し、学校じゃ笑いもんだつたぜ」

しかもなんでだろう？

家の中なのに西園寺高校の青い学ランのようなやつとそっくりな市
川高校の制服を着ている。昔のアニメかよ…

「お、おい誠！ちつよと落ち着け」

「親父はちつよと黙っててくれないか？俺は橋立に用があるんだよ
…おい橋立。一応言っとくが俺はお前よりも年上だからな、挨拶は
しろよコラ？」

「じゃあ言つとくけど俺も伊藤さんの代わりに桑園の番格やってるからよ、挨拶はしろよ?」

決まった…全部ウソだけど決まった!

「なんだとコッ」

「いい加減にしろ誠!斬るぞゴルア!!」

「うっ!」

ひいひいひい!!

お父さんドスを持っております!どっから持ってきた!怖い、やっぱアンタヤクザでしょ!?

「また橋立君にシメられたいかコラ?」

「…チツ」

誠の奴も諦めた。

それよりお父さん怖い…

「それで、何の用だよ親父…橋立の野郎まで呼んでお?」

「実はだな、うちの千尋を襲った奴をこの橋立と一緒にシメてくれねえか?」

「千尋?たくあいつは…っで?どこのどいつにシメられたんだ橋立?」

「ん〜っと、隼鷹高校だったと思う」

「じゅ、隼鷹!?!」

突然誠は後退りを始めた。

どんだけ隼鷹怖いんだよ……

「ととと!?!とんでもねえ相手に喧嘩売りやがったな橋立え!?!」

「だってしょうがねえだろ? 千尋襲ったから……」

「じよ、冗談じゃねえぞコラツ! 誰が隼鷹なんかと……」

「お前の妹やられたんだぞ? 男として恥ずかしくないのか?」

「お……男!?!」

すると誠の奴は急に黙りこんだ。

そして……なぜか目を光らせて立ち上がった。

「そつだ! 俺は男だあ! なあ橋立」

「えっ? あ……ああうんそつだね……」

なんだ? 態度が一変したぞ?

「よ〜し隼鷹だろうが怖くねえ!?! いくぞ!?!」

「えっ!?! 今から!?!」

「おうおう！番格つたら古賀！この時間帯なら多分あいつ狸小路で悪いことしてるぜ！！なんで知ってるかって！？俺一回あって喧嘩売って負けたことあるからだよ〜ん！！」

別に聞いてないし…しかもキャラ180度ぐらい変わっちゃったし。変な奴、伊吹誠って本当に人間か？つというわけで俺達はそのまま街中に向かった。誠の奴は常に俺の後ろを歩いていたが…

「おい、お前俺の先輩だろ一応？前歩けよ…」

「やだ！怖いし！」

な、情けない奴！！

「お前…それでも元市川の番格か？」

「だってえ…おっ？」

「…げえっ！庄司！！」

よりによって一番会いたくない奴と出会ってしまった！

そこには庄司の姿があった。相変わらずタレ目で制服の前ボタンは開いていて下はワイシャツじゃなくて赤いTシャツ、しかもだぶだぶだった。

「よう、どこ行くんた橋立と伊吹さんよお？」

「…隼鷹古賀の古賀の野郎をシメにいくんだ。わかったならどけ、庄司」

「面白いねえ俺っちも混ぜっっちゃおうかな？」

お前が混ぜると面倒な事になるから勘弁して！！

「まあいいじゃないか。これでメンバーは揃ったわけだ」

「か、勝政？」

さつき公園で見たけどなんでこいつがこんな街中に？

「純の姉ちゃんに言われてな。ちょっと後つけてたんだよ。喧嘩売るんだろ？古賀の奴に…だったら俺達も混ぜてくれよ。純が古賀とやっている間に俺達はほかの奴と戦ってるからよ」

…なるほど。

つまり俺は古賀との戦いに集中せよってことか。

まあそういうことならこいつらを連れてっても問題ないか。さすがに一人は無謀だと自分でも思ってたし。

…あ、誠がいたか。まあいいや、なんかイザというときに限って戦力外ってイメージがあるし。

「まあいいぜ、お前ら気合い入れていくぞ。桑園と隼鷹の本格戦争だ」

「おう」

「楽しみだねえ…」

っというわけで3丁目ぐらゐ。

なにやらそれっぽい人たちが視界に映った。

「お、おい！あいつら隼鷹の奴らじゃないか？」

「はあ〜？…いきりな古賀さんだなあ…強そうだなによりだぜ…」

「きもいぞ庄司…それより純、見つけたぞ、しかも番格もな」

あれが古賀って奴か…

確かに強そうだ。凶体はでかくて角刈りですさまじい眼力がありそうで、しかも顔には2〜3個喧嘩の傷が入っていた。あとの奴らは大体中堅から幹部といった雰囲気だ。

「…おい！」

「ん？…てめえは…狂犬橋立か？」

古賀の奴がこつちを向いた。

眼力すご！！圧倒されそうだ…

「そうだよ…てめえが隼鷹の古賀か？タイムン張れよおい」

「こ、古賀さん！こんな奴ら俺らが！！」

「待て…てめえらがあつちの3人組相手しな…いいだろう。タイムン張ってやろうか狂犬橋立」

「よし…」

さ〜てどうなる事やら。

不敗伝説が誕生しかけている俺と隼鷹高校の凶悪番長、どっちが強いでしょう？

part 37 狂犬橋立vs古賀元徳

「行くぞオラア!!」

古賀の部下の10人が勝政と庄司と誠にかかっていった。

「くっ!オラア!!」

「てえっ!てえっ!...楽しいねえッ!!」

「隼鷹のチンカスがゴルア!!」

善戦してるみたいだ。

しかし隼鷹の生徒も手強いらしく一発やそこらじゃ倒れても起き上がる。しばらくは戦ってそうだなあのお3人も、そしてこっちも...いよいよ古賀とのタイムマンが始まるうとしていた。

ちなみにここだとストリートファイト、警察来たらどうしよ?

信用していいのかなあのお父さん?伊吹組の権力で俺の罪ってチャラになるんだろうか?

「おう橋立え!!掛ってこいや」

「上等だあ!てりゃあっ!!」

俺は古賀に思いっきりパンチをプレゼントしてあげようと思った...でも古賀は俺のパンチをかわして俺の腹にひざ蹴りを加えた。

ドスッ!

「うっ！」

速い！

おまけに力も強い！！庄司の比じゃない…

…だけど負けるわけにはいかんのよ、行くぞオラァッ！！…っということだ。俺は古賀のほうを睨んだ。

「おっ？」

「うりゃあっ！！！」

思いつきり肘打ちを古賀の腹にプレゼントしてあげた。

古賀さん胸倉を抑える！効果あり！

「ちっ…中々やるじゃないか狂犬…こんなに効く攻撃は久々だ…」

「へっ！そつちこそだ！この俺とタイマン張って10秒以上持ちこたえるとはな…」

「隼鷹ナメるんじゃないやねえぞおい？…勝負はこれからだ……うおおお！…！」

古賀さんは大きくパンチを！！

でも俺はしゃがんでそれを避けた！

「てめえっ！」

今度は蹴り！！

でも俺はそれをかろうじて避けた！…っっていうか髪にかすった。髪

抜けたぞ……いてえ……

今度は俺のターン！古賀の奴の顔面にパンチを仕掛けようとした。手ごたえはあったがそれは古賀の顔面ではなく、平手だった。

「中々速くて重みのある突きするんじゃないか狂犬橋立……」

「そつちこそ、かてえ手だな。殴ったこつちまで痛いぜ……」

「っじゃあ俺のも食らってみろ……」

「いらねえよ……」

俺は古賀のパンチを2発かわした後、右足蹴りと左手パンチを1発ずつあげようと思ったけど全部ガードされてしまい、古賀は懲りずに攻撃を仕掛けてきた。

右膝蹴りを両手でなんとか防いだ、かなり強力だ。しかし今度は右手の本気パンチが飛んできて俺の顔面にクリーンヒットした。

「ぐあつ……つてめええ……」

今度は俺の右手本気パンチが古賀の顔面にヒットした！

「……おおお……」

ギャラリーの歓声が聞こえてきた。

気づけば周囲はギャラリーだらけ、みんな俺達と隼鷹高校のストリートファイトを観戦していた。止めに入る奴はいない、なんでだ？すげすぎるのかな？

「チツ！ん？」

「うおっ！！目…目があ！！」

俺は古賀の目に唾を飛ばした。

その隙に必殺橋立パンチを古賀の顔面に当てた。

「うおおっ！！…くう………」

「古賀あ！！俺に用があるんだったら手下使って奇襲させるっていう汚ねえ手使ってねえで自分で現れて来い！！相手してやるからよお！！！！」

俺は古賀の顔をボコボコに殴り続けた。

しかし古賀はまだ立っていた。

「隼鷹に喧嘩売るからだろうがゴルア……」

「相良の野郎までシメやがってよ…あいつと俺はいつか決着つけるって約束してるんだよ！！だからてめえなんかかシメんじゃねえよ！！！！」

俺はさらに古賀に暴行を加えた。

やがて古賀は倒れこんでしまいがそんなのもお構いなしに俺は古賀の事を殴り続けた。最初は止めようと力を入れる古賀だったが段々そんなのを感じなくなってきた。

「相良は俺がやるんだよ！！余計な事しやがってよ聞いてんのかタコ！！…ん？」

あっ、もう古賀さん伸びてる…

俺はふと勝政達のほうを見た。丁度誠が最後の一人を殴り倒した時だった。

「中々楽しかったぜ…いいねえ隼鷹って最高だぜ……」

「おい純、結構ボロボロだけど大丈夫か？」

「平気だ…俺は帰るぜ。報告しねえと…いくぞ誠」

「ちょ！待てよ！つてか俺一応先輩なんだから敬語使つてちょよ！」

「やだ」

「ひどい！」

あゝあ、勝つたはいいけどこっちも被害は甚大だ。

やられた場所がとてつもなく痛い…世の中広いな…たかが北の県庁所在地の底辺高校の番長がああクラスか…つてことは待てよ？ほかの県に行ったらもしかして古賀よりずっと強いヤンキーがいるのか？

もうヤンキーさんは勘弁だぜ……

誠の肩を借りてなんとか伊吹家に到着した。

「親父、今帰ったぜ」

「おう誠…怪我は大した事なさそ…つておい橋立君！！ひどい怪我だぞ大丈夫か！？」

「へっ…伊吹さん、シメましたよ…千尋を襲った奴のボスを……あ

あ……」

「お、おい橋立君!？」

「は、橋立!？」

なんかほっとしたら急に力が抜けて……はあ……

……

……

…

…なんだ?今度こそ知らない屋根だ。

しかも外は明るい…そういえば今日は土曜日だったな。じゃあ安心、俺は起き上がるがなんか体が痛い。でも制服は着ていた。

そうか…そういえば喧嘩の帰りに千尋の家に寄ったんだっけ?そこで倒れて……

ぐ

…腹が鳴った。そういえば昨日晩飯食ってねえな……腹減ったあ…
とりあえず帰らないと…今日はなんか俺の家でテスト勉強だつて話をしたようなしてないような…どっちだっけ？まあいずれにしても早く帰らないと。親も怒ってるだろうし。

とりあえず俺は扉を開けた。

するとそこには千尋が立っていた。

「「あつ」「」

声がハモった。

これは…相当気まずい。

「純…お父さんから聞いた。頼まれて……」

「ごめんまた喧嘩なんかして…あのお父さんドスとか持つてるから怖くてさ……」

「うちのお父さん怖いから別にいいよ……それより大丈夫？」

「まあ別にこれぐらい大丈夫だよ」

「つか千尋ハジヤマ姿、これは俺からしてみれば強烈すぎる…！半端じゃなくかわいい…けど。」

「…とりあえず、朝ごはん食べてかない？昨日晩御飯食べてないでしょ？」

「えっ？なんでそれを……」

「お父さんから聞いた」

あ、なるほど

つというわけで俺は伊吹家の食卓にありつくことになった。もちろん財閥の食卓だけあってやたらと豪勢だった。

「ちょ…これ食っていいのかよ……」

「いいよ、食べないの？」

「い、いただきます！」

えっ？お味？

そりゃあもうおいしいに決まってるじゃないですか。ただどよかったんだらうか？食ってっても。

「純、おいしい？」

「んー！うまい！うちの飯よりうまい！」

「だって、コックが作ってるし」

「えっ？マジ？」

「うん」

流石お金持ち…そりゃうまいに決まってるわ。

しかしどうしたことが、千尋の元気がないように見える。気のせい
か？

…いや、気のせいなわけがない。普段はこんなにおとなしい奴じゃ

ないぞ？

「千尋、どうした？」

「えっ！？」

妙に慌てて反応する。

「何かあったか？」

「い、いや…別に」

「なんかあったら言ってくれよ。相談に乗るからさ」

「う…うん」

ホントに一体どうしたんだろう？

微妙に顔が赤い気もするし、熱とかあったりして？

とりあえず俺は飯を食い終えるて立ち上がり、背伸びをした。

「はあ、あれ？千尋の父さん達は？」

「あ、多分朝早くから仕事」

「そうかあ…やっぱり忙しいのか」

まあどんな忙しいかは知らないけど…

まさか地上げとかやってたりして？ドス持ってるし…怖い。

よし、帰るか。

「あつ、純どこに行くの？」

「どっつて…帰るに決まってるけど？」

「怪我…大丈夫？」

「ああ…痛いけど大丈夫」

痛い⇨危険信号。

つまり大丈夫ではないんだが、まあ自走できるし、腹は満腹で雑魚いチンピラ程度なら倒せるぐらいの力は残ってそうだし、多分家に帰るぐらいなら大丈夫だろう。

「送ってく？」

「別にいいよ」

「でも親にどう説明する？」

「うっ！」

半分ニヤニヤしながら千尋はそういった。

確かに俺一人だとあんまり説得力ないな、ただでさえ信用されていないのに……やっぱりここは良き説明者として千尋の力が必要か？

「わかりました、俺の負けです」

「よし」

…なんだ？

千尋の顔が微妙に赤いがなんか少しだけ笑顔だ。

わからん、千尋が何を考えているのか…いや、普通に考えれば負傷者が自宅まで帰るのに同行するだけ、たったそれだけだ。

5分ぐらい待つと着替えた千尋がやってきた。

part 38 ・病室にて

あゝ…ちゆかれえたあゝ。

まだ朝なのがいい…なんでって？千尋と一緒に帰ったはいいけどさ…歩いただけで今日はちゆかれるうゝ。どんだけ昨日食らった攻撃のダメージが深いんだろう？

「…よう橋立」

「じゆ、純…」

「チツ、今井さんかよ」

俺は千尋の前に出てそう言った。

なんで前に出たかって？千尋を守る為に決まってるだろ。多分みなさん覚えていないでしょう、西園寺高校の今井が俺の目の前に現れた。2人の仲間を率いて。

「おうおう？怪我してるみてえじゃねえか橋立よお？聞いたぜ、古賀ぶつたおしたんだってな？隼鷹行つた奴からの電話で知ったぜ」

「っで、どうすんだよ今井さんよお？」

「バーカ、古賀ぶつ倒すような奴に喧嘩売るほどおりゃ馬鹿じゃねえよ。これからは仲良くしようぜ？」

そういつて今井は肩に手を乗っけてきた。

…ホントか？

「…つな!？」

ドスツ!！」

「おおっ!！」

腹に痛みを感じた。

気がつけば今井の右拳は俺の腹を直撃していた。完璧な不意打ちだった。

「な…何しやがんだてめえ……」

「へっ、ボロボロだからな、日ごろの恨みを晴らすんだよ。おめえら女抑えろ!!援軍呼ばれると厄介だからよ!!」

「「はい!！」」

「きゃっ!！」

「ち…千尋……」

まずい、千尋が男2人に捕えられた。

助けなければ!畜生なんで翌日からこんな目に遭うんだよ…そんなり日ごろの行いが悪いのか俺って…

…だけど、今は俺の事はどうだっていい。それより俺は千尋を助きたい。

「て…てめえら千尋を離せ……」

「どこ見てんだよオラアツ!!!」

「うっ!!」

今度は膝蹴りだ。

俺は口から吐血、今井が俺の前からどけたからそのまま地面にダイブ!

顎打った!

「今井さん、女はどうします?」

「そうだな……」

「……待てやコラ……」

「アア!? なんだくたばり損ない!?!」

よし、今井達の注意をこっちに向けることに成功した。

戦闘不能の俺がどうするかって? そんなの決まってるじゃないか? 俺を好きだけ攻撃していいから千尋には手を出さなって頼むんだよ……聞いてくれるかわからないけど僅かな可能性に賭ける。千尋には無傷でいてほしい。

「好きだけやれよ俺を……その代り千尋に手え出すんじゃないぞ……」

……

「……純?」

千尋が小さく俺の名前を言った。

よく見えないが涙目のようだ……っで肝心の今井達は……

「好きただけえ？」

「どうします今井さん？」

「そうだなあ…おい女、そつから動くなよ？動いたら殺すからな？」

「つー！」

千尋はかなり怯えている様子だ。

そして今井達の視線は再び俺に向けられた。

「けつ、そういうわけだからためえだけ攻撃する事にしたぜ。つたく、馬鹿な男だなあ…なんでそんな女一人の為にムキになるんだよ？狂犬の名に恥ずる行為じゃねえのかよ？」

もう俺の頭の中は千尋を守ることだけで一杯。

後先なんて全く考えていなかった。

「へっへっへ…誰が狂犬だよ…：勝手につけやがつて…俺は千尋が好きただけだ、千尋を守る為なら命捨てれるぞ…：ためえに愛する人の為に命捨てるなんて事する根性ねえだろ？」

「えっ？…じゅ…すう…すうひい？…」

俺の目には顔を赤く染めている千尋が映っていた…：つがそれどころじゃなかった。

「…千尋には手を出すなよ…：手出したら承知しねえぞ、どうしたんだ今井さんよあ？…：俺は千尋の身代りにもなるって言うてんだよ…：さっさとやれやゴルア…：…」

それを言った後、腹や首に激痛が走った。
完全にご立腹の今井達が俺を本気で攻撃し始めたのだった。

「この野郎!!」

「女の前だからって格好つけてんじゃねえよコラッ!」

「死ねやコラァッ!!」

もうだめば。

立ち上がるうにも立ち上がれない、俺はもの見事に今井さんたちにフルボッコにされた。俺に対する暴行は15分ぐらい続いた。俺の体ももうボロボロ、立つ力すらなく、今井達が去っていくのを目撃した瞬間に全身から力が抜けていった……

……

……

…

……うつ……畜生全身痛い……

ここはどこだ?知らない天井だ。

「…病院か」

流石に病院送りだったか…

そりゃそうだよな。ただでさえひどい怪我してたっていうのに散々やられたんだもな。なんだよ…今井のような普段はカスレベルの奴にすら勝てないぐらいに俺は弱ってたのかよ…でも最大の目的を達成したからある意味では俺は満足している。

棚や椅子にはいくつかの物が置いてあった。

…あれから数時間ってところか…まあ届いていてもおかしくはないか。椅子には林檎などの果物が入ったやつ、棚には姉ちゃんと兄貴からの手紙、んでもってベットには何故か軍帽があった。多分俺が軽度の軍オタだって事を知ってる爺ちゃんからのプレゼントだろう。普段は厳しい事を言うくせにこういう時には優しいんだから、あの人は…

まあ会ったら会ったでカンカンに怒ってるんだろうけど…

ガララ…

扉が開くと奴らがいた。

そう、我が友達が、一人を除いて。

「あつ、目覚めてた？」

「ありゃ…でも話に聞いていたほど重傷ではなさそうね」

「おう純、お前今井に不意打ちされたんだってな？」

「きーちゃん大丈夫？」

「痛そう…」

「なんだよ？不意打ちでやられたのかよ橋立？…てめえ倒すのはほくちんだからよお今井とかいう奴シメてやんぜえ？」

「なんで庄司だけは好戦的なんだろう…
っーか俺と戦うことはまだ諦めてないのかこいつは。」

「庄司は黙ってやがれ、別にさ、痛いけど致命傷じゃないだろうし。どうせ数日経てば退院だよ」

「そっかあ、あつ…あたしトイレいってくるわ」

「あつ！俺も！」

「ぼ、ボクもいつてきまーす！」

…なんだみんなして？
わざとらしくトイレに行きやがった。腹でも痛いんだろうか？
そんな感じで現在病室には俺と千尋の二人つきりになった。いつもならわーいって喜べるけど…今度だって俺のせいで千尋を巻き込んでしまったし、素直に喜べない…

「…あのさ、純」

「…なんだ？」

「あのさ…なんで純って…私の為にそんなに必死なの…？」

「えっ？」

それはあまりに突然だった。

「守りたかつたんだよ」

「…守り？」

俺はありのままの事実を言うことにした。

それがいい、それでダメならもう諦めようという決心がついた。

「なんていうのかな…ほっとけないんだよ。そりゃあ普通そうかも
しれないけど、千尋ってピンチの時に弱いタイプだし、なにより財
閥の令嬢ってだけで狙われるかもしれない。ましてやいつのまにか
ヤンキーさん達の間で有名になってしまった俺のせいで千尋が巻き
込まれるのが許せない。その責任として俺は千尋を守りたいんだよ」

「ちょ…そ…」

「いつだっけな？…うちの店に西園寺のボンクラがやってきてその
後揉め事になった頃かな？その頃から守らなきゃいけないって密か
に思うようになって…香取が千尋にセクハラしてきた時に本格的な
ものになったんだ…もしかして…迷惑だったか？」

千尋が迷惑だったら転校だって俺は考えている。千尋が俺の事迷惑
だったらし川だろうが西園寺だろうがいつて狂犬橋立と言われ続け
て生きてやる。俺と関わらないほうが幸せなのかもしれない。

だけどそれは千尋本人の問題、だからあえて口出しはしない。
だから千尋の決断によって俺の今後は変わる。

「そ、そんな事は……」

「迷惑だったら……俺は千尋の前から去る！俺がやる事は千尋にしては迷惑かもしれないし……お前がモテすぎて悩んでいるって事もわかってる。だからあんまり男に付きまとわれたくないってのもわかる」

「えっ!?!…な、なんで純が?」

「日ごろの行動見てればわかるよ、それにアレだろ……前にみよんが千尋が中学の頃なんちゃらって言ってたけど……それもその事なんだろう?」

「……」

千尋は小さく頷いた。

そして千尋は深呼吸をした後、口を動かし始めた。しっかりと声は聞こえた。

「……中学生の頃さ、っていうか私ずっと何故か男子にモテてたの。それで下駄箱にラブレターが一杯っていうのはいつもの事でさ、告白もすぐくされた。それがすぐく嫌だったの……一回脅迫されかけた事もあった……」

最初は普通に話してくれていたのに段々千尋の表情が暗くなっていた。

「みよんが助けてくれた以降は減ったけど……それでもラブレターは続いて高校に入ってから……もう嫌なの……」

気がついたら千尋の瞳には涙が溜まっていた。
その涙は話が進むにつれて流れていった。

「だから…ホントは男が苦手なの…全然そういう風に見えないで
しょ？無理にふるまっているだけなの…！」

そう言い切ると千尋は本格的に泣き始めた。

単純なように見えても千尋にとっては嫌な事、俺だってホントはヤ
ンキー呼ばわりされるのは嫌なんだよ。喧嘩で勝ってもほかの奴と
違ってあんまり嬉しくない、だから千尋の気持ちはわかる。

「でも…だからって純が去る事は…」

そっちのほうに突っ込んできた。

「俺、やなんだよ…俺の近くにいたるせいで俺の揉め事に千尋が巻き
込まれる事とか…だから守りたい。でも千尋は男に付きまとわれる
が嫌いだろ？だから俺にはどうしようもない…っへへ、笑ってく
れよ…目の前にいる情けない男をよお」

「…ホントだね…笑ってあげる。その代わりに…」

はい！？

ななな、なんだと！？

…状況を説明すると千尋が日本語で接吻をしてきた。
なんとというか…始めただ、こんな感触は…これがキスとかいうやつ
か…人生で初めて経験した！

「去るなんて事、しないで」

「？」

「純が桑園から去るんだつたら私も一緒についていく……もう……決めた。私、純に一生ついていく」

「……そ、それ……正気か？……いいの俺なんかで？馬鹿だし家族にすら煙たがられるし、このままだとニートルートに突入するかもしれないし……おまけに喧嘩が強いぐらいしか取り柄がない俺だぞ？」

「自虐ネタやめい！私もやめるから純もやめて」

「どうやら……千尋は元気を取り戻したみたいだ。」

「これでいい……のかな？」

正直俺なんかと釣り合う相手じゃないと思ってる。片思いだけでも十分な気がしてきた。

「純は喧嘩が強いだけじゃない。優しくて……正義感あって……とにかくなんていうか……あ、頭はともかくすっごくいい人だと思う」

「頭はともかくって地味にひどくね!？」

「冗談冗談……でも真実だからね。純は自分で思ってるほど悪い子じゃない……私にとっては他の男とは違う……別格だよ」

ズキーン!!

くっ! 負けたあ!

どつやら俺は恋のキューピットという名のスナイパーに狙撃された
ようだ！

まずい、傷が深いぞ、電撃戦を受けたみたいだ！

「つつ…つまり？」

「優しさと強さと私に対する理解度にホレた！」

あんたはラ チさんかよ！

…しかし冷静になればこれは告白、つまり…俺ってもしかして勝利
した！？

俺も千尋の手を握った。すると千尋はとても嬉しそうに笑った。

final 新天地へ

それからちよいと経ち…

すっかり怪我也よくなつて俺はピンピンしていた。

畜生！今井の野郎…目茶苦茶しばきたい！！

よくもこの橋立純を入院させてくれやがったなあ！！

…… だけどそのおかげで俺はついに千尋の彼となった…つまり俺は特に作戦も考えずに戦いに勝利した！

千尋はほかの男よりも俺がいいと選択してくれた。

目茶苦茶嬉しいぜ今日から毎日楽しみだぜ！

つだがしかし、今日は俺、ある事情により遅刻いたします。一応学校側には病院にと説明しておいたが実際俺が向かった場所は西園寺高校付近だ。何故にかというと…今井さん達に報復じゃあ！！

時刻は8時25分…来るか？奴らは？

…おつ、丁度いい所に今井さん発見、人数は今井も含めて3人…俺をボコツたボンクラどもだ。よくし、先週の恨みを晴らしてやるぜ…

俺は今井の前に立ちふさがった。

「な、なんだてめえ！！」

「は、橋立え！」

「……なんだよ、また入院してえのかよてめえは？」

すっかり強気ですねこの人たち…

「バーカ、もう入院しねえよ……入院すんのはてめえらじゃ……！」

「うっ……！」

「おうっ……！」

「ぎゃっ……！」

全員1発KO！

ギヤツハハハ……！どうだ参ったか……？俺をボコった事と千尋に恐怖を与えたまま逃げれると思うなよ西園寺のボンクラ……！」

「うっ……て……てめえ……！」

おっ……今井さんだけ立ち上がった。

流石西園寺のNO.2だけありますな。

「……こんな事してただで済むと思ってるのかよ……！」

「……じゃあ二度と俺らに喧嘩売んなよ？」

「……つざけんなあ……！」

俺は今井の攻撃をかわし、左足で華麗なキックをお見舞いしてあげた。

ド……ッ……ッ……！」

「……ああ……！」

今井は小さく唸ったがそれ以外に特に反応はなし。
そのまま地面に叩きつけられ、おねんね状態になった。

「ったく、西園寺のボンクラが…二度と面見せんじゃねーぞ」

それだて言い捨てて俺はそのまま学校に直行した。

あゝいい体操になった。でも久々に大暴れしたから腹減ってしまっ
た。

つというわけで学校…

「おっ？ 純生きてたか」

「生きてるわ」

「とりあえずさ、橋立…いろいろと…おめでとう…」

「はあ？」

みよんも勝政もチャラ男もみんなにやにやして俺と千尋のほつを見
てくる。

ま、まさか!?

「ち、千尋…何か喋った？」

「いや？ 別に？」

本当に知らないようだ…まさか誰か盗聴しやがった!?
キヤーツ!!!!

とりあえず勝政の胸倉を掴んだ。

「てめえ何処で情報手に入れた、アア!？」

「なんか今日のお前喧嘩してきましたって感じだな……まあいいや、あんだだけ大きな声で病室でいろいろ話してたら聞こえるっての」

「そんな!?!」

「……もうダメだこりゃ。」

「まあまあ……知られて恥ずかしい事でも」

「恥ずかしいわ!! 頼むからこれ以上噂を広げないでくれッ! みよん、後は頼んだ!」

「ムーリ」

「ひどいっ!?!」

「よっ! 日本一!」

「チャラ男はウザイッ!」

「女ごときでうかれてんじゃねーぞ」

「庄司は相変わらず根暗!」

「きーちゃんひどいッ!! ボクというものがありながら!」

「ほんとひどいよ!」

「以外にやるわね純って……」

なんで千夏達と姉ちゃんがいるんだよ!?
一体誰だ呼んだ奴!?

……いや、もう一人しかいないだろコレは?

……勝政アアアアツ!!!!!!……はあ、こんな奴に怒っても
しょうがないか。

「ふふっ」

ま、俺は笑顔の千尋を見ているだけで幸せだわ。

これからもこんなふうに、千尋とずっと一緒にいればなあと思う。
だって千尋は……俺にとつちゃあ始めから特別だったんだあ!!よ
うやくドサクサに紛れて告白できて恋人同士に……その事を考えた
ら少しは今井の野郎にも感謝とかねえとな。悔しいけどあいつの
おかげで俺、千尋の事が好きだって本人の前で言えたんだし。

その分入院生活は苦しくてひどかったけど……

「どうでもいいけど情報の広がり早すぎだろ……」

「それが現代社会なのだよ純とやら!」

な〜に頭いいフリしてんだ勝政の野郎ツ!!

つてか100%間違はなくアンタのせいだよなこの事が広まったの
は!?

「女ごときでうかれてんじゃねーぞコラ?」

大事なことだからって二回も言わんでええわッ!!!
つとまあこの人たちには困りながらも何気に感謝はしていたりする。
こいつらのおかげで何だかんだ言ってお楽しかったしな。正直俺も入
学時はすぐに辞めてプーになるかと思っていた。

それがまさかこいつらと会って予想外に楽しい事になるとは……ま
あ喧嘩は完璧余計だったけど。
しかも勝ち続けてたら勘違いされてヤンキーさんに襲われるようにな
なっちゃったし。

……つても今井の野郎に負けたからもう俺と喧嘩しても何の意味も
ない。

むしろ今井がこれから大変だろうな。ざまあ（笑）。
即ち長き苦勞の末、ようやく普通の生活が送れるかもしれない。今、
そんな状況だ。

それに俺は今まで以上に責任を持って生きなくてはならなくなった。
護らなければならぬ人ができてしまったからだ。

だけどその分人生は充実することになるんだろう……
……そういえば千尋ってお嬢様だったよな？噂によると街中の学校
がいらしくてここにいるんだよな？
でも頭はいい、だからそのうち大学とかに進学するんだろう。

つて事は待てよ？いずれは離れるかもしれない。
所詮俺は喫茶店の息子だ。財閥の令嬢様とは絶対釣り合わないし、
親同士だって仲が悪くなるかもしれないし、なにより庶民の俺とお
嬢様千尋との付き合い、友達までならOKだろうが小指を立てるア
レは流石に認めてくれないだろう。

だったらいつそ千尋とどっかいつちまおうかな？

今度俺が誠の奴をシメて伊吹家継ぐように言わせて……って完全極悪人だな俺（汗）。

ま、今まで散々喧嘩してきたんだ。これぐらいどっつてことないや
！！

……いや、あるか。

でも千尋とずっと一緒にいたいのは確かだ。

ようやくなれたんだからな、『コレ』に。

……そつだ。

今日から真面目に勉強でもするか。出来るかどうかはわからないけど大学にいけるぐらいの頭もつとかないと。

そつ、伊吹千尋という名のたった一人の女の子と同じ所に行けるぐらいの！！！！

無理かもしれないけど今できる事したらそれくらい、つくづく無力かつ馬鹿な俺にかつてとんだけサボっていたかを後悔する。

「やべっ！ 先公きたぜ、さっさと座るべっ！！」

勝政が走る。

まあいつもの光景だ。

俺と千尋の席はわりと遠い、でも二人は近い。

……

……

…

「…はっ!？」

もう帰りのSHRかよッ!…!

あゝあ、完璧寝ちまつたぜ……

「純、帰ろ?」

「おう、ちよつとと待っててくれ」

これからはきつとアレだ。

語るまでもない事実だろう多分。

俺が男を鍛える期間、あの親父さんに認められるぐらいのな。

そのためにも力強さは今のままでいいとして頭のほうをなんとかしねーとな。

そうは言いつつもその後、俺達はいつもと変わらぬ日常を送っていた。

いやあ正確にはちょっと変わってる。俺と千尋は休みの日によく街中に出かけるようになった。古賀を倒したただけあってヤンキーさんも俺を恐れて避けるようになった。おかしいな、今井には卑怯な手で負けたけど……やっぱ古賀ってすごい奴みたいだな。

それに……なんか最近急に勝政とみよんの仲が良くなった気がする。あいつらもしかしてアレなのかな？まあ突っ込まんほうがいいだろう。下手に気をつかわせるのはあの二人も嫌だろうし。

「ねえまだ？」

「お、ごめん今行く!!」

それより重要なのは俺と千尋……

俺、頑張るぜ……幸せってもんを掴む為にな。

それから2年とちょっと後ぐらいかな？

俺は席から千尋の姿を見ていた。千尋は校長からアレを受け取っている。

今日は卒業……もう皆さんの進路は大体決まっている。みよんと勝政のカップルさんは予想に反して長く続いているようで二人で地元の私立大学に行くらしい。当初勝政は家業を継ぐ予定だったがみよんと一緒にいる為だとか。っで金とかはバイトとか親しい人の寄付で貯めたらしい。何気にあいつの家人脈に恵まれているらしいし。

千夏と紅音も地元の短大行き、チャラ男はどっかに就職したらしい。そして千尋は本州のほうの某国立大学に受かったらしい。えっ？俺？ダメ元で千尋と同じ所を受けたっけ見事合格しちゃった。

いやあいくら猛勉強していたとはいってもこんなアツサリ行くとは……まさに主役特権？奇跡にもほどがあんぜツ！！

卒業式が終わった翌日からもう引越騒動、姉ちゃんはうるさいわ父さん母さんは相変わらず冷静だわ爺さんはうるさいわ……
っでもそんな家族も悪いとは思っていない。むしろこの人たちがいたからこそ今の俺があるんだ。いつかは地元に戻って親孝行したいもんだな、まあその頃爺さんはお星さまになってるんだらうけど（汗）。

駅で千尋と合流し、家族や仲間と別れを告げる。

そして空港行きの列車は走りだす……

「……純、短かったね」

「ああ、3年ってこんな短いもんだっただか？」

中学の3年間はマジで長く感じたんだけどな……

「していないしてないッ！」

「むう〜……責任取ってよ？」

「責任？」

「そう、ずっと純に付きまとうから」

「おっ？ 言ったな？ ようし新天地行ってなんかあっても絶対離さんからな」

なーんて楽しそうに言ってみたりする。

あのキャラの濃い連中から離れると思った時は千尋と一緒にいえどもどんな退屈な生活が待ってるか想像すらできなかった。

……でもこの分だと大丈夫そうだ。2人でもやっていける。多分、一生な。

列車は故郷を離れてゆく……いつかは忘れるかもしれない思い出を残して。

だけど忘れる気はない……絶対ジジイになっても覚えててやる……

故郷での日常と闘争と恋劇を……
ラブストーリー

final 新天地へ（後書き）

今までご愛読ありがとうございました。

そして散々待たせた挙句ちよつと無理ありのありがちな最後で申し訳ございませんッ！

それでも予想以上のお方がご愛読になられている事に驚きました。本当に今までありがとうございました。そしてこれからも駄文ばっかな自分ですがよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0515/>

橋立純の日常

2011年10月6日19時24分発行